2020年 第42回　IC国際フォーラム

The 42nd IofC International Forum

主題「危機における変革力　～ピンチをチャンスに～」

Transformative resilience in times of crisis

“Recognizing a crisis as an opportunity ！“

副題　「私達はどんな未来をつくりたいのか！」

What kind of future do we want to build?

日程：10月24日（土）～25日（日）

オンライン会議

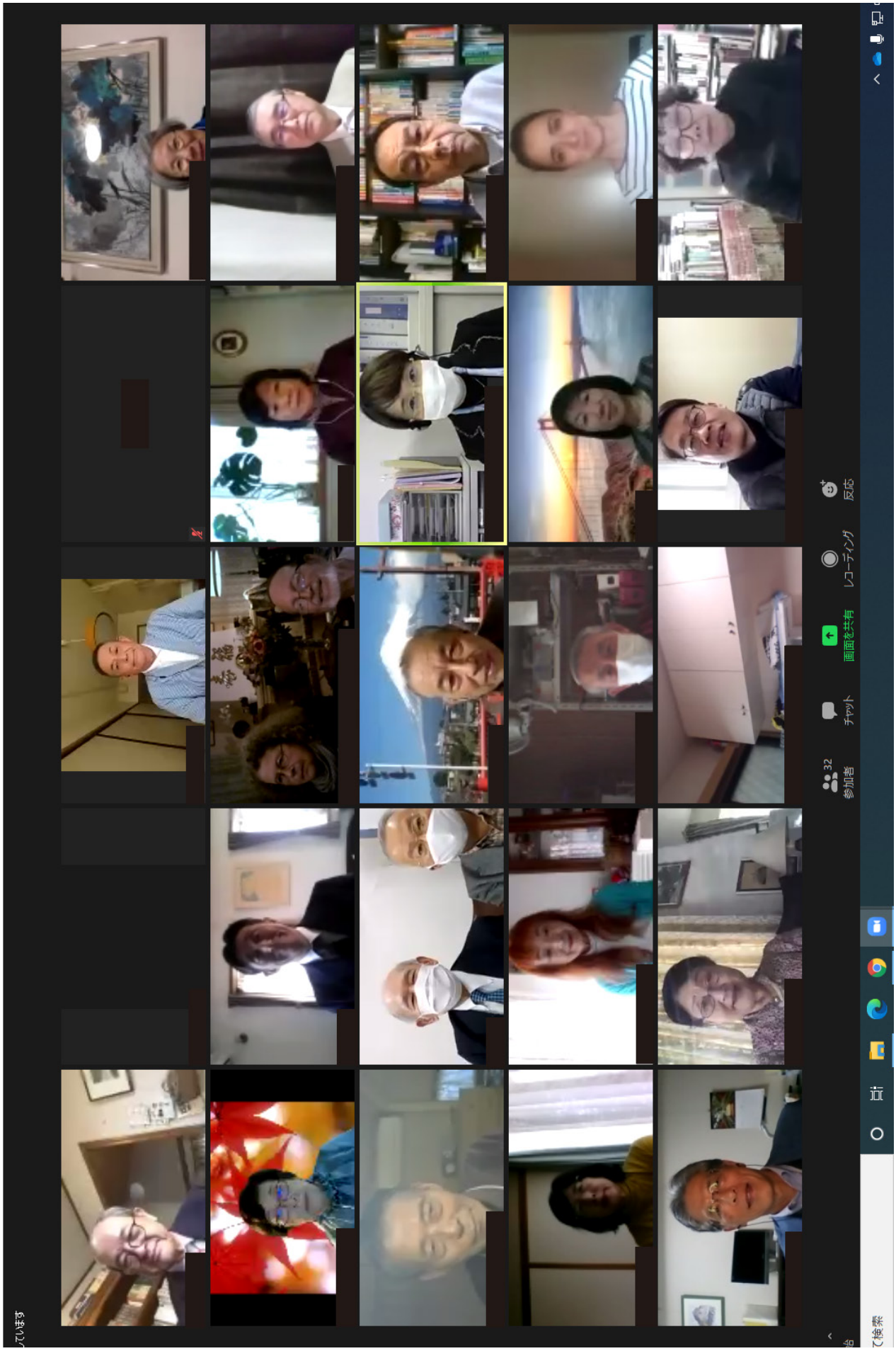
公益社団法人　国際ＩＣ日本協会

International IC Association of Japan

目 次

プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Page 3
開会のメッセージ（国際 IC 日本協会　矢野弘典氏）・・・・・・・・・・・・・・ 4
海外参加者のプロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
静かな時間　Jean Brown 女史（IC オーストラリア）・・・・・・・・・・・・・・ 7
基調講演　Surech Vazirani 氏（IC ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ会長・インド）・・・・・・・・・・ 9
講演　Ramez Salame 氏（IC レバノン）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
講演　Wadiaa Khuory 女史（IC レバノン）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
インド セッション　Ravindra Rao 氏（IC インド）・・・・・・・・・・・・・・ 18
Leena Khatri 女史（IC インド）・・・・・・・・・・・・・・ 20
Penuo Hiekha　女史（インド・ナガランド）・・・・・・ 21
Himanshu Bharat 氏（インド・ボパール）・・・・・・・・ 22
Damko Wangyal 氏（チベット難民）・・・・・・・・・・・ 23
Siddharth Singh 氏（IC インド）・・・・・・・・・・・・ 25
静かな時間　James Cordiner 氏（IC オーストラリア）・・・・・・・・・・・・ 26
日中韓フォーラムのセッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
学校訪問プログラムのセッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

10 月 24 日（第1日目）



2020 国際フォーラム　プログラム

日程：10 月 24 日（土）～ 25 日（日）　[2 日間]
場所：オンライン会議

テーマ：主題　「危機における変革力　～ピンチをチャンスに～」
Transformative resilience in times of crisis. Recognizing a crisis as an opportunity ！“
副題　「私達はどんな未来をつくりたいのか！」
What kind of future do we want to build?

10 月 24 日（土）

9:45	開会式　矢野弘典氏（国際 IC 日本協会 会長）
10:00-11:00	静かな時間　Jean Brown 女史（IC オーストラリア）
11:00-12:00	基調講演　Suresh Vazirani 氏（IC インターナショナル会長・インド）
12:30	映画上映　「平和を築いた人（フランク ブックマン博士）」
14:00-15:00	講演　Ramez Salame 氏（IC レバノン） Wadiaa Khuory 女史（IC レバノン）
15:00-16:00	ファミリー グループ ミーティング
休　憩	
19:00-21:00	インドのセッション　Ravindra Rao 氏、Leena Khatri 女史、Penuo Hiekha 女史（インド・ナガランド）、Himanshu Bharat 氏（インド・ボパール）Damako Wangyl 氏（チベット難民）、Siddharth Singh 氏（IC インド）

10 月 25 日（日）

9:30-10:00	静かな時間　James Cordiner 氏（IC オーストラリア）
10:00-11:00	日中韓フォーラムのセッション　成豪哲氏（国際 IC 日本協会 理事） 車光善氏（MRA-IC 韓国総裁）のメッセージ これまでの参加者 10 名によるフリートーク
11:00-12:00	ファミリー グループ ミーティング
12:30	映画上映　「平和を築いた人（フランク ブックマン博士）」
14:00-15:30	学校訪問プログラムのセッション　長野清志氏（国際 IC 日本協会 顧問） 13 名の学校訪問参加者の経験談と今回のテーマに沿った意見の発表
15:30-16:00	フォーラム振り返り
16:00	終了

開会のご挨拶

公益社団法人 国際 IC 日本協会
会長　**矢野 弘典**

この国際フォーラムも、今回で第 42 回を迎えました。開催にあたり、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

世界中がコロナ禍にあるさなか、国内外を問わず人の移動がままならない状況にあることを考え、今年はズームによるテレビ会議の形で開催することとしました。wi-fi 環境が地域によって異なり、また運営面で行き届かない点もあるかとは思いますが、その場合はご容赦頂き、皆さまのご協力をお願いする次第です。

さてまず初めに、外国から大勢の方々にご参加頂いたことについて、深くお礼を申し上げると共に、皆さま方を心から歓迎いたします。とりわけ IC International の Suresh Vazirani 会長には基調講演をお願いし、レバノンの Ramez Salame 氏と Wadiaa Khuory 女史にも講演をお願いしました。

また、静かな時間を共有しつつ、インドでの活動・日中韓フォーラム・学校訪問プログラムなどのセッションでは多くの方々から、深いご見識とご経験を伺えるものと楽しみにしております。

今回のフォーラムのテーマは、次の通りです。

「危機における変革力　～ピンチをチャンスに～」

“Transformative resilience in times of crisis”　～ Recognizing a crisis as an opportunity ～

危機を転じて好機と為すことは、誰しもの願いであり、何ごとかを為そうとする人々にとっては、究極の課題です。家庭、国、ビジネス、教育などあらゆる分野で、崩壊の危機と再建への取り組みが為されてきました。原因の大部分は人にあり、天災や疫病という自然現象もありました。今後これをどうやって乗りこえることができるのかが課題であり、今回のフォーラムのテーマでもあります。

ご参考までに、3000 年来東洋に伝わる箴言をご紹介します。

「窮まれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し」

その意味は、絶頂期も最悪期も決して永くは続かない、必ず変わる、だから良い時にも驕り高ぶるな、悪い時にも希望を失うなということです。その変わり目には必ず兆しが顕れる。危機と好機の間には必ず転機があり、その転機は兆しをつかんだ人にしか分からない。

ではどうすれば転機となる兆しを掴めるか。これに対しては、現場に立って考え行動するという現場主義に徹して、感度を磨けば良い、それ以外にはないと教えているのです。こうした物の考え方と行動のあり方は、心ある人々に多くのヒントを与えることでしょう。

明日は日中韓フォーラムや、学校訪問プログラムへの参加者の話を聴くセッションがあります。前者は学生であり、後者はＩＣでインターン教育を受けた若者です。次代を担う青年たちです。その経験や将来への抱負を聞き、私たちはできるだけの支援をしていく必要があると思います。

そのことによって、ＩＣの宝である信頼関係をベースにした人的ネットワークを、将来にわたり世界に広げることができます。一人ひとりが掲げる一灯（a candle）は小さくとも、それが萬灯となれば、世界を照らす光となるはずだと私は信じます。

皆さまの積極的な参加と相互の切磋琢磨を期待して、開会のご挨拶に代えます。有り難うございました。

以上

海外参加者のプロフィール

スレッシュ ヴァジラニ氏（インド）　IC International 協会会長

誠実さ、信頼、透明性の原則に基づき、100 カ国以上に高品質の医療機器を輸出しているインド最大の多国籍医療診断会社 TransAsia/Erba グループの創設者で、現在はマネージングディレクター。

「変化への取り組み」の深い精神的ルーツのもと、豊富なビジネススキル、財務スキルを生かし、IC インドの理事を 20 年務める。インターナショナル IC のアイデンティティが、各国のチーム、スイスのコー、MRA/IC アジアセンターでの全てのプログラムにおいて相互に連携するグローバルなネットワークを構築することを目指している。

ジーン ブラウン女史　（オーストラリア / 英国）

54 年間にわたり IC で世界中において活動してきた。英国生まれでオーストラリア人のマイク・ブラウンと結婚。二人の子供と 5 人の孫がいる。 クリエーターズ・オブ・ピース・サークルの設計者であり、世界的なクリエーターズ・オブ・ピースの女性イニシアティブで採用されている主要な方法論の創始者でもある。インドに約 15 年間住んでおり、その中には青年のリーダーシッププログラム「アクション・フォー・ライフ」の講師を務めた経験も持つ。 南スーダンとオーストラリアの和解の取り組みに従事。現在もオーストラリアの IC のアウトリーチに密接に関わっている。

元インターナショナル IC 長老メンバー。

ラメス サラメ氏（レバノン）

弁護士。20 代から MRA・IC の精神にコミットし、法律事務所を開業しながら、中東諸国の人々及び世界各国の人々との間で、信頼構築の働きに尽くしてきた。

ワディア コーリー女史（レバノン）

ザフレ市出身。2001-2002 IC AFL（アクション フォー ライフ / アジア・世界の青年のためのリーダーシップ研修）に参加。国際 IC 日本協会の学校訪問プログラムに参加。レバノンの 3 つの大学で講師を務め、シチズンシップ、ダイバーシティマネジメント、持続可能な開発に関するトレーナを務める。元インターナショナル IC 評議委員会委員。

ラビンドラ ラオ Phd. 氏（インド）

International IC 長老メンバー。前 MRA/IC 協会インド理事長。インド国内、世界各国の人々の心のケアーに従事している。歯科医。元 インターナショナル IC 評議委員会委員。

リーナ カトリ女史（インド）

元 インターナショナル IC 評議委員会委員。AFL 始め、アジア・太平洋諸国の青年らのための研修の指導に従事している。

ペノ ヒエカ女史（インド ナガランド）

インド北東部のナガランド出身。 14 年前に IC に出会った。 インターンとしてパンチガニーにあるアジアプラトーに来て、その後インターンコーディネーターとしても働く。訪日経験のある Niketu や Christine Iralu と緊密に協力しており、現在はインド北東部のさまざまな地域の人々と協力しています。 IC インド協会の理事。

国際 IC 日本協会の学校訪問に参加。インド・アジア諸国の青年らとのチームワーク形成に尽くしている。

ヒマンシュ バラット氏（インド ボパール）

2009 年に IC に会った時は、北インドの社会活動家であった。IC でフルタイムのボランティアとして数年間働いた後、現在、マディヤ州の州都ボパールで妻と娘と生活している。 プラデーシュ。 これはインドで最初に幸福局を設立した州であり、彼らは IC インドに対し、特に内なる声を聞く定期的な慣行について州政府職員と市民を訓練することによって彼らが協力関係となるよう要請しました。 これは州に多くの変化をもたらしました。 ヒマンシュはこれに取り組んでいます

ドマコ ワンジル 氏（チベット難民）

6 歳からインドに住むチベット難民です。インドでは、チベットのダライ・ラマ法王と、多様性と思いやりと寛容の精神を持つ多くのチベット人が住んでいることは本当に幸運です。ワンジル氏は石絵と Zentangl（注：ゼンタングル [Zentangle] は Zen ＝禅）と Tangle ＝絡まる　を合わせた造語で、簡単なパターンを繰り返し描く書き方だけで緻密なアート作品を完成する）を専門とするアーティストです。彼はソーシャルワークの修士号も取得しており、現在 IC で働いています。

シダラット シン氏（インド）

過去 20 年間、リーダーシップ開発と紛争変革の分野で働いてきたファシリテーター兼コーチです。 彼はインドの IC コミュニティで育ち、1997 年から自身が IC に関与するようになった。彼は、インドとその他のアジア太平洋地域の両方での活動や、スイスのコーでのプログラムに関与してきました。 彼は現在、IC インド協会の理事であり、インドの IC の会議およびトレーニングセンターであるアジアプラトーのディレクターも務めています。 彼はまた、アジア太平洋コーディネーショングループのメンバーでもあり、この地域の IC チームとプログラムにサーバントリーダーシップを提供することを目的としています。

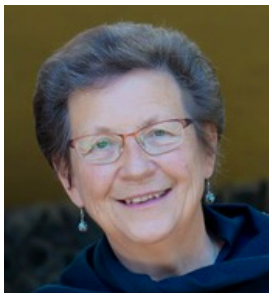
シン氏は、自然と人生から一生学びつづけながら生きることをモットーとし、人として学ぶべき全ては、自然から学ぶべきであることを信条にしています。

ジェームス　コーディナー氏（オーストラリア）

システム設計者､IT 開発者。現在はオーストラリアのシドニーでライフコーチングを学んでいます。ジェームスは約 10 年前に国際交換留学生として東京に 1 年間留学したが、日本への情熱を失ったことはなく、いつも旅行に行ったり友人を訪ねたりするのが大好きです。オーストラリア、インド、日本、インドネシアでの「変化への取り組み」を通じて、異文化間のグループと仕事をした経験がある。内なる癒しと変容へと向かう個人的な旅は、コーチングの分野へと彼を導きました。

「静かな時間」

（2020 年 10 月 24 日）



ジーン・ブラウン女史

皆さまにお会いできてとても嬉しく思います。

「静かな時間」について、分かち合う機会にお招き下さり有難うございます。「静かな時間」を持つことは、これまで私の人生で 50 年以上にわたり、切ってもきれない最も大切な生きる上での舵取りです。そして、夫のマイクとの 45 年間の結婚生活においても、また、とても重要な役割を果たしてきました。

何ひとつ確かなことのない世界危機の現状にあって、私たちが回復力（生きながら得る力）を得るために、この静かな時間こそが、最大のツールです。「静かな時間」は、心の奥深く内なる声に耳を傾けるスペース（空間）であり、静かな時間を持つことで、繋がり、是正、新たな方向性を見出す時間でもあります。

最も深い真実につながる時間、私たちが存在する根源、私たち一人ひとりの心の中に現存する、人智を超越した限りのない愛。宗教や文化の伝統では、それぞれ違う名称で表現しています。静かに座し、自我に覆いかぶされている、その心の奥深いところに、静かに心を寄せ、心の扉を開き、自分で予定していたこと、自分が求めている快適さえも手放すことで、私たち自身よりも、偉大な智恵に気がつきます。私たちが、全ての中心ではないことを認識します。手放すこと、そして受け入れること、この二つが、何事にも執着しない生き方の真実です。

「静かな時間」は、まず手放すことから始まります。もっと大事な仕事に時間が使えたのにと、思っている自分の考えを手放すこと。自分の心を消耗させているプライド、傷心、嫉妬心などを、手放すこと。私たちの持っている先入観を、創造の空間に託すこと。ある人々はそこに留まることで、深い真実に繋がり、心の平穏を見出しています。

しかし、その次に是正が有ります。これがまた静かな時間の中で、面倒な、心地よくない点でもありますが。何年も経った現在でも、自分の間違いに気がつきます。「ごめんなさい。」と言うのは、なかなか言いにくいですね。私が注意して、改めなければいけない点は、誰かを、充分な愛情を持って受け入れることなく、裁いてしまうことにあります。ある時は、先入観によって、配慮が欠けていたり、もしくは人を許すことに時間がかかったり。自分の心の在りようを正すことで、自分のプライドや防御心の存在を認め、受けとめ、それらから自分の心を解放する、とても貴重な時間となりえるのです。ある人々は、自分がどんなに傷ついているか、否定的な考えに留まっていることに、快感を得ている人もいます。自分が被害者で居ることの安心感に留まっているのです！私自身もその罠にはまってしまったことがあります！責任をとらない方が楽で居られると、あえて新しい変革に導く自由を見つけない選択をしているのです。

そして新たな方向性を受け入れること。

IC では、多くの企画、プログラムを実施していますが、その働きの中心を担うのは、私たち一人ひとりの個人にあります。年齢を問わず、どんな環境に置かれていても、心の声に聴き従い、実践をし、内なる心の声の導きによって生きる人々が、どこで、どんな人々との出会いの中でも、チェンジのメッセージを伝えている人なのです。

私たち一人ひとりに役割があります。私たちは、心の奥の内なる声を聴いていますか？

年をとるにつれ、より楽な、快適な現状に身を置くことの誘惑があります。

私はこれまで以上に強く感じていることがあります。それは、IC そのものが小さな規模になってきており、私たちのできることも限られてきている中で、それぞれが置かれている居場所で、小さなコミュニティを築く、ユニークな課題があると思うことです。

コミュニティは、2,3 人でも構いません。IC は世界的に、それぞれのストーリー、生きる目的と実践を分かち合うコミュニティです。誰もが、どこかに属していることを望んでいます。

孤独は、最大の脅威の一つであり、えてして過激主義の心髄になっています。日本にはコミュニティー（共同体）に対する素晴らしい畏敬の念があります。私たちが必要としている、誰もが受け入れられる、世代を超えて、平等の空間と居場所のあるモデルとなり得ると思います。ベトナムのティク・ナット・ハン僧侶が説いている「インタービイング」相互共存の教え、新しい世界を築く同じ目的のように。

イギリス人としての私の文化には、尊敬の欠如、個人主義、傲慢さなど、変えなければならないことが沢山あります。オーストラリア人としての私の文化にも、アボリジニーの人々を尊重し、彼らの声に耳を傾けることの欠如があります。新しい世界のための新しい文化、新しいコミュニティーを築くことができます。そして、内なる心の声に傾聴し、実践する新しい文化を育むコミュニティーを築くことが、私たちが望んでいる新しい世界の心髄であると信じています。

皆さんとご一緒に、ここで静かな時間を持ちたいと思います。

質問：

・正しい質問をすることの難しさがある。その正しい質問とは、具体的にどのように表現すればいいのでしょうか？とても関心を持ちましたのでお聞きしたいです。

・闘病中の妹にどう声をかけて良いのか、姉妹の会話が難しい現状を抱えている。

答え（ブラウン女史）：

私の娘も乳癌の闘病から生き伸び、私自身も 2 年前に発病しました。人は病気になると、生死について、身近に考えるようになりますね。相手に答えを提供することよりも、相手が自分自身で問い直すために正しい質問をすることが重要なのではと思います。言われたことに即答しがちなのですが、相手が抱えている苦しみがどこにあるのか、より広く深い視点から、相手が置かれている立場を理解したいと考えるときに、ふさわしい質問が浮かんでくるのではと思います。

往々にして、相手自身が自分で問うことの必要な視点、である質問であったりすると思います。

基調講演

（2020 年 10 月 24 日）

スレッシュ・ヴァジラニ氏

日本の友人の皆さま、おはようございます。

以前お会いして以来、長い間お会いできなかった皆さまのお顔をこうして拝見できて嬉しく思います。

日本には、かつて国際会議参加したことがあります。1985 年だったと思いますが、随分昔の話です。その時に多くの友人たちと日本のいろいろな場所を訪問し、素晴らしいビジネス界の人々、学校の先生、主婦の方々に会うことができました。本当に光栄なことでした。

今日の私があるのは大いに日本のお陰であると思っています。若い時は何日も日本で過ごす機会がありました。その時に日本の歴史、日本の文化、宗教上の慣習、日本人の生き方について学ぶことができました。日本で過ごした時間のお陰で私はよりよい人間、よりよい企業人になることが出来ました。

ご存知のように、私はトランスアジア・バイオメデカルスという医療関係の会社を 41 年前に創業しました。それは日本からインドに帰国した直後でした。

IC でいろいろなトレーニングを受け、それによって人間としての自分を見つめ、そして人生の目的は何かということを決めることができたのです。

インドに帰り、どうしたら自分は社会や国のために役に立つことが出来るのか、何をすべきなのか、どこに私の役割を果たす場所があるのか、またどうしたら人類の為に役に立てるかを考えました。

私は貧しい家庭の出身だったのでお金がありませんでした。また、9 年間は IC の専従として無給で働きました。お金はなかったのですが、神様はきっと私を素晴らしいことの為に使って下さるという信念は持っていました。

IC で多くの人々が話していたのは、神に導かれるところ、必要なものは与えられる、ということでした。そこで私はそれが本当かどうか、テストしてみたくなりました。もし、真に私が神に導かれているのであれば、必要な資源は神が与えてくださるであろうということを。

ここからは、歴史についてです。

今日、私の会社トランスアジアはインド最大の医療診断（血液検査による）の会社となり 1,600 人の従業員がいます。しかし、大きな会社を作り、多くの従業員を雇うという事は私の夢ではありませんでした。私の夢は国家に奉仕すること、医療診断で病気を予防し、健康で幸せな国を作ることでした。

振り返ってみると、私の人生は IC で学んだことが本当に人生で役に立つのかどうか、その素晴らしい冒険と実験の人生でした。いろいろな刺激を受けた素晴らしい 41 年間でしたが、人生のどの段階においても、まさに「神に導かれ、神に用意された」の言葉を実証するものでした。

IC で良く言うのですが、利益の前に先ず人がくるべき、と。私自身も実際の経営でこれを体験しましたが、まだ終わりではありません。挑戦している段階です。

毎日が新しい冒険で、毎日が新しい学びで、毎日胸をときめかせています。IC の素晴らしいところです。人生を興味深いものにしてくれ、先が予想出来ません。41 年間、一歩ずつ歩んで来ましたが、素晴らしい人生になりました。

今年 3 月インドでもコロナ禍の感染拡大によって、インドの首相がロックダウンを宣言し、企業活動は停止し国民は家に留まるよう命じられました。今年 3 月 25 日のことです。翌 26 日は私の誕生日

でした。私は静かな時間を持ちこの時、神に聞きました。「これから数ヶ月、家に滞在中私は一体何をしたら良いのでしょうか。私に何を望まれるのでしょうか」と。

内なる声は語りました。「とんでもない！休んでいる時ではない。最もエキサイティングな時が今日始まるのだ。過去 41 年間会社をやってきたのは、まさにコロナ禍に備えるためなのだ。今、世界はトランスアジアを必要としている。そしてコロナ禍に対する手助けを必要としている。神は、この 41 年間、わが社がこの瞬間に人類に奉仕する機会を託されたのだ」と。

私は会社の経営幹部に電話し、私の考えを伝えました。「我々が 41 年間会社をやってきたのは、今、この時に人類に奉仕する機会を神から託されたのだ」と。そこで我が社の研究チームは、直ぐにコロナ禍に有効な検査薬の開発を始めました。我が社の研究チームは、コロナ禍の検査方法の開発に乗り出したのです。

それまでインドではどこもコロナ禍の検査薬は創っておらず、全て米国から輸入していました。しかし世界各国のコロナ検査薬の需要が高まり、値段が上がりインドでは手が届かなくなりました。

1 ヶ月以内で研究チームは検査薬を開発し、工場での生産を開始しました。政府も許可や承認を積極的に手助けしてくれました。他の会社は閉鎖しその従業員は自宅に留まっていましたが、トランスアジアの従業員は昼夜 24 時間態勢で働いていました。

政府もいろいろ手助けしてくれ、警察は社員がどこでも移動して良いという通交許可証を発行してくれました。工場で生産が始まってから、社員は検査薬を各地の病院に持って行き、使い方を教えました。インドでは今まで 4,000 万人が我社の検査薬を利用しました。インドでも皆が払える低価格のものです。

その時、大量の検査薬を生産するには工場が手狭でした。インドのみならず、アフリカやアジアの多くの国々から生産量を上げるよう旺盛な需要がありましたが、その需要を満たすには工場が小さ過ぎました。

政府は、「何故もっと生産量を上げないのか」と私に聞いてきました。「工場が手狭なのです」と伝えると、政府は心配しなくていい、と言って翌日我々を大きな工場に連れて行き、これを提供するので使ってよいと言ってくれました。

他の会社が閉鎖している間に、トランスアジアの研究開発チームは検査薬を開発し、生産し、増産のための新しい工場まで造ったのです。

当時、大きな問題が起こっていました。多くの企業では都市部を中心にロックダウンが続き、田舎から都会に働きにきている 1 億人にのぼる従業員に給料が払われなくなりました。失業した 1 億人の人達は田舎に帰っていきました。写真をご覧になったかも知れませんが、交通機関が停止していたので人々は徒歩で移動しましたが、中には子供を連れて 1,000 キロ以上歩いて帰った人もいました。

多くの人がコロナの菌を持って田舎に帰ったのです。不幸にも田舎には病院や検査場がありませんでした。政府が、「どうしたら村でも検査が出来るようになるか、何かできるか」と、聞きにきました。私達は 15 日間でバスを使って検査場と同等の機能を持つ移動式検査場を作り、村を回って人々の検査をしました。

先程も申しましたが、今日までの 6 か月は私の人生で最もエキサイティングな時となりました。丁度その頃、私は定年退職を考えていた時でした。去る 3 月に 70 才になったばかりです。そろそろ退職し、もっと IC や世の中の為に時間を費やすことを考えていましたが、コロナのお陰でそのアイデアを全て捨て、以前よりもっと仕事をするようになりました。

驚くほどに、神が私にエネルギーと熱意を与えて下さり、そして思いも寄らない働きを成すよう導いて下さっています。

これらのことが出来たのは、IC の訓練の賜物であり、日本で受けた訓練の賜物でもあるからです。日本で学んだ素晴らしい日本のビジネスの慣行は、今では世界のビジネス界での慣行となっています。

私が日本から学んだビジネスの慣行は、私自身のビジネスにとってきわめて有益で効果のあるものでした。基本的には「改善」で 8 つの行動原則があります。

「ムリ、ムダ、ムラの排除。現場・現物・現実重視の三現主義。原理・原則重視の考え方」。この８つの行動原則が、ビジネスだけでなく、私の人生にとってとても役に立ちました。

２年前にICインターナショナルの会長に就きましたが、私の心からの願いはどうすればICが以前のようなエネルギーと熱意を取り戻すことができるか、そのことに私が如何に貢献できるか、ということです。

私自身の人生において、ICから多くのことを学びましたが、その学びは私の人生を根本から変え、より良い人、そしてより良い世界の一員に導いてくれました。

私達は今ここでとどまっていてはいけないのです。かつて私が若い時に心に閃きを見出したように、何千人もの青年たちがより良い人間となり、どの国においても人類に奉仕し、貢献するという閃きを見出すことができるような機会をICは止めてはいけないと思います。

この数年を振り返ると、若い世代にICの本当の価値を届けられていないと感じています。まだ私達は多く人々に自らを変え、世界に貢献できる新しい生き方があることを伝えきれていません。

今回ICインターナショナルの会長として、この現状を変え、より多くの人達、特に次の世代の青年達にICの考え方が伝わるように努めていきたいと思っています。

ICから学んだことを私自身の人生を良くするためだけに使うのではなく、無私の精神で周りの人達にもしっかりと伝えていきたいのです。

その時々により、全てが変わる必要があり、人生を見つめ直す必要があり、またこれまでとは別の表現でのやり方でやってみる必要があります。唯一永遠に変わらないことは「チェンジ」です。

私達自身、日々在り方のチェンジが必要ですが、ICのことを考え、ICのことを話し合い、ICを伝えるメッセージを若い人達が理解できる表現に変える必要があります。

名前はICではありませんでしたが、来年はフランク・ブックマン博士がオックスフォードで新しい考え方を築いてから100年になります。私が会長を受け継いだとき、静かな時間に私の心に聞こえたのは、これからの100年、ICの精神を継続させるために私は何をなすべきか、ということでした。

心の声は言いました。勿論これからの100年、ICの精神を伝えていく必要があります。但し、多くのことを変える必要があります。若い人達にICの考え方を伝える必要があります。人生は永遠ではないので、若い人達にICを継承しもらい前進させていく必要があるのです。

そのため、私達は自分達の物事の進め方について、全面的に見詰めなおす必要があります。日本式の物事の改善の手法を応用し、例えば改善や現場主義等を取り入れて、日々の生き方の見直しを迫られています。

私ひとりではできません。ICの全てのチーム、ICの全てのネットワークを取り込んで、どうしたら次の100年のあいだICが継続してやっていくことができるのかを考える必要があります。

先月ICインターナショナルの総会で私の考えを分かち合いました。

私は、どのようにICを設計しなおすか、これからの100年を続けるために何が必要かを検討するグループを異なった国の人達を集めて組成することを提案しました。若い人達を中心としたワーキンググループが、何をどのように変えていく必要があるのかを検討します。

基本的に４分野を考えています。

１つ目はIC全体の伝え方です。変更する必要があるのか、新しい表現に変える必要があるのか。勿論IC全体の価値は不変ですが、表現や伝え方は変えてもいいのです。IC全体の価値、例えば４つの道義標準、静かな時間や内なる声に耳を傾けることは不変です。しかし、どのような表現や形式で伝えるのが若い人達に受け入れられ、理解されるかを考えることが必要です。

２つ目はネットワークです。

どのようにICを伝えるのが良いのか。これまでは人から人へ伝えてきましたが、もっと別の方法があると思います。

3つ目はICの組織、構造です。

組織の在り方、ICは世界のICと如何に繋がるのがよいのでしょうか。組織を変える必要があるのでしょうか、より参加型の組織にできなでしょうか。そうするともっとこれは自分の組織だと感じるのではないでしょうか。

4つ目はICを持続可能な組織にしていく、自立的な組織にしていくためにはどうするか見直すことです。必要なお金を生み出すだけでなく、世界にICの考え方を伝える人材も育ちます。

4つのワーキンググループが、今私が述べた4点をそれぞれ考えます。

勿論、日本の人がワーキンググループそれぞれに入って頂かないと、完全なものにはなりません。ですから是非日本の考え方を伝えることができる若い人を数人このワーキンググループに送って頂きたいのです。日本の考え方をワーキンググループに取り入れたいのです。

日本には数百年継続している組織があるという素晴らしい伝統があります。企業の中には500年に亘り事業を継続している企業もあります。世界を見まわしてもそんな国はありません。

日本には組織や企業が何百年の長い間、世代を超えて持続し継続するノウハウがあります。その日本の慣習を学び、そしてICが今後数百年も継続するためにはどうすべきかを考えたいのです。

ICを次の100年も継続させるようICを再構築することをお手伝い下さい。一緒に働き一緒にそれを実現させましょう。

以　上

矢野会長：

今日は素晴らしいお話しを有難うございました。誠に心に沁みるお話しで、国際IC日本協会も同じ気持ちでやって行きたいと思います。

また、今日のメッセージはこのオンライン会議に参加していない日本の会員や多くの人達にも知らせたいと考えています。

日本を褒めていただいたことは、嬉しいし日本の素晴らしい価値だと思いますが、その良さがだんだん失われてきていることを危惧しています。

経済界だけでなく若い人達にも、本来の良きものは継承していくよう伝えたいし、このことは日本にも世界にとっても重要なことだと思います。

ラメス・サラメ氏

アジアの最も西側に位置する小国レバノンから、極東に位置する偉大で立派な日本に、心をこめて友愛のご挨拶を申し上げます。

常に、皆さまの言葉に耳を傾け、学ぶことを強く求めて居ります、私どもレバノンおよび中東から、この度、皆さまにメッセージをお送りすることができ、とても光栄に思っております。

良い家庭に生まれた私ですが、今振り返って見ますと、ベイルート大学で学生として法学部を終えた21歳の時の私は、野心家で、勤勉で、自己中心的な若者だったと言えます。そのエゴが私をトラブルに巻き込み始めたのです。そのような時に出あったのが、今はIofCと呼ばれるMRAの運動です。国を変える建設的な役割を担いたい、のであれば、自分の人生には正すべきことがある、と確信するまでに時間はかかりませんでした。

私は 4 つの決断をして、それを実行に移しました。
1 番目 : 父への憎しみを告白し、父に謝罪すること、
2 番目：弟に嫉妬していたことを謝罪し、弟と和解すること、
3 番目：大学の図書館から盗んだ本を返すこと、
4 番目:親しい友人たちに、私が彼らをひどく裏切ったこと、嘘をついたことを告白し、謝ることでした。

プライドがひどく傷つきましたが、じきに心が解放され自由な人間になりました。深い平安が私の魂に宿り、人生と人との関係を取り戻しました。かと言って、確かに私は天使にはなりませんでした。しかし、その時以来、私の人生には新しい存在があり、私が参照することができる神聖な存在がありました。

数年後、レバノンでキリスト教徒とイスラム教徒が対立する戦争が勃発しました。私はキリスト教徒の民兵に参加すべきだと思い、参加しました。しかしある日、朝の毎日持つことに決めていた「静かな時間」で、私は銃を手放し、この国のために対話と和解を目的とした新しい闘いを始めようと考えました。私はその考えに従い、その後数年の間に、数人の友人と私は、政治家、宗教家、重要人物が徐々に参加するようになり、長期に続いた対話集会を開催することができました。これらの対話集会は、レバノン人の相互理解と団結の精神を強め、レバノンの和解と平和に貢献しました。

レバノンは豊かな国でした。しかし、一年前のレバノンは、非常に深刻な財政破綻に見舞われ、銀行の破綻寸前にまで追い込まれました。その後、人口の急激な貧困化が起こり、さらに、私たちの国は、長い間、解決されていないイスラエルとアラブの紛争に、ますます巻き込まれています。このような状況で何ができるのでしょうか？

大きな危険は、恐れに支配されることにあります。私はテレビのニュースを見るのをやめ、新聞を週に 3 回だけ読むことにしました。しかし、もう一つの重要な決断は、朝の「静かな時間」を持ち続けることでした。それはすべての人々の心に聖なる心があることに毎日、自分を気づかせるためでもあり、この規律を守ることは、平安と明晰さと方向性の感覚を与えてくれます。

しかし、最も重要なことは、愛の道を求め、毎日愛のうちに歩いていくことです。私は、自分のエゴと利己主義の死なしには、自分の心の中に愛の居場所がないことをますます実感しており、自分中心の心の死があってこそ、いつでも生命が湧いてきます。そうです、それだけで、私たちの世界の悪の連鎖を断ち切ることができるのです。そして、家族の中で、仕事の中で、そして仲間の市民との交流の中で、このことを毎日行うことで、私は、自分の国の悪の制圧を防いでいるような気がしています。

大きな日本と小さなレバノンが手を取り合って歩むことを学び合い、幸せと平和を確保するために、別の方法があることをアジアや世界に、示すことができるのではないでしょうか。

10 月 24 日（第1日目）

ワディア・コーリー女史

「親愛なる日本の皆様」

この度、国際 IC 日本協会の年次フォーラムにお招きいただき、ありがとうございます。

また、特に 8 月 4 日のベイルートでの爆発事件後の私たちの生活や体験を、最低でもオンラインでシェアして頂きたいとのご連絡を頂き、感謝申し上げます。

私の名前はワディア・コーリー、40 歳です。20 年前日本を訪問した時、日本 IC および東アジア各国の IC の活動から深い印象を受けました。その時、東アジアの国同士、特に韓国と日本の間で和解と感動的な互いの謝罪が行われましたが、私はそれを目の当りにした証人の 1 人です。日本でこれまでのリーダーシップ・トレーニング・プログラムで学んだことはその後の私の人生に深く根付いています。特に誠実と透明な精神に基づいた絶対正直、絶対無私、絶対純潔、絶対愛という四つ価値を今でも大切にしています。

レバノンに帰国後法律を学ぶ決意をしました。その前は教育を専攻し、最初の学位を取得しました。その後法律を専攻する決意をしたのは、私のようなキリスト教の学生が普通選ぶ分野は専攻したくなかったのです。多くの学生がイスラム教徒であるレバノン大学で私は法律を専攻したいと思いました。法律分野の人々と初めて一緒に座って講義を静かに聴いていましたが、その時以来、レバノンの人々をそのまま受け入れることが出来ました。彼らは私がそれまで聞いていたような人々ではありませんでした。それからは、その人たちと親友としての付き合いが始まり、「信頼の構築」とは何であるかを知り始めました。それはオープンな心、深い傷をシェアすること、深く経験すること、お互いに自分自身を正常な位置に戻すことを土台として、構築されるものなのです。

その後ベイルートのアメリカの大学のキャンパス内にある国際大学で新しい職を得ました。ほとんどがレバノン人で、日常は英語を使い、アメリカの文化の中で暮らしていました。同時に私は引き続きレバノンの大学で学びました。この大学はイランに関係した政党に導かれていました。私は毎日イランとアメリカを往復しているかのような気持ちで、この 2 つの地域の見解の食い違いから起こる誤解や争いの深さを痛いほど感じていました。私は IC インターナショナルに関わっていましたし、日本でアクション・フォア・ライフに加わった経験があり、これが私の付加価値となりました。

一方のグループの主張を他方に伝えようとすることは困難なことでした。一方のグループが危険を押し付けるからというだけでなく、これは、私にとって 4 年間の法律学科の生活の中で、勉強以外のもう 1 つのトレーニングの場となりました。これは「信頼構築」であり、相手からの共感（empathy）を得ようとするなら、相手の身に自分を置き換えることです。

今日のレバノンでは、信頼を築く 1 つのスキルとして、こういった価値を大規模に広めて行くことは不可欠であり、私たちの使命でもあります。最近まで私は自分が信じるこの価値観と「信頼構築」を私が教える大学の教育学部で学生に伝えようと数人の仲間たちと試みてきました。しかし、事態はこれだけではもはや十分ではなくなりました。

レバノンで昨年起こったことが全てを変えました。積りに積もった汚職の結果が爆発し、通貨の大幅な切り下げ、貯蓄と給料の減少、そして、コロナウイルスの感染拡大と、手が付けられない状態となりました。そこへ、8 月 4 日の爆発事件があったのです。これは爆発力にして広島の原爆の十分の一というものでした。

これら一連の災害により、不信感が蔓延し、経済的な大不況に陥りました。勿論こういった出来事は汚職の蓄積や怠慢が原因となっていますが、同時にこれらの爆発はレバノンの過激派を狙った安全保障上の出来事ではないかとの憶測が飛び交いました。

最近、この国のそれぞれのコミュニティが、自分たちこそ被害者だ、と思い始めました。勿論、通貨切り下げはすべての人に悪影響を及ぼしましたが、より大きな影響を受けた一部の人々は自分たちこそ最も犠牲を強いられている、と主張し、不信の原因となりました。8 月 4 日の爆発事件は、主としてキリスト教徒の多いベイルートの北部と東部に影響を及ぼし、特に噂の広がりが続けば、爆発に対する安全保障面での調査も進み、更におおきな疑惑と不振の原因になるでしょう。この状態にどう対処すれば良いでしょうか?

ここで私は現在のレバノン国民の現実を要約したような二人の人の話をシェア致します。

A さんと B さんが病気で入院をしていました。（今のレバノンでは、国民全員が何らかの形で病人といっても過言ではありませんが）A さんは時々立ち上がり、窓から外が見られます。B さんは病状も重く、寝たままで立つことが出来ず、精神的にも弱り切っています。そこで A さんは外の景色を B さんに説明します。「今日は良い天気だ」「今日の太陽は眩しいばかりだ」また或る日は、「外には緑の葉が美しく茂っている」「木にはあちこち花が沢山咲いている」「まるで日本の桜のようだ!」また、或る時は「果物さえ実っている」「人々は木を切り、子供たちは遊んでいる」「なんと楽しそうなこと!」何日か経って、B さんは自分も外が見たくてたまらなくなりました。少しづつベッドから起き上がれるようになりました。反対に A さんは運悪く体調が悪化してきて、或る日危機が襲い、A さんは残念なことに亡くなりました。B さんは非常に悲しみましたが、同時に外が見たくてたまりません。見たさのあまり、とうとう立ち上がって外を見ました。驚いたことに彼が見たものは隣の病院の壁だけでした。失望しましたが、同時に友人 A さんが B さんに希望を与え続けてくれたことに感謝し、この壁の向こうに必ず A さんの言った美しい風景がある、と希望を持ち続け、元気になりました。そう、もちろん災いの後に何かがあるでしょう。

これはまさしく今私たちが行おうとしていることです。正直言って災害に続く災害の後、まだ先は何も見えていません。見えるのは目の前の壁だけです。しかし、希望が私たちに語りかけているのは、何かがある、壁の向こうに美しい何かがある、ということです。

道はでこぼこです。しかし、前へ進まねばなりません。しかし、どんな心構えで?どれだけ人を信じて?どれだけの共通理解を持って進めば良いのでしょう?

実際の話をしましょう。あの爆発後、私たちはベイルートから 1 時間の私が住む町ザフィールで道路の修復工事をしました。他の自治体や NGO、活動家たちを集めて、グループを作り修復をしました。ベイルートの非常に広い部分が瓦礫と化したのです。荒廃した広い地区では国による整備、修復が必要なところもあります。われわれは比較的小さい地域の道路や街路を担当しました。そこはアパート 75 棟を含む巨大な五つのビルが建つ地区の街路を修復しましたが、予算が非常に高額です。そこでわれわれはレバノン郊外のディアスポーラ（ユダヤ人居住地）の人々やレバノン人と資金集めをしました。これが役に立ち、目標額に達しつつあります。これらの工事はレベル 3 といい、建物全体が破壊されたものや建物の主体構造が破壊されたものは含みません。われわれは窓やドアの壊れ、キッチンのインフラ破壊、また、電波障害による家電製品の破壊などを修繕しました。

このような活動をすることにより、社会的に、心理的にサポートをして人々に希望を与えようとしています。子供たちが再び学校へ通えるように考え、オンライン授業を受けるにはどのような家電製品やパソコンが必要かを考え、また、子供たちの芸術的な催しものなども考えました。これは子供たちが日常の辛さを紛らわせるよう、特に工事の仕事を終えた夕方に行いました。

この体験ビデオの冒頭でも述べましたように、信頼を構築しながら街角や同じコミュニティ内の狭い地区での手作業での小さな価値を創り出す仕事だけでは十分ではなくなりました。今では国中で信頼構築を広げていくことが不可欠となってきたのです。IC の仲間たちと共に、私たちは信頼サークルを再び起動させようとしました。去年の 12 月と今年 1 月、コロナ発生の前に専門家や様々な背景を持つ現地の人々を交えた

最初の信頼サークルを実施しましたが、これが成功しました。異なった背景、地域、宗教の人々が集まり、それぞれのストーリーをシェアし合い、「人はどのようにして今の状態になったのか?」「彼らはどんな背景を持つ人か?」「最も恐れることは何か?」「将来の夢は何か?」「自分たちの文化のどの側面を周囲に知らせたいか?」という質問に答えてもらいました。驚いたことにレバノンの人は彼らのことを何も知らないのです。しかし、このような試みで人々はより緊密になり、偏見がなくなります。この質問をオンラインでシェアしてもらい、その証言からドキュメンタリーを作るのです。

しかし、コロナ感染拡大によりこれらは中止となりましたが、三週間前からこの信頼サークルをオンラインで再び打ち上げることになり、様々な背景を持つ人々が集まり、自分たちのストーリーや文化を話し始めました。レバノンは多民族国家であり、18 の宗派が共存しそれぞれ異なった集団としての記憶を持っています。皆早くコロナ禍が収束して対面で会えることを心待ちにしています。そのための準備期間中にセンターの設立を考えています。その場所は、ベイルートで最も戦略上重要な地区でレバノンの真ん中に位置し、ベッカのある平地と首都ベイルートの間にありますが残念なことにほとんど投資されていないのです。私はここでバスルーム、キッチン付きのワンルームのみを使っていますが、このように資金不足で長年置き去りにされている場所を再び蘇らせるために投資することは重要であり、若い人々が集うハブとして、プロフェッショナル、特に教師たちのシンクタンクとして、ＮＧＯの人々や市民の集まる場所を作るため、すべての宗教の人々が共に立ち上がりレバノンの精神、レバノンの市民権を取り戻す場所を再建したいと真剣に願っています。これは、私の大きな夢であり、全ては世界中のお心ある方々に、そして神のご意志にお任せしているのです。

日本の国際フォーラムにお招きいただきありがとうございました。「ハロー、親愛なる日本の皆さん」というこのビデオを作りました。ほとんどの皆様にはお会いしたことがございませんが、マレーシアの友人がかつて云った言葉が印象的です。

“ 世界に見知らぬ人はいない。いるのはまだ会ったことのない友人だけだ ” と。

近いうちに、皆様と対面でお会いできることを楽しみにしています。

以　上

（注）この和訳はコーリー女史のフォーラムでの発言をそのまま訳したものですが、その後コーリー女史から新しい進展等を含んだ追加情報が寄せられましたので、当協会の HP に掲載する英文報告書と和訳の内容は、細部に若干の差異がありますので、ご了承下さい。

ワディア女史への質疑応答

質問：レバノンには、18 の宗派があるとお聞きしたが、それらはイスラム教とキリスト教の 2 つの主流が分派したものですか？

答：そうです。イスラム教にはドルーズ派、イスマイル派 (イスラム・シーア派の過激派)、スンニ派などがあり、キリスト教にはカトリックとオーソドックスがあります。カトリックとオーソドックスの中にも正統派、アルマニア系、アッシリア系 (エジプト出身) などの分派があります。各国の様々な地域から出てきた人々です。

質問：このように様々な民族と宗教が集まる中、何が彼らを繋ぎ合わせているのでしょうか？

答：これは簡単な質問ではありません。

レバノンはこのアイデンティティーのぶつかり合いの中から生まれた国です。尤も現在のアイデンティティーの形も最終的なものではありませんが。1920 年レバノンが建国された時の国境線の在り方に、人々は必ずしも満足してはいませんでした。中にはアラブ国になりたい人もあり、また、西側のクリスチャンの国になりたい人もいた。これが分裂の源となりました。しかし、戦争の後に沸き起こった国民の意思というのは「共に生きること」でありま

した。これはいろいろな形で表されていますが、1つの例は3月25日をクリスチャン、イスラム教徒共通の「祈りの日」としました。これはキリストの母マリアの受胎告知の日で両宗教が共に祝う日です。我が国では、もともとの国境は取り外され、共に生きることを余儀なくされた国です。他の国では人々が自分たちで国境を決め、広めて行ったにも拘わらず。レバノンは「共に生きる」という人々の意志の下に作られた国で、国内戦争後、国がバックになりました。それ以降は、アラブ系が国を統一することも、西側が国を統一することも求めてはならない、となりました。レバノン独自のアイデンティティーでの和解となりました。
私たちは、「多様性を尊重する市民」というコンセプトの下で生きています。どの市民も皆他人を知ること、心を開くことが求められています。
イスラム系レバノン人ほどクリスチャンのことを良く知ったイスラム教徒はいないし、レバノンのキリスト教徒ほどイスラム教徒を良く知っているキリスト教徒はいない、とよく言われます。私はこれを誇りに思っています。

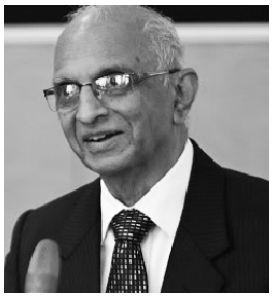
質問：レバノンは面積は小さいが18の宗派が存在し、多民族国家で、これらが国内の不安定、社会問題の最大の原因となっている、と感じたがこの理解で正しいですか？
答：はい。それが、理由の1つではありますが、その理由は正当化できません。

質問：ヨーロッパも多民族国家になるのではないか、と言われているが、例えば多くのイスラム人が仏、独、北欧へも入っているため、社会に安定感がなくなっている。レバノンの経験から見て、ヨーロッパのそのような国のグローバリゼーション化という場合、それは、成功すると思われるか？今後大変なことになるだろうと思われるか？
答：その質問を有難う。世界中で何が起ころうと、レバノンが1つの例になります。なぜなら、
レバノンには世界のダイバーシティーの素地がありますから。国連ジュネーブ代表のマイケル・ミューラー氏がかつて云いました。もし、レバノンの多様性の在り方が成功すれば、世界の多様性も成功する。しかしもしレバノンが失敗すれば、残念ながら世界の多様性は失敗に終わるでしょう。ですから、レバノン人はこれを成功させる責任を持ってます。私たちは多くのイニシャティブを持っています。その1つが「アジャーン財団」(多宗教財団)です。つまり、市民主義を取り入れながら、多様性の概念を普及させること、そして、われわれがこの多様性をどのくらい維持管理できるかということを証明するようオランダ政府から頼まれています。誰にとっても安全な場所が提供されており、そこでは俗人支配主義 (laicity) を持たないよう表現することができる。俗人支配主義とは消極的なセクラリズム（非宗教主義）のことで、人々が表現すると抑圧したり迫害したりします。しかし、この提供された安全な場所でのみ、人から危害を与えられたり、自由を侵害されることなしに自由に表現できるようになっている。オランダの政府はレバノンのアジャーン財団から証言するよう要請した最初の政府です。何故なら、彼らはイスラム人やその他異質な人に初めて遭遇した国だからです。また、モロッコでも人々は過激なイスラム主義者に直面しており、われわれはそのため、多様性を取り入れる市民主義をシェアしてほしいと頼まれました。また、指導者イマーンがどれほど宗教家として非排他的な方法で話をする用意が出来ているかということもシェアするよう頼まれました。これらは、われわれが教えている「手続き」なのです。われわれは経験だけで言っているのではありません。たとえば我々はスイスの例に感動を受けました。この国は偉大な多様性の国です。そこでは、市民は誰でもコミュニティーの中に入り、毎週対話を交わしています。そうしないと、人は自分に危害が加わるのではないか、自分は拒否されているのではないか、と憶測が出てきます。人は皆、交じりあうことが要求されます。そうしないと、恐れが広がってしまいます。これは完成された哲学です。

以　上

インド・セッション

（2020 年 10 月 24 日）



ラビンドラ・ラオ氏

私たち（インド・チーム）をこの重要なフォーラムの（プログラムの）一部に入れる機会を与えていただきましたことは、光栄なことであり、心よりお礼申し上げます。

私と家内は、昨年の国際フォーラムと日本での楽しい思い出があります。

あまりにも数が多くて一人一人の名前をあげることはできないのですが、多くの皆様の親切で温かいおもてなしに深く感謝申し上げます。

皆様方の今年のテーマである「危機における変革力」は、今コロナウィルスのせいで、ここ最近の（世界中の）一人一人の関心であります。

もし、私たちが本当に安全で、強靭な回復力のある将来を望んでいるなら、それを作るのは我々自身であります。

そして、この強靭さの鍵となるのが、私たちの（社会が抱えている）矛盾を解決することです。

我々の時代のいくつかの皮肉な事態と矛盾を私の方から指摘したいと思います。

●明らかに、コロナウィルスのことが、最初に挙げられます。人類は、知性と技術力を通して非常に大きな力を手に入れました。しかし、非常に小さな目に見えない生き物（コロナウィルス）が私たちを無力にしてしまいました。もう一年近く経っていますが、私たちは、コロナウィルスをどのように処理したらいいか全く糸口を見いだせません。

●私たちは、私たちが望むものは何でも作り出すことができます。今日、ますます多くの人々は、快適で贅沢な生活をしています。しかし、私たちは 10 億人の人々が、一日あたり 1,5 ドル（約 160 円）以下しか稼げない悲惨な生活を送っているのをそのままにしているわけです。

●田中さんが先日おっしゃっていたのですが、グローバリゼーションは素晴らしい発展の成果だと言われているのですが、これによって多くの困ったことが起きているわけです。

（具体的に申しますと）

○生活必需品でさえものすごく遠くの離れた地域で生産され、私たちはそれに依存しているわけです。ですから、交通や輸送が乱れてしまっては困ってしまうわけです。

○またグローバル化によって、一部の人々と一部の企業は、とても力を手に入れました。ですから、彼らは、自分たちに都合のいいように国家の政策を管理することができるのです。

○ IT（情報技術）革命で、世界の距離は縮まりましたけれども、お互いが和合し、調和したわけではありません。

●こういった矛盾というものを挙げればきりがありませんが、ここで一つ深刻な矛盾についてお話したいと思います。

多くの国々の中では、我々が一生懸命に手に入れた民主主義は確固たるものになったと信じているわけです。

しかし、悲しいことに、我々のコミュニティーや宗教、色々な分野で分裂が見られます。ですから、民主主義は自由を脅かしているのです。

というのは、我々は、まさに暴君（独裁者）のような人を選挙で選んでいるからです。最近でも人気のある雑誌が８か国、民主主義国家における選挙で選ばれた元首について取り上げていました。

こういった人たちは、まさに国の少数派の安全とかニーズを考えることなく、もう独裁者のようにふるまっています。一方でアメリカがそうですし、もう一方でインドでもそうです。マスコミや憲法で定められた裁判所でさえ、本来なら国民の自由や国民の利益を守るためにあるわけですけど、実はそういった機関が支配者を満足させるような行動を頻繁にとっています。

●次に「自然」についてお話ししましょう。94 歳になるテレビの司会者であるデビッド・アッテンボローという人がいます。彼は、彼の人生において、これまでずっと自然や環境についてレポートしてきました。そして、我々の持続不可能な生活様式が我々、人類が滅亡するレベルにまで達してしまったと言っています。

我々は、我々の物質欲を満たすために非常に自然を搾取しているわけです。ですから、今まさに人口もまた増大しております。そして、我々の欲も増大しております。多くの科学者や環境専門家は、まさに世界は終わりになるだろうと言っています。

しかし、アッテンボローさんは、まだ希望を抱いています。彼は、我々が自然の三分の一を回復することができたら、そしてエネルギーを太陽光発電や水力発電などの自然エネルギーに変え、我々の生活様式を変えたら、まだ人類を救うことができると言っています。

まず、鍵となるのが、世界の人口を安定化させることです。アッテンボローさんは日本がまさに模範になっているといっています。日本の皆様方は、人々のニーズ（必要な品々）が全て満たされて、快適な生活ができるようになって、人口が安定化したことを示してくれました。

ですから、本当に困っている人達の状況を改善するということは、（人口が安定化することにつながり）我々自身の利益にも叶っているわけです。それが、唯一我々を救う方法なのです。

日本は、世界の人口増加を止めるために、世界の富を皆で分かち合うということにおいて我々にインスピレーションを与えることができると思います。そして、我々は自然を回復すれば、その自然がもたらす豊富な恵みは、人口が安定化した世界を持続可能にするために十分なものとなるでしょう。

●もちろん私の母国であるインドのような国々が、日本のように繁栄することを求めることは、正当なことであります。

しかし、悲しいことに GDP の成長や経済成長をめぐる競争は、自然を犠牲にして起きているわけです。そして、全ての人がこれによって成長できるわけではないのです。多くの人が、置き去りにされています。

●豊かな国の進歩を真似することによって、何人かは成金になり、あるいはかなり多くの人は豊かになりました。しかし、国の大部分の人々は置き去りにされています。しかも、環境はとても損なわれています。今や愛と思いやりのグローバリゼーションの時代となったと言えるでしょう。そして、地方の伝統、文化、慣習をしっかりと考えて、それらを研究して地元のニーズを満たすような地方分権型の開発こそが必要とされています。

●私の母国を見てみますと、多くの賢い人々は、我々の時代に適合させたガンジーの考えた経済学こそが答えだと考えています。

本質的なことを言えば、ガンジーは自給自足型の村を考えていたわけです。

いくつかの小さな村が集まって、遠い所に依存するのは最低限にするようなやり方こそがこれからのやり方だと考えていたわけです。

実際、そういうモデルを追求している人たちがいます。まだまだ十分ではありませんが、そういった認識は芽生えています。我々は、こういった考えには、既得権益からは大変深刻な反対が出てくるものと考えています。

●まさに、我々に必要なのは、世界の人たちのムーブメント（運動）であります。これは、まさに人間の本性、つまり人間の貪欲さとか自己中心とか憎しみとかそういった人間の本性の根本に対処するような精神や心の運動であります。

そして、このムーブメント（運動）は、まさに私たちの心の中における「愛」によって生じるものでありまして、すべての人々を結びつける、そして自然と我々を結びつけるものであります。

それによって、我々は謙虚になって他の人たちのいうことに耳を貸すことができるでしょう。

つまり、しっかりと聞いて理解するわけです。

すなわち、ビジネスのチャンスになるからと言って援助を与えるのではなく、進歩を阻害し、本当のニーズを見ることを妨げ、腐敗を起こし、人々を分裂させ、共通の知恵と協力的な努力を人々から奪うような人間の本性と向き合って対処していかなければならないのです。

●簡潔に言えば、回復する力は、我々が「愛情と思いやり」という筋肉を鍛える時にもたらされるものです。そして、これこそが良い時代には、我々を結びつけるものでありますし、つらい時代に耐えさせてくれるものですし、また、我々が弱くて無力だと感じている時でも我々を支えてくれるのです。

我々は、同情、思いやりを通りして結びついているのであって、いかなる種類の利益のために結びついているのではありません。

まさにこれは理想主義かもしれません。しかし、我々人類を救ってくれるのは、それしかないのです。ですから、我々は、こういったことによって、本当の喜びと幸せを皆にもたらすことができ、自然の美しさを回復することでしょう。

アッテンボロー氏は「我々に本当に必要なのは、知性ではない、賢明さだ」と言っています。

それこそが、まさに世界中の全ての人々のために必要な我々の将来を築く源でありますし、

本当の力強さ、つまり復元できる力、立ち直る力であります。

ご清聴ありがとうございました。

Mrs. Leena Khatri

リーナ・カトリ夫人

私はリーナ・カトリです。夫と共にパンチガーニーのアジアプラトー（AP）に住んでいます。アジア・プラトーの全員からご挨拶を申し上げます。アジア・プラトーはわれわれのセンターであり、皆様のセンター、世界のセンターであり、日本の方々も大勢訪れられましたし、国際財界人会議（ICB）もここで開催されます。最近は、日本の多くの皆様の寛大なご寄付により「アジア・プラトー維持基金」を設置することができ、深く感動致しています。

お陰さまでセンターの従業員の雇用を維持することが出来ました。また、この度日本の年次国際フォーラムにインドセッションとしてお招き戴きましたことも合わせて心から御礼申し上げます。

このフォーラムのテーマ、「危機における変革力」は皆さまが過去にその歴史の中で幾度か発揮されてきた、日本人の資質そのものである、と確信しています。過去に起こった災害や危機から復興するため、個人や集団へ向けられた人々の弛まない献身の力を世界に示してくださいました。これらの例から私たちは学ぶことが沢山あります。

現在のコロナウイルス感染拡大で世界は今混乱のさ中にあります。そして本日、私たちはこの共有する混乱と闘うべく会合を開いています。コロナ禍のインドでは人間の行動の最悪の状態を見てきましたが、同時に人へのケアと思いやりが実際の行動で表される希望の例も数々見ることが出来ました。私たちは、この目まぐるしく変わる世界で、自分たちの持つ最高の価値感を手放すことのないよう今こそ、立ち直る力（resilience）を必要としています。

私はICに身を置くことに感謝します。それは、夫と私は様々な年齢層の人、様々な背景を持つ人々と親しく働くチャンスが与えられるからです。時には意見の違いもありますが、ほとんどの場合、学びや楽しいことに出会います。このチームワークから学び取ったことの一つに、苦痛に縛られるのではなく、許すことを学び、年齢や背景の異なるこれらチームメイトたちと共に歩き、共に働き続けるということがあります。

今日はこのチームメイトのうち３人の方に登場いただき、彼らの長い旅路の中で、何が彼らを現在の地点に導いたのか、そして将来に何を見るか、シェアして頂きたいと思います。

Ms. Penuo Hiekha

ペノウ・ヒエカ女史

ペノウ・ヒエカさんはインド北東部のナガランド出身。14年前にICに出会い、アジア・プラトーにインターンとして来られ、現在はインターンのコーディネーター。日本にも来られたニッケツ、クリスティン・イラルさんたちと共に働いたことがあり、現在インド北東部の様々な地域の人々と共に活動中。彼女は現在、ICインドの理事。

ペノウ・ヒエカさんのシェアリング

私は、自分が行った過ちを受け入れ、間違いに気づき、幼いころの友人に謝り、二人の関係を修復したことで人生の新しい好機を得ました。そう、確かに和解のプロセスは、自分のプライドやエゴを傷つけ簡単なことではなく、長い間自分を犠牲者だと思っていました。しかし、内なる声に耳を傾け、それに従ったことは、友との和解に役立ったし、私の人生に新しい展望を開いてくれました。

インドの北東部では政治的混乱、汚職、部族としての同族意識が強く、それが経済成長を阻害していました。しかし私は若い世代の１人として、決して希望を失いませんでした。何故なら、リーダーシップや責任を取ろうとする若者が大勢いたからです。また、私たちは年配の人とも共同で働くことも必要であると認識して、責任とリーダーシップを一緒に分かち合うことの大切さにも気づきました。

ソーシャルワーカーの人たちとも協働し、青年指導者育成、女性の地位向上、公務員育成のそれぞれのプログラムを作っており、多様な人々の交流点としての役割を果たしています。

若者は将来の世代として国を前進させて行く人たちで、彼らをエンパワーしています。

インドのこの地域では、人々が自分たちのアイデンティティーを模索し始め、貧困からの脱却を求めています。何十年もの間、民族間の分裂によって失業や環境劣化が生じました。

ロックダウン中、私たち３人は“新しい社会を織る”（Weaving a New Society）という計画、つまり、グループでリーダーシップを育成する新しい試みを始めました。これは、北東部の新しい語りの場を作り、対話をスタートさせる希望とインスピレーションの場であり、憎しみと自己本位をなくそうとするものです。大きな大志を抱いてガイダンスを追求することこそこの地域に人々の善意と安定をもたらす第一歩なのです。コロナ感染というこの危機が示しているのは、私たち一人ひとりが、社会を機能させ、的確な成長をもたらす責任を持っている、ということです。私たちはインド北東部のため、世界のための新しい希望の時代を創り

出す構成員の一部なのです。

ありがとうございます。

Mr. Himanshu Bharat
ヒマンシュ・バラット氏

ヒマンシュ・バラット氏は北インドの社会活動家で 2009 年に IC に出会いましった。IC のフルタイム・ボランティアとして数年働いた後、マディア・パラデシュ州の州都ボパールに夫人と娘さんと住んでいます。インドで初めて「しあわせ局」を設置した州ですが、州の要請によりインド IC の人たちは、同局の公務員や州民に向けて、内なる声に耳を傾けるという習慣を定期的に採り入れられるよう訓練を実施しています。これにより、同州では多くの変化がもたらされ、ヒマンシュさんはこの担当者です。詳しく話してもらいましょう。

ヒマンシュ・バラットさんのシェアリング

親愛なる友人の皆様、ナマステ。

この「しあわせボランティア」活動は IC のボランティアによって始められました。何百万人もの人々に幸せをもたらすためです。インドのコロナ禍によるロックダウンの中で多くの日雇い労働者や市民たちは、われわれの助けを必要としています。誰に助けを求めてよいのか、誰が助けられるのかわからないケースも多くあります。

われわれ「しあわせボランティア」はこのようなロックダウンで影響を受けた人々と、政府の公務員との間をつなぐ役割を果たします。この働きによって、多くのさまよう人々は食料や寝る場所を得ることが出来ました。

このコロナ・パンデミックの状況下で、国中の 150 万人の行き場を失った人々のためにベストとなるものを配布しています。ボランティアの人々はインドの 23 の州に広義の家族として 550 人います。すべて、内なる声を聞くためです。

そんな中、われわれが気付いたことは、多くの人々は政府や他の機関から食料の支援は受けているが、日常の必需品がないということ、また、1 ～ 2 歳の子供を持つ母親たちは日常のミルクや子供の栄養剤を買うことが出来ない状態なので、われわれは「Helping Bank」（援助銀行）の設立を考えました。「しあわせボランティア」のある友人は基金を寄付し、そのうち 500 ルピーをそのような女性たちに直接貸し出すことにしました。

また、ボランティアたちは 23 の州で女性のための生理用品配布運動を行い、衛生面でも配慮しました。われわれは州政府や中央政府のソーシャルワーカーや NPO の食料配給をする人たちに呼びかけて、人々への配給品一式の中にそれら生理用品も入れるようにしました。この考えは多くの組織によって受け入れられました。

私は人の声に耳を傾ける準備が出来ています。

コロナ禍の中で多くの人はうつ病や不安のために苦しんでいます。誰も話しかけたり、耳を傾けて聴いてくれる人がいないからです。私たちは、このような人々の話に耳を傾けることを目的とするプラットフォームを始めました。これはオンラインのプログラムで、人々は心の中の感情をシェアし合うことでエンパワーされます。このプログラムは 12000 人の所へ到達しています。私たちは、全てのドアが閉まっているとき、自分の内側に入っていき自分の内なる声に耳を傾けるということを学びましたが、こうすると必ず答えが見つかるので驚きです。この危機の中で「しあわせボランティア」は愛、思いやり、祈りそして信頼を大切に

しながら人々を助けているのです。誰かを助けることが出来たら、それは一つのチャンスですね。

Mr. Damko Wangyal
ダムコ・ワンギャル氏

ダムコ・ワンギャルさんは 6 歳の時以来インドに住むチベット人難民です。

私たちインド人は自分たちが住む土地にチベット仏教の教主ダライ・ラマが住んでいられることを幸運に思っています。多くのチベット人はどこに住んでも多様性を重んじ、思いやりと寛容の精神をもたらす人々です。ワンギャルさんは石に絵を描き、ゼンタングル（Zentangle）を専門とするアーティストでいらっしゃいます。また、ソーシャルワークの修士号を持ち、一時期現場で働いた後、目下 IC で働いていらっしゃいます。

ダムコ・ワンギャル氏のシェアリング

シェアの機会を頂きありがとうございます。

内なる声に耳を傾けそれに従うことは、私の人生を大きく変え、周りの人のため、自分の所属するコミュニティーのために働きたいという動機付けにもなりました。何が正しいか、何が間違っているか、を判断する私の感性は限られたものでしたが、それは自分自身に対する理解力が足りなかったこと、恐れと罪悪感を持って処した経験によるものと思います。どうせ他の人もしているから大丈夫と、多くの間違いをしてしまいました。

IC に関わり始めたことで心の奥底を見ることが出来、仮定と恐れの上に立って行動するよりも何が正しいかを意識しながら決定するようになりました。

その一つの例は、卒業後更なる勉学のためチベット亡命政府から 2 万ルピーの奨学金をもらいましたが、それを大学の授業料に使うのではなく、他のことに使ってしまったのです。大学のコースが難しかったからです。私はそのコースから離れていきましたが、そのことをスカラシップ事務所へ知らせず、それを悪いことだとみじんも思っていませんでした。当時同じことをしていた人が周りに沢山いたからです。しかし、内なる声を聴いた時、その事が心に浮かび、何とか対処しなければ、と思いました。

私は急いでスカラシップ事務所へ金を返しに行きました。事務所の人は驚き、その時言った言葉は私の人生を変えました。「スカラシップの金を使ってしまうケースはこれまでも多い。しかし誰一人帰ってきてお礼を言い、その上貴方はお金を返しに来られた。

しかし、その金は受け取れない。受け取っても会計の計算書にそのような金を入れる項目がない。もし本当に返したいのなら、将来スカラシップを真剣に欲しがっている学生に上げてください」と言われました。その時、もし自分が自分自身に正直であり内なる声に耳を傾ければ、この世のすべてが私を応援してくれるのだ、と気づいたのです。

私の第 2 の経験―　チベットの難民学校で育った私は自分の国と人々が味わってきた苦しみを理解するようになりました。それまで、人々の差別扱い、殺人、チベットに住むチベット人の苦しみに関するニュースを次から次へと聞いていましたので中国人に対する憎しみがますます増してきました。そのような光景をインドのどこで見つけようと仕返しをしてその痛みをチベットの中国人に知ってほしかったのです。しかし、内なる声を聴くことによってこの憎しみの鎖を断ち切り、憎しみにブレーキをかけ、この異なった二つの民族の人々との間に友情を築く事を始めました。それからは、私は中国人の友人とインドのチベット難民キャンプを訪れることができるようになったのです。

この 5~6 年で私の中国人へ対する考えは完全に変わりました。異なる視点から彼らを見るようになりま

した。今まで敵と思っていた人たちとも友情をはぐくむことが可能であることを知ったのです。友情こそ、信頼と尊敬の気持ちを築く橋になると、信じています。
　有難うございます。

　リーナ・カトリ（まとめ）
　私たちの話に耳を傾けて下さりありがとうございました。では、ここで私たち自身の内にある知恵（wisdom）の声を聴いてみましょう。私たちは皆異なった文化、宗教の背景を持っています。それでもなお私たちは今直面している世界の危機の中で、内なる力と全体的な回復力を見つけるため、人間の知性（intelligence）よりも偉大な知恵（wisdom）を必要としています。ここで静かになって心に浮かんだ思いをノートにメモしてみましょう。

質問：ラオ氏がITの進歩について触れられましたが、もう少し詳しく話してください。

答：ITやグローバリゼーションは確かに社会を発展させました。しかし同時に、われわれはそれによってあまりに相互依存しすぎるようになりました。それ自体は悪くないのですが自分たちで生き残ろうとする地方独自の能力を失ってしまいます。確かに他国からの輸入品を見て、それを使いたくなりますが、それは依存しすぎだと思うのです。地産地消を阻害してしまいます。たとえば、なぜアメリカはインドに関心を持つのでしょう？大きな市場だからです。勿論NGOは外国を援助しなければいけないと言いますが、基本的に言ってわれわれが実際に望むのは「あの国から何を買ったら得するだろうか？」と考えてしまい地元の経済発展を阻害してしまうことに問題があると思います。

質問:チベットのワンギャルさんにお聞きします。この10年でチベットに対する中国の力が大きなものになってきて、国際舞台で中国のことを話すとマイナスなことになり、ほとんどの国がチベットのことを取り上げないで気の毒な状態にあるが、今インドに住んでいるチベットの方は自分の将来のことをどう考えていらっしゃるか、教えてください。

答：暖かいお言葉ありがとうございます。お答えする前に一言申し上げたいのですが、日本と日本人はいつもチベット人に親切にして下さり、チベット人の側に立って考えて下さりサポートしてくださり感謝しています。私の考えは楽観的かもしれませんが、このところ中国人とチベット人は、前に比べるとより親しくなり、より頼り合っています。特に今のようなある特殊な時期には、個々の国、個々の感情というより、グローバルな視点が必要です。これはダライ・ラマ法王から教わったことです。チベット人はグローバル社会の市民です。こう考える方がどこの国、ここの国として考えるよりも重要です。勿論、時には絶望的になる時もありますが、たとえ国を追われていても心を一つにして、私たちの使命は何か、如何に生きるかを考え、分かち合う役割があるのかもしれません。

質問：どうもありがとうございました。ダライ・ラマの精神が正しくチベット人の中に、あなたの中に生きていることが良く分かりました。

リーナ・カトリ

最後になりましたが我々の理事長のシダラット・シン氏にお話しいただきます。

Mr. Siddharth Singh

シダラット・シン氏

話を簡単にして３点に絞ります。

３点とも IC が世界になすこと、何が IC に必要かということです。

1，フランク・ブックマン氏についての私の理解

私のフランク・ブックマンの見方と彼の生きた人生は「世界に貢献するためには、アクセス出来るものはすべてを使った」という点です。私は恵まれた家庭で育った。この恵を自分のためにだけ使うのでなく、世界のために使うことは難しいことであるが、インスパイアリングでもあった。

2，もし、日本やインド、その他の国々が将来に投資したなら、将来の世界 IC のためにわれわれは準備が出来ているだろうか？

リーナさんも言われるように、長年かけて若者を訓練し、チェンジメーカーとして育てて行けるか？皆様全員に申し上げたいのは、私たち一人一人が将来の IC のリーダーとして若者５人を育てよう。1 人が５人を選び、IC の考えを用いて世界を変える準備をする。彼らをケアし、彼らの成長を助ける。

3，アジア・太平洋地域に貢献するため、日 / 印パートナーシップの構築

日・印ビジネス界には既に ICB という強いコネクションがある。また、日本の若者がインターンやボランティアとして既に AP へ来ている。更に、学校訪問プログラムや国際フォーラムでコネクションや交流はある。これらコネクションと友情を次のレベルに持ち上げるにはどうすべきでしょう？今私にその答えはないが、みんなで考えましょう。

日・印の関係を強化するには？

アジア・プラトーは皆さんのセンター

今後も活用していきましょう。

長い間ご清聴ありがとうございました。

「静かな時間」

（2020 年 10 月 25 日）

ジェームス・コーディナー氏

Quiet time：Hearing from the heart　静かな時間：心の声に耳を傾ける

Taking time out from the busyness of life　多忙な暮らしから時間を作る

この映像のイメージをご覧になって、何が心に浮かびますか？

この映像はあなたの日常生活をうまく反映出来てますでしょうか？

皆さんの日々の暮らしが、私の暮らしと似ているかどうかはわかりませんが、私にとっての日々の暮らしは、多忙の一言につきます。仕事や自分自身の生活管理、それに周りの人々への手助けにも忙しい日々なのです。ここで、皆さんにお伺いしたいのは、多忙な日々の中、自分の心の声に耳を傾けることだけに時間を使った最後の時はいつだったでしょうか？

では、静かな時間が私達にとってなぜそれほど重要なのでしょうか？

私個人にとっては、それは心に浮かんだことに耳を傾ける時であり、私の心は何を言わんとしているかを知る重要な時なのです。また、私のように精神性を重んじる人にとっては、自分が信じる神とコミュニケーションを持つ時であり、自分の心にあるものを聴くことによってそれに気付き、それらを聴く良い機会になるからです。

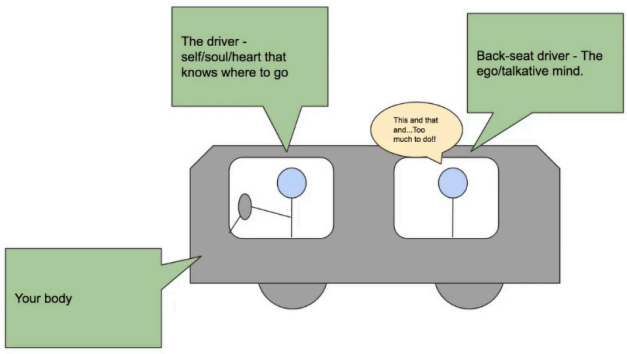
ではここで、一つの図をお見せして、人の人生との類似点をお示ししたいと思います。

皆さん、この絵が見えますか？非常に幼稚な絵で私の下手な技術をお許しください。

この図を見て、この車が、あなたの自家用車かあなたの人生だと想像してください。

車体は身体ですから、あなたは、走り続けるために燃料を満タンにして、車が大丈夫か等を常に確認しておく必要があります。

次の図を見て頂くと、運転席はあなた自身で、魂であり心でもあり、それはどこへ行くべきか、



あなたの人生をどこへ進ませるかを知っています。

では、後部座席から導く人は誰なのか、ご存知の方はいらっしゃいますか？

あなたは、後部座席の人こそが、どこに行くべきか、どのように進むべきか、いつもフィードバックしてくれる便利な運転手と思ってしまうかもしれません。

私達にとって、その後部のおしゃべりな運転手は自分のエゴ（自我）であり、決して黙る事なく、心の後ろの方から小声で、常にアドバイスし、次に何をしなければならないかを語ってきます。

私達は多忙であればある程、エゴ（自我）の独り舞台のショーが繰り広げられることに、いとも簡単に依存しがちです。

静かな時間を持つと、人生の真の方向に向かうには何が必要かを、実際に聴くことが出来る機会が与えられます。この機会を得ることは、また、忙しい身体をチェックする機会にもなり、燃料切れでストレスが溜まって休むことが必要ですよ、と知らせてくれたりもします。

最近の私の例ですが、先週初めに、首から腰まで背骨全体に激痛が走り、大きなストレスになりました。静かな時間に書き留めていると、少し休むことが必要だよとの声が聞こえました。少し立ち止まって患部を冷やしたり、リラックスが必要だというのですが、私にとって休むということはとても難しいことでした。

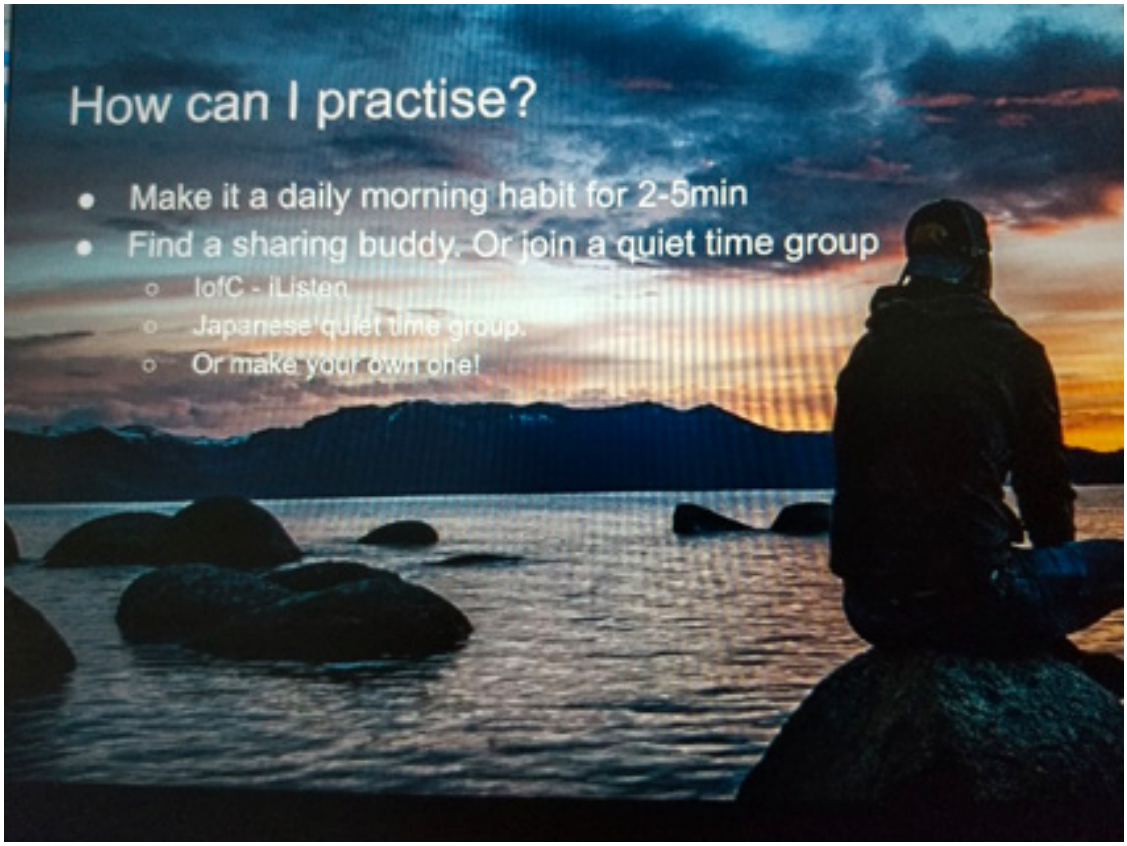
しかし実際に、医者に行きマッサージをしてもらい、背中の治療をしてもらいましたが、痛みはなくならなかったので、翌日静かな時間に耳を傾け、午前中に休みを取りました。そしてその日の終わるころには気分もすっかり良くなっていました。

静かな時間を持つ事も大切ですが、もう 1 つ、お伝えしたい大切な事は、静かな時間を持つだけでなく、それを分かち合う事も大切だということです。

Thoughts > Idea > Realization：思考＞アイデア＞認識実現（具体化）

日々、色々な考えやひらめきが浮かびますが、それを書き留めない限り単なる考えやひらめきで終わります。それを書き留めたとき初めて良いアイデアになりますが、それを他の人とシェアしない限り単なるアイデアのままです。それを分かち合うことによって、初めて実現できるのです。

では、どのように実施すればよいでしょう？



● 毎朝２～５分の習慣とする
● 分かち合う友を見つける。または、静かな時間のグループに参加する
・IC 日本の iListen のグループに参加する
・IC 日本の静かな時間のグループに参加する
・もしくは、自分独自の静かな時間を作る

私自身、毎日の習慣にしようとしていますが、なかなか毎日はできません。しかし、たとえ一日に２～３分だけでも静かな時間を持つことは、自分自身にとって重要になるのです。分かち合う機会は沢山あり、いつの日か、将来もっと分かち合えることを願っています。

それでは、ここで５分程、静かな時間をご一緒に持ちたいと思いますが、よろしいでしょうか？

静かな時間に慣れていない方は、私が話しましたように、自分の心が何かを語りかけていないだろうか、自分の体が何かを語りかけていないだろうか、と耳を傾けてみてください。では、始めましょう。

（5 分後）

いかがでしたでしょうか？

私は、ズームというテクノロジーのお陰で、こうして日本チーム、国際チームの皆さんと

繋がる事が出来、とても感謝しています。

私の心は私にささやいています。「自分の人生をただ、「忙しい」の一言で決めつけてはいけない」と。

忙しくない方が豊ですからね。

本日は、どうもありがとうございました。

日中韓フォーラムのセッション

（2020 年 10 月 25 日）

日中韓フォーラム（正式名称：東北アジア青少年フォーラム）は、日中韓の青年同士が友情と信頼関係を育くめるよう、2004 年より毎年夏に韓国において 1 週間、「東北アジアの融和のための青年の役割」等のテーマで、韓国 MRA/IC 協会が主催している大学生交流プログラムで日中韓の各国から各 20 名程度の学生が参加しています。

セッション出席者：成豪哲、石ケ森祐、小川貴士、小田世秀亜（欠席）、〆田祐奈、朴ウンヌリ、金珉成、趙丹楠、邊水媛、須崎純史（司会）、本間麻友

セッション内容：1. 車光善氏（MRA-IC 韓国総裁）のメッセージ（後述）
2. 参加者自己紹介
3. テーマ別フリートーク

《フォーラム参加後の気付き、主題副題への感想、意見》

朴：主題副題を身近な物（時事問題など）にする事で意見交換により現実味がでる。

小川：韓国でのフォーラム参加前に事前準備が必要だった。下調べをしておけば更に深い交流ができた。

《今後の国際交流のあり方》

金：今はメールなどで交流続けているけど、これが効果的かは疑問がある。

石ケ森：個人的にオンライン交流活動に参加している、ZOOM を通じてシンガポールと US の大学生と交流をしている。オンラインなら世界どこでもつながるし、言語スキルだけでなく文化や考え方の違いも体験できる。団体として企画すれば海外経験がなかったりコロナ禍の中でも国際交流ができる。

小川：オンラインだけでなく、日本にいる外国人と異文化に興味のある人同士が交流できる空間を提供したい。今台湾に留学していて、台湾以外の人とも触れ合いたい為ルームシェアをしている。オンラインは断片的にしか会えなく、テーマが存在しないといけないという弱点があり、オフラインで同じ空間をシェアする機会を IC 協会が提供できれば良いと思う。

本間：インターネット社会という今はチャンス。国際交流未経験の人を巻き込む良い機会である。オンライン交流しかできない時期を如何に活かすかで来年以降のフォーラムを更に充実したものにできる。

ミンソン；このフォーラムをオンラインで開催できるという話だったが、中国では PC で使えるプログラムにたくさん制限があるというところが憂いである。LINE、カカオトークも使えないので中国側に配慮する必要があるだろう。月一とかで開催回数を増やして持続できる可能性を広めたい。

司会者総括：

・フォーラム主題副題：テーマが大きすぎる。参加者にとって身近なトピックやタイムリーな物が良いのではないか。形にできるようなテーマで今後の活動につなげたい。

・国際交流の在り方：オンラインを中心に行いつつ、オフラインの重要性も忘れない。オンライン化する事でコンスタントな実施が可能になる。また参加のハードルも低くなる。

成理事：弁護士会で国際交流を担当していて、香港問題がよく取り上げられているので民主主義を擁護する団体としてこの状況にどう対応するのかを考えている。政治的中立は人に干渉しない何もしないではなく、私たちが持っている価値観に基づいてどう人と付き合っていくのか対応していくのかが大切だろう。世界がつまらない方向に走っているので若者に申し訳ない。今回のセクションはポジティブな内容が多かったのでとてもうれしかった。

一般参加者のコメント：九州から参加しています。日中韓フォーラムは若い人だけのフォーラムかと思っていましたが、今日初めて皆さまのお話しを聞いて感動しました。九州は地理的に韓国に近く、韓国の方も大勢おられますし、私自身韓国が大好きです。若者による日中韓フォーラムは結構なことですが、我々シニア世代も日中韓の方々とお話しをする機会を作って頂ければと思います。

日中韓フォーラムセッション後の座談会より

・セッション中、参加されていた方々が発言中にうなづき関心を持っている様子を感じ、今後の活動意欲になった。
・今回のセッションが日中韓フォーラム OBOG 会のきっかけにしたい。
・今後も参加年度を超えて継続的に日中韓フォーラム OBOG と繋がりたい。
・セッションに参加し、社会人になっても国際交流ができるとても良い機会だった。

朴ウンヌリ

参加年度：2011、2012、2013、2014、2015、2016、2017

①フォーラムに参加しての気付き、変化

国際交流はもともとやっていたものなので、教育や青少年について興味を持つきっかけになりました。また、国際フォーラムという場がもっと必要だなとも痛感した。

②フォーラムの主題副題への感想、意見

・各国の準備会として分科会をある程度進めて置き、その資料も事前共有し、本番のフォーラム時にはもっとスムーズに本題について話せたらと思う。文化の違いや認識のずれを解消するのは事前準備段階でやっておいた方がよかろう
・今まではわりとテーマの規模が大きすぎて、討論の結果の実行にはなかなかつながらなかったけど、今後はもっと小さくて実行できるテーマを設けたらどうかな。地域密着型プロジェクトとかをフォーラム終了後実際つなげていけるように。
・↑が解決できれば、自然に OBOG 会も地域ごとに開けるだろうし、1 回きりのフォーラムではなく持続性と実効性のあるものになるだろう。

③国際交流の今後のあり方

・私が参加していた「コモンビート」という NPO 団体で、ZOOM を使った国際交流を定期的に行っているが、このモデルがとてもいいと思いました。
・インターネットを通じての交流なら、国が離れていても開催できる
・つまり、このフォーラムもプチフォーラムという名でもっと短いスパンで持続開催できる。
・これからの国際交流は、単なる「文化体験」の交流より、「価値観」「考え方」に重きをおいたほうが、より深い理解と交流ができるのではないか

・進んでは、きっかけは国際交流だったものの、国というレッテルを貼ることなく各「個人」の深い交流につながることに気づくような交流の場であってほしい。

小田 世秀亜（おだ よしゅあ）

参加年度：2015

①フォーラムに参加しての気付き、変化

元々留学生なので、新たな気づきは無いけど。
良い子達がたくさん集まって楽しかったなと思います。

②フォーラムの主題副題への感想、意見

正直ベースなら、個のレベルでは、歴史とか政治に基づく国家・民族間の負の感情を払拭していくのは至難の技だと思う。なら誰も何もしなくていいか、というとそうとも思わないが、こうしたら良い、という画期的なアイデアは多分誰にも無い。強いて言えば昔より個が持つ発信力はネットによって年々強まってるので、可能性があるならそこかなと。

③国際交流の今後のあり方

コロナは永遠に続くと思わないので、コロナの為ではなくもっと general に。4G ⇒ 5G ⇒ 6G と通信容量 & 速度が爆上がりしていくことと、3D ホログラムの技術が進歩して普及していけば、今ビデオ通話が出来るのと同じ感覚で、3D 映像で人に会える時代が来る。そうしたらもう一つ次の時代になって、コミュニケーションの為に実際に人に会う、同じ空間にいる必要性はもっと下がる。逆に 3D 映像で人に会えればほとんど F to F と同じ破壊力でコミュニケーションが取れる、しかもそのハードルは今実際に人に会うより格段に低くなるので、国際交流なんかは想像つかないほど加速するのかなー、という夢をみました。

趙 丹楠（チョウ　タンナン）

参加年度：2018, 2019

①フォーラムに参加しての気付き、変化

フォーラムをきっかけに、日中韓三カ国の大学生と異文化コミュニケーションして、それぞれの文化を勉強し、お互いに理解することが大事だと感じます。視野が広くなりました。

②フォーラムの主題副題への感想、意見

毎年の主題副題はいいテーマだったと思います。

③国際交流の今後のあり方

コロナの影響で確かに物理的に距離があります。オンラインで交流会を開催でもいいと思います。

小川貴士（おがわ　たかし）

参加年度：2019

①フォーラムに参加しての気付き、変化

国を超えた議論では双方の情報の非対称性の差がより大きく、またそれが自身の偏見を強くさせることを身をもって感じた。

②フォーラムの主題副題への感想、意見

1. 主題副題に沿って議論がなされていたのは初日の日韓での討論だけだったような気がする。テーマに関する下調べや、話し合いの期間等準備不足
2. テーマを、作るべきか（昨年同）
   国毎の議題を作るべきか（日韓、韓中等）
   少人数グループの方が話が盛り上がる。
3. 違う国の子と部屋を共にするのはとても良かった。議論後の気が抜けた時の他愛もない会話で仲が深まるんだなと

4.3 ～ 4 日目以降は自分らで議題設定をすると主体性と柔軟性が生まれるのではないか

③国際交流の今後のあり方

1. 国際交流したい人等がコロナの影響でウズウズしていると思うのでその為に言語の勉強をしておく
2. のりと勢いで一緒に住んじゃう
3. 自己研磨
4. 時機を待つ

本間麻友（ほんま　まゆ）

参加年度：2015~2017、2019

①フォーラムに参加しての気付き、変化

大人になると偏見や個々の物差しを変えることは難しいが、フォーラムを通して大学生という時期に違う価値観の同世代と話す事で、変えられると思った。義務教育後の自分で学びを得ていく期間というのが新しい物の吸収に適しているのだと感じた。

②フォーラムの主題副題への感想、意見

・毎年異なるテーマで何度参加しても面白かった。メンバーが違えば、考え方も異なり、過去のテーマを今後改めて討論しても時代が異なり面白いと思う。

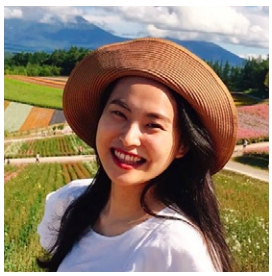
・個人としての目標設定・共有があっても面白いと思う。フォーラムを通してどんな学びを得たいのかがより明確になるのではないでしょうか。

③国際交流の今後のあり方

・どんな形であれ交流を継続する事が一番大切だと思う。
連絡先を知っていても、連絡をしようとしなければ交流は続かないし、直接会えない事で、連絡を取るきっかけにもなると思う。

・方法にとらわれず楽しんだもの勝ちだと思う。

〆田祐奈（しめた　ゆうな）



参加年度：2015, 2017

①フォーラムに参加しての気付き、変化

・相手国に関して、見たい・知りたい部分だけを切り取っていたことに気づくことができた

・自分自身、常識と思っていたことが必ずしもそうではないということに気づくことができた
・自分の思いを伝えるため、相手の思いを完全に理解するには語彙力・コミュニケーション能力が必要であると感じ、より一層言語学習・表現方法の習得に力を入れることができるようになった

②フォーラムの主題副題への感想、意見

・（私自身が参加した際、具体的な主題副題が何だったかは忘れてしまったのですが、）あまり日常生活になじみのない主題副題の場合、フォーラムをきっかけに考える機会を得ることは非常によいと思うのですが、討論しにくいのではないかと思いました。また、日常生活に近い主題副題のほうが普段の生活からのひらめきがあったり、討論で出た意見や目指すべき姿を普段の生活に取り入れることができるのではないかと感じました。
・テーマが３つあったと思うのですが、1,2 個のテーマは固定で、残りの主題副題を時事問題等にすると、固定の主題副題に関しては、時代の流れやその年に参加者によってどのような討論結果となるのか、比較ができておもしろいのではないかと思いました。

③国際交流の今後のあり方

物理的な距離があるため、オンラインでのコミュニケーションに限られてしまう中での国際交流は、正直なところ難しいのではないかと感じています。やはり、同じ場所で同じ時間を過ごすことによって生まれるシナジーが大きく影響すると考えるからです。そのため、このような既参加者の集まりの機会を増やして、その輪の中に新しい仲間を入れて、輪を広げていくことが今できる国際交流なのではないかな？と感じています。

石ヶ森 祐（いしがもり　ゆう）

参加年度：2019

①フォーラムに参加しての気付き、変化

日韓関係が一番悪かった時に韓国に行ったので生の韓国の姿を見れたと思う。メディアの報道は誇張しすぎだなと感じた。日中韓で言葉が通じなくとも交流ができるということに気づいた。そして各国の等身大の学生の想いを知ることができた。本フォーラムがきっかけで東アジア友好のために実際に行動することができた（日中学生会議で実行委員を担当した。）

②フォーラムの主題副題への感想、意見

・現地に行く前にもう少し各自事前準備をできたのではないかと思う。歴史問題の話をする際に日本はあまり歴史教育に力を入れていないためついていくのが大変だった。
・日韓討論会後に中国組が合流したため、日中・中韓交流があまりできなかったと思う。日韓よりバックグラウンドにある背景が違うからこそもっと交流すべきだったのではないかと感じた。日中通訳をできる人がいたら交流しやすかったのかもしれない。
・チキン食べてお酒のみながら討論したのが楽しかったので非公式ながらもそういうのを続けて欲しいと思った。

③国際交流の今後のあり方

現在 Zoom で Language Exchange を行なっているのだが、案外言語面より文化面での方が学びを得られているなと感じたので Zoom でそういうのをやって見ると面白いし、気軽に海外に友達ができるのかもしれないと感じた。

金珉成（キム　ミンソン）

参加年度：2015~2017、2019

①フォーラムに参加しての気付き、変化

漠然だった日中の文化の違いや考え方の違いをはっきりと知り、また肌で直接触れたことで私の中にあった堅苦しい固定観念が砕けた。それから本フォーラムや、他の国際行事に参加した時、受容的な姿勢で受け入れることができた

②フォーラムの主題副題への感想、意見

コロナが我々の社会に与えた影響

その中からどう振る舞うべきか

みたいなテーマで話し合えば有益な時間になりそうだ

③国際交流の今後のあり方

もっとも良いのはインターネットを使ったオンライン交流しかないと思いつつも、果たしてこれがどれだけ効果的なのかに対してははっきりと言い切れないものがある。

しかし今は他に方法がないため、これが最善だと思う。

実際に今年の国際交流やゼミのほとんどが取り消しになったり、オンラインで開催された。

　一旦こういった形で開催して、そこからメールやSNS、ラインのようなもので交流を続けるのは一番だと思う。

邊水媛（ビョン　スウォン）

参加年度：2015, 2016

①フォーラムに参加しての気付き、変化

フォーラムに参加してはじめての中国人の友達ができた。いまだに連絡できていい絆だと思う。

日本の参加者とは深い話もできてよかった。

今働いてる会社でも日本人だけではなく、韓国人、中国人、ベトナム人などいろんな国の人と協力して仕事をしてて、フォーラムの参加の経験が少しは役に立ったのかなと思う。

②フォーラムの主題副題への感想、意見

参加した時の主題とかはもう覚えてないけど、参加者でもない大人たちが決めた主題で進行するのが少しは残念だった。もっと参加者同士で作って行くフォーラムだったらよかったと思った。

今年の参加者が参加した経験を生かして、次はこのような主題でみんなが話し合ってほしいと、来年の主題を決めることも良いかと思う。

そう言う意味で、来年はせっかく（？）延期になったオリンピックもあると言うことで、

「スポーツにまつわる日中韓の交流方法について」はどうだろう。

③国際交流の今後のあり方

コロナの影響でお互い会えないこそ、国際事情に興味を持つこと。

尚且つ、国際交流にあたって、一番大事なことは言葉なので他国の言葉や文化に興味を持って勉強することが大事だと思う。

自粛中いろいろ外国語を勉強する機会があれば是非することをおすすめ。

須崎 純史（スザキ アツシ）

参加年度：2016

①フォーラムに参加しての気付き、変化

・海外の人とコミュニケーションをとることに抵抗がなくなる。

・主体的に行動する事ができるようになった。

・仕事をしていて他のメンバーより中国、韓国の人達と円滑にコミュニケーションをとれている

②フォーラムの主題副題への感想、意見

フォーラムの主題、副題をより時事ネタや今起こってることに焦点を当ててもいいかも。従来も時事ネタには注目しているが学生の皆が討論しやすいお題によりする。

コロナ下での国際交流、観光、イベントのあり方等

③国際交流の今後のあり方

コロナが収束するまでは Web 上での交流活動をメインにおこない、週 1 回ペースでお題を決めて 1-2 時間程度の交流を複数回実施する。

韓国 車光善会長 メッセージ

（2020 年 10 月 25 日）

世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部
総裁　**車　光善（チャ・グァンソン）**

尊敬する矢野弘典　国際 IC 日本協会会長、
Suresh Vazirani　国際 IofC 会長、
レバノンの Ramez Salame 先生と Wadiaa 先生、
そして、2020 年　IC 国際フォーラム参加者の皆さま、

まず、今年「IC 国際フォーラム」には直接参加することが叶いませんでしたが、インターネットを通じたメッセージで皆さまにご挨拶することになりましたことを、とても嬉しく思っております。

世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部は、「東北アジアの平和と繁栄のための青少年の役割」という主題で、2004 年に日中韓の大学生が参加した中でソウルにて「第 1 回東北アジア青少年フォーラム」を開催して以来、昨年の 2019 年まで 16 年間繋いできました。

このように意義のある行事が、コロナウィルス（COVID-19）の全世界的な拡散によって、今年は行事開催が不可能になったことをとても残念に思います。

しかし、今年は、日本で開催される「2020 年　IC 国際フォーラム」で短い時間ですが、この間の我々の世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部が開催してまいりました「東北アジア青少年フォーラム」に参加した若者達が「東北アジア青少年フォーラム」を振り返りながら、これからの発展的な方案を模索してみようとする時間を持つこととなり、とても嬉しく思っております。この場を通じて、討論に参加して下さった日中韓の青年の皆さまに感謝申し上げます。

「東北アジア青少年フォーラム」は、私が生涯深く関心をもって努力してきた両者間の交流である、日韓青少年交流と中韓青少年交流をより未来志向的に一段階アップグレードして発展させた多国間行事です。

この行事は、民間レベルで次世代の主役である 3 カ国の青少年達に東北アジアの恒久的な平和と未来志向的な協力に関する率直な対話の場を提供したかった私の強い意志を実践するための計画でありました。

もちろん、東北アジア地域における平和と協力、共同繁栄、文化交流、環境開発と保護、経済発展等において、日中韓 3 か国の政府レベルの努力と関心は非常に重要であるものの、民間レベルの協力も何より重要であると思います。

このような意味において、民間団体である国際 IC 日本協会が開催する「IC 国際フォーラム」と世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部が推進してきた「東北アジア青少年フォーラム」と「日韓大学生フォーラム」が持つ意味は非常に特別なものだと思います。

今年、国際 IC 日本協会が主催する「2020 年　IC 国際フォーラム」の副題である「私達はどんな未来をつくりたいのか！」の議論のために世界各国の MRA/IC リーダーが直接会うことはできませんが、映像を通じた深みのある対話と討論を通じて良い方案を提示して頂けることを心より望んでおります。

あわせて、COVID-19 が一日でも早く終息し、日中韓大学生が、対話と出会いの場である「東北アジア青少年フォーラム」が 2021 年に再びソウルで開催されることを心より希望するとともに、皆さまのエールとご協力を望みます。

最後に、このフォーラムの間に、皆さまのより良い意見や協力を期待し、素晴らしいフォーラムになるよう祈念いたします。

ありがとうございました。

学校訪問プログラムのセッション

（2020 年 10 月 25 日）

長野 清志
（学校訪問プログラム・コーディネーター）

■ 初めに

2002 年に試験的にスタートしたこの学校訪問プログラムは、2009 年かウス（現一般財団法人）の助成金を受けて（2019 年は一般社団法人東京倶2 か月余の期間となり（2015 年からは、1 か月余に短縮）更に多くの小学することが可能となりました。2009 年から 19 年（17 年は休止）の 10 年間に、小学校から大学までの延べ 248 校、約 2 万人以上の生徒・学生の方々と交流しましたが、国際理解教育と心の教育を併せ持ったこのプログラムは各地で好評を得ました。プログラムは、IC の歌や家族の融和をテーマにした寸劇、青年たちの自らを良い方向に変えたチェンジの体験の分かち合い、静かに自分を顧みる内省の時間、そして、各国の文化紹介から成り立っています。更に大学生等には、自分のこれまでの人生を顧み、これからの人生を充実させるためのワークショップも加えています。

■ 日本での滞在で得たもの・学んだもの

今回の IC フォーラムには、その 10 年間に来日した 16 か国・地域の 38 名の青年たちのうち、10 名（台湾、インドネシア、ケニア、ベトナム、チベット、インド）が参加してくれましたが、先ず自己紹介と彼らが日本での滞在中に学び、その後、生活していく中で活かしていること等を短く話してもらいました。

1．シャオ・ユンウェイ（Ms.HSIAO Yung Wei、台湾）

【プロフィール】2015 年度に参加。1985 年台湾で生まれる。大学では、法律、特にパテントについて学び、卒業後はコンサルティングの会社でリサーチャーを務めるなどした。2014 年に韓国で開催された IC アジア・太平洋青年会議に参加。2014 年の 9 月からの 5 ヶ月間、インドの IC センターでインターンを務めた。韓国に 1 学期間交換留学を行い、韓国語を学んだ他、日本語も学んだ。

現在は、会計事務所で法律コンサルタントとして働いている。クリスチャン。

この会議にお招き下さり有難うございました。台湾のウェイです。2015 年にこの学校訪問に参加しました。その後、日本に 1 年滞在しました。その後、台湾に戻り、現在は台湾で働いています。学校に行った際、生徒さんたちが外国から来た人たちにとても興味を持っていたことに関心を持ちました。外国の人たちに会ったことのない生徒さんたちでしたので、私たちがしていたことはとても意義深かったのではと思います。日本の IC、そして IC のプログラムから学んだことは、コミュニケーション技術とチームとして共に働くということです。今年はコロナで学校訪問が中止となったそうですが、来年は又再開出来ればと願っています。

2．ペノ・ヒエカ（Ms.Penuo Hiekha、インド）

【プロフィール】2009 年度に参加。1983 年生まれ、インド・ナガランド州出身 、大学では歴史学を専攻、インド IC センターでインターン生（2007 年）となった後、2009 年には、インターンのコーディネーター

として再び同センターで活動した。現在は、インドのICセンターであるアジアプラトーの理事も務める。学校や大学等でプログラムを運営するとともに、異なったコミュニティーの青年リーダーたちのダイアローグも促進している。また、様々なインド州政府職員を対象とした倫理や価値観に関する訓練プログラムも行っている。クリスチャン。

インド・ナガランドのペノです。日本の学校訪問で一番印象に残っていることは、ある小学校を訪ねて、「日本に対して一番誇りに思うことは何ですか？」と聞いた際、少年が「この60年戦争をしていません」と答えたことです。その答えはこの学校訪問で私が得た最も価値がある学びであり最高の贈り物の一つでした。公正な社会を作るためには憎しみや怒りの居場所はないということを教えてくれました。

現在、価値教育の訓練を教師や学生に行うと共に、諸コミュニティーの中での正直な対話も進めています。その際、その少年の答えについてしばしば話します。それこそが、許し、人々を統合させ強い国を建設した日本の能力をはっきりと示すものです。

難しい話し合いを進行させる際に人々に紹介するのが、正に私が携えるこの日本のメッセージです。

3. ヨフリナ・ガルトム（Ms.Yofrina GULTOM、インドネシア）

【プロフィール】2013年に参加。1989年、インドネシアで生まれる。2011年にメダン国立大学（教育学部）を卒業。様々なIC会議に参加。又、2012年に、日本で開催されたICアジア・太平洋青年会議にも参加した。ICアジア・太平洋連絡調整会議の運営委員。学校、及び教育センターで英語教師として奉職し、現在は大学講師を務めている。クリスチャン。

インドネシアから今日は。私の名前はヨフリナです。2013年の学校訪問の一員になれたことを誇りに思います。高橋久子さんから、この学校訪問のメンバーに推薦頂いたことを改めて感謝したいと思います。日本で感動したことの一つは、市内観光の際に、私がインドネシア人だと知った、ある日本人男性が、「日本人を代表して、インドネシアを植民地化した時代に起きたことに対して謝罪したい」と言って下さったことです。私は、日本の軍政の残虐行為について学校や本で学んでいましたが、この謝罪の経験から日本への理解を深めることになりました。この体験は自分が想像したこともないほど、私を変えたのです。この学校訪問の体験は私の人生に、特に、私の教師としての人生、そして、「前向きな教師のためのキャンプ」や学校訪問などの教育に関係したインドネシアのIC活動に役に立っています。

4. アツヌオ・ヒエカ（Ms.Atunuo Hiekha、インド）

【プロフィール】2014年に参加。（初来日）1986年にインドのナガランドで生まれる。インドでのＩＣの諸会合や、2012年にナガランドで開かれたIC国際青年会議と2013年に韓国で開催されたICアジア太平洋青年会議（APYC）に参加。社会学の修士号を修め、高校で2年間社会科を教えた体験も持つ。

現在は、ラジオ・ジョッキーと呼ばれる、ラジオ（コヒマの）の総合司会者として、また、ドキュメンタリー制作のアイディアをフリーランスとしてリサーチする仕事をしている。クリスチャン。

私は、アツヌオ・ヒエカです。皆はアツーと呼んでいます。インドの東北部である、コヒマの出身です。2014 年の学校訪問グループのメンバーです。学校訪問プログラムの間、日本の文化、ライフスタイル、そして社会構造をホームステイを通じて学びました。

これらの体験は、今、私の町で私が始めた活動の元になっています。私は、「グリーン・チーム・コヒマ」というチームを持っていますが、これはコミュニティーを形成するために奉仕するボランティアのグループです。コヒマの町の緑を守り、復活させるための活動を起こすのが目的です。ハイテクが進んだ東京でも、内にも郊外にも緑が保たれているのに気づきました。これには本当に感心しました。学校でも大学でも、ホームステイ先でも、日本人はゴミを非常によく管理しているのにも気づきました。そこで、私とチームは、ごみの分別のために、私の町の学校、大学を始め、あらゆる場所を草の根的に訪ねました。私が日本で学び、しっかりと持ち帰ったことは、親切を通じて親切は返されるということです。それで、コロナ禍で国中がロックダウンされた際、町には 290 以上の最貧困の家庭があるのですが、私とチームは一家族当たり 22 ドル相当の食料を配れるだけのお金を集めました。このコロナ禍にあって、町の多くの住民がボランティアでこのグリーン・イニチアティブを通してのコミュニティー創りのための行動を起こしたのにも気づきました。清潔、衛生、リサイクル、緑の回復、そしてゴミを管理するというイニチアティブは全て、私が日本で学んだレッスンです。学校訪問プログラムが、フランク・ブックマン博士が、「日本はアジアの灯台である」と言われた通り、私の町に大きな影響を与えているのです。有難うございます。

5. ヒュン・チュウー（Ms.HUYNH Thu 、ヴェトナム）

【プロフィール】2015 年に参加。（初来日）1992 年、ヴェトナムで生まれる。家族で経営する会社の管理職を務めた。IC のイベントを支えてきた他、孤児のための NGO で美術活動のリーダーを務めるなどの活動にも参加してきた。2 年間のイタリア留学の後、現在は、ノート製作など手造り製品を手掛けるビジネスを展開し、地元の工芸団体も支援している。宗教は特になし。

皆さん、今日は。私は、ベトナムのヒュン・チューです。2015 年にこの学校訪問に参加しました。日本での学校訪問の際に得た最も価値ある学び・体験は、現在も役立っています。現在、私はＮＧＯに所属してはいませんが、日本での経験は今日の私へと育ててくれたものであり、自分の宝と思っています。第一に、子供の発達に教育は最重要なものと考えます。そして、良い人生の価値観は、良い人間になる鍵だと思います。私は IC の価値観を、人生のあらゆる状況において自分の振る舞いを決めるための核となる価値観として保っています。それは、私をとても幸福にしてくれるものです。

二番目のことも私にとって役に立っています。それは、異なった国と文化を持った友人たちと共に働くことの学びです。相互理解、心を開くこと、異なる文化を受容することは、良いチームを築くための、とりわけ国際的な環境の中で働く時に必須です。

日本でのこの経験は、イタリアという違った文化の中で生活し、多くの国々から来た友人たちと共に働かなくてはいけなかった時に、実際役立ちました。

最後に、日本への訪問中、日本の文化を体験し、IC の雰囲気に浸らせてくれる機会を下さった日本の IC チームの皆様にお礼を申し上げたいと思います。ご清聴有難うございました。

6. チュン・テイ ミ ホア（Ms.TRUONG Thi My Hoa、ベトナム）

【プロフィール】2016 年に参加。（初来日）1991 年ベトナムで生まれる。大学では貿易学を専攻。2014 年の台湾での IC アジア・太平洋青年会議（APYC）等にも参加。外国人のための料理教室の料理長アシスタントを務めた。2019 年 12 月に、バンコックに赴き旅行会社で働き始めたが、コロナの影響を受け、ベトナムに帰国した。2020 年 10 月からマレーシアのクアラルンプールの BPO の会社で働き始めた。宗教は特になし。

経験したことを話す機会を頂き感謝します。私は、ベトナムのホアです。2015 年に学校訪問に参加しました。多くのことを学びましたが、特に価値のあった 2 つの学びについてお話ししたいと思います。1 点目です。国際的なアクションプログラムにそのように長く参加したことは私にとって初めてのことでした。プログラムを通して、国々の間に多くの文化の違いがある事を知りました。同時に私たちが直面している多くの共通の問題があるということにも気づきました。この学びを通して、共通のゴールを目指すために多文化の環境の中で共に働きながら、どのようにお互いの違いを尊重するべきかを知りました。

2 点目は、IC の全ての価値観を見出し、また、思い起こす機会となったということです。そのことを日本の友人たちと分かち合いましたが、私のこれからの人生の旅に役立つと思います。

7. ノウシ・チェドン（Ms. Ngoshi Choedon 、チベット / インド）

【プロフィール】2019 年に参加。（初来日）チベッ・愛ト難民の 3 世として 1992 年、インドで生まれる。Guru Gobind Singh Indraprastha 大学で経営学を学ぶ（修士）。2017 年 2 月から 5 か月間、インドの IC センターでインターン。その後、2 年間はインドの IC のアウトリーチ・チームの一員として活動し、インド各地やネパールにおいて、学校や大学などで若い世代に向けての IC プログラムを提供した。現在、チベット子供村本部で会計士の仕事をしながら、オンラインで、仏教の学位をとるため勉強中。又、「チベット・アイ・ケアー」という IC のチベット人グループの一員としても活動している。

今日は。皆さんにお会いできて幸いです。私の名前は、ノウシ・チェドンです。インドで生まれ育ったチベット難民です。2019 年の学校訪問のメンバーです。

学校訪問のプログラムで学んだことの一つは、ケアー（心遣い）です。プログラムを通して、日本の方々から多くのケアーを受け、私たちの滞在は意義深く記憶に残るものとなりました。このことは、インドの IC センターであるアジア・プラトー（AP）を訪れる人々に注意を向けケアーしていくことの大切さを教えてくれました。とは言え、簡単な時ばかりではありません。何故なら、ある時、私は、世界の各地からの 12 名の青年を 7 週間にわたって訓練するプログラムをコーディネートしていたからです。それでも、日本滞在中に私が受けたのと同様のケアーの精神で物事を進めていけるよう試みました。

8. リアタン・ヌグリー（Mr. Riathng Ngullie、インド）

【プロフィール】2019 年に参加。（初来日）1985 年、インドで生まれる。ナガランド大学で、西洋政治哲学・環境問題等を学ぶ。ハリヤナ州で約 3 年会社に勤務したが、その間の 2012 年に IC アジア・太平洋青年会議に参加。2013 年 9 月から 5 か月間、インドの IC センターでインターン。2018 年より約 2 年間ＩＣのアウトリーチ・チームに加わった。現在、インド南部のタミール・ナド州に住み、人権問題の勉強を目指している。クリスチャン。

ナガランド州のリアタンです。インド東北部にあり、ビルマ、今のミャンマーに国境を接しています。今話をしたノウシさんと共に、昨年の学校訪問のメンバーでした。話したい体験はたくさんあるのですが、3 つのことに絞りたいと思います。

色々な県を訪ねた時に、それぞれの県が特別のものを持っていることに気づきました。それは、私のような部外者の目を開かせてくれるものでした。例えば、静岡は良質なお茶で知られています。他の県では、芸術、陶器作りに焦点を当てています。それぞれ何か素晴らしいものがあるということです。それぞれの地域の違いを感謝するべきという観点を得て、同様に人間がそれぞれ違うという点も感謝されるべきと感じました。同様に、私自身も人々が皆違うということを受け入れ、私の人間関係を向上させるべきと認識しました。

２つ目に、出会った多くの若い日本人の友人たちが、家族との間に問題を抱え、いくつかの家庭は機能不全に陥っていることに衝撃を受けました。ライフスタイルとテクノロジーの発達した中でも、人間関係を見つめるべきではと思いました。

最後に、静岡の学校のテニスグランドでテニスをした際、4 球をミスりましたが、最後の一球を打てた時、後ろにいた学生たちが皆で拍手をしてくれ勇気づけられました。この行動は、私の精神を高揚させ、そのことを思いだすと勇気づけられます。私の社会でも色々な理由から、球を打ち損ねたかのように、恥ずかしく思ったことがあります。このことから、人に感謝し、勇気づけることが如何に重要かと認識させられました。

最後にもう 1 つ、昨日、ヴァジラニさんが「改善」の哲学について話されました。それは、たゆまぬ向上と理解していますが、私も自分の人生の中でその「改善」の実行を試みたいと思います。

9. ニアス・ワニムボ（Mr. Neas Wanimbo、インドネシア・パプア州）

【プロフィール】2019 年に参加。（初来日）1995 年生まれ。Tanri Abeng 大学で情報工学を学ぶ。2016 年に参加した IC アジア・太平洋青年会議に参加。2016 年からインドネシアの IC で活動し、2017 年 9 月から 5 か月間、インドの IC センターでインターンとなる。更に、2018 年 3 月から 6 か月間、インドにおいてＩＣの青年研修プログラムの一員として活動。現在、フリーランサー（ウェブデザイン等）の仕事をすると共に、「ハノ・ウエネ基金」を設立し、パプア州の僻地の学校や村に図書館を作るなど、教育普及活動に力を注いでいる。クリスチャン。

皆さん、今日は。　何人かお馴染みのお顔もあり、皆さんに、世界各地からの兄弟姉妹にお会いできて幸いです。私の名前はニアスです。インドネシアのパプア州からです。昨年の学校訪問のメンバーで、ノウシさんとリアさんと同じグループでした。

このプログラムで学んだことは、日本の教育システムについてでした。学校の先生方が、教科を教えられ

る時、生徒さんたちがうまく対応できているかとサポートするための忍耐心をお持ちの様でした。生徒さんたちにもフレンドリーで親切でした。インドネシアでは、先生たちは、ただ授業を行うというケースも時々あります。しかし、日本で体験したことは違っていました。

学校のシステムも、国の標準で、全ての学校にプールや運動場がある。スポーツにも焦点があてられる。これらは、インドネシアにはないものです。日本の教育制度を見て、目が開かれました。このプログラムが終わった後、帰国しましたが、今、私はパプア州の教育に焦点を合わせたプロジェクトを行っています。私の地域での教育システムは、劣悪です。先生の数も少ないです。本もないため、そこで、非営利組織のプロジェクトを始めました。僻地の子供たちが学べるよう無償で本を配布しています。

日本のプログラムで学んだこと、そして、プロジェクトを実施していることで、私の地域での教育の質を向上させることができます。私の村から始め、本を配り、子供たちとパプア州での地域社会をサポートする活動を６つの地域に拡大しています。

日本の学校訪問プログラムが、教育システムがどうあるべきということに対し、私の目を開いてくれたのです。今や、先生たちの能力を高め、子供たちがより良い教育を得られるようにサポートできます。有難うございます。

10. エスタ・カマウ（Ms.Esther KAMAU、ケニア）

【プロフィール】2013 年に参加（初来日）。1992 年、ケニアで生まれる。ケニアのナイロビのマシンデムリロ科学技術大学で社会奉仕活動と地域社会開発を専攻。祖父母がＩＣの活動に係わっていたことから、ＩＣを知った。青年奉仕活動グループ（VIJANA PAMOJA: Youth Together の意味）のボランティアとして、エルドレット（Eldoret）市の異なるコミュニティ同士の融和をもたらすために活動した。同時に叔父が熱心に取り組んでいるＩＣの主導する選挙浄化運動も手伝ってきた。数年前に大学を卒業し、現在は、お姉さんの経営する化粧品店で働くと共に、老人ホームやケアを必要とする人々への奉仕活動をしている。クリスチャン。

皆さん、今日は。私はケニアの、エスタ・カマウです。参加できてうれしいです。日本での滞在で一番学んだことは、先ず、「静かな時間」を持つことで、今日まで続けていますし、そのことを友人にも紹介しています。

２つ目は、他の異なった文化を認め感謝することで、これは宗教についても同様です。何故なら、私の国には多くの宗教が存在するからです。

■ 現在のイニシアティブや決心についての話

続いて、次の３名の方たちから、この会議のテーマに関連した、彼らの現在のイニシアティブや決心についてお話し頂きました。

1. ヨフリナ・ガルトム（Ms.Yofrina GULTOM、インドネシア）

インドネシアから今日は。このフォーラムでお話しできる機会を得たことを光栄に思います。これは私の 4 回目の訪日となりますが、今回はパスポートもビザも必要ありません。要るのはインターネットの接続だけです。

「ピンチをチャンスに変える」という今日のテーマに関連付けて、私が台湾に行って中国語と中国文化を学ぶ決心をしたことについてお話ししたいと思います。

巣ごもりの期間に、何か新しいことを学びたいと思いました。そして、私は語学の学習に情熱を持っているのです。去る3月に、台湾で中国語を学ぶための奨学金を申し込もうと決めました。神様の計画のもとに物事は起こると信じていますので、神様に全て委ねました。

数か月後、台湾の教育省のスポンサーによる中国語の6か月コースを受ける奨学金が決まったとの連絡を得ました。8月には出発するはずでしたが、コロナ禍が発生したため、そのクラスには参加できなくなりました。今年の11月か来年の2月には出発することになるでしょう。神様の与えて下さるタイミングを信じています。忍耐と信仰が必要ですが、待つ価値は十分にあります。

言葉の学習には文化が重要なので、中国語の学習を通して中国文化をもっと理解したいです。加えて、私の生徒の殆どは中国系インドネシア人なのです。22年前に中国系インドネシア人に対する人種的な暴動がインドネシアで発生しました。1000人以上の方々が亡くなり、何千人もの人々が財産を失い、国から逃れ去ったのです。Z世代と呼ばれる私の生徒たちが、まだ生まれる前のことでありましたが、直接的な体験はなくても、両親から聞いており、このような歴史の側面について承知していました。その記憶は痛ましいものです。

今年6月でその学校で教えることを終えました。素晴らしい6年間でした。私の生徒の何人かの親から、「もう子供たちを教えて頂けないのが残念ですが、中国語を学ばれることを応援します」と言ってもらい、言葉では言い尽くせない程、感動しています。

それでは、私がどんな未来を築きたいというのでしょうか？　教育は社会の向上に寄与できると思っていますので、私は、その分野で貢献したいと望んでいます。オンラインでの授業を終える前に生徒たちと共に振り返り確認したことは、連絡を取り続け、感謝することを実践しようという単純なことでした。ビザの申請を待っている間、或る大学でオンライン授業をし、ICの仲間たちとのオンライン会合を行っています。

IC世界家族の皆さん、私のお話をマハトマ・ガンジーの言葉の引用で終えたいと思います。「明日死ぬかのように生きなさい。永久に生きられるかのように学びなさい。あなたの生きるスピードではなく、あなたの人生の質こそが大切なのです」 ですから、愛を持った私自身の人生を生き、生徒たちに影響を与えるべく学んでいます。

皆さんにお礼を申し上げると共に、近い将来直接お会いできることを願っています。皆さまのご健康とご多幸をお祈りします。

2. ノウシ・チェドン（Ms. Ngoshi Choedon チベット / インド）

「ピンチをチャンスに」というテーマを語るのに、「チベットーアイ―ケアー」というイニシアティブ

についてお話したいと思います。ICに属する5人のチベットの若者たちで始めました。ICを通して私たちが受けた、学び、そして経験を私たちのチベットのコミュニティーに語ろうというものです。そうすれば全てのチベット人が心の声によって導かれるからです。チベットは独立を果たしていませんが、違いをもたらし、私たちのコミュニティー、更には世界にも多くのものを提供できるはずです。2018年に日本の学校訪問に参加したKPさんも中心メンバーの一人です。

昨年の2019年に「私たちが望む未来」というテーマで会議を開きました。チベットの青年たちで、「自分はチベットが将来必要とする人間足り得るだろうか？」と議論しました。

今年、他の団体から資金援助を頂きとても興奮しました。しかしながら、コロナ禍によって、多くの計画

は中止せざるを得ませんでした。世界の皆さん同様、どのようにプログラムを進めていけるか考えさせられ、困惑しました。

この数か月、ICのネットワークやそれ以外の多くの人々を観察し学びながら、私たちのプログラムをオンラインで行うことにしました。「インスタグラム」のようなソーシャルメディアを使い、より効果的につながろうと始めています。女性のための「ピースサークル」と、青年を対象にした会議を行おうと計画中です。

「ピンチをチャンスに」ということです。オンラインで行うことの1つのメリットは、世界の他の地域からファシリテーター―や参加者を得ることが出来る点です。オンラインでなく実際にやろうとすれば、叶わなかったり、物理的にも難しいかもしれません。なぜなら、皆とても忙しいからです。

この危機から私たちが学んだことの一つは、利用できるものを最大限に活かし、そこから始めるということです。私たちのコミュニティー、更にそれを越えたところにまで、私たちの働きを進めていけるよう願っています。私たちのことをこれからも気にかけて祈って頂ければと思います。こうしてお話しさせて頂けたことを有難く思います。

3. リアタン・ヌグリー（Mr. Riathng Ngullie、インド）

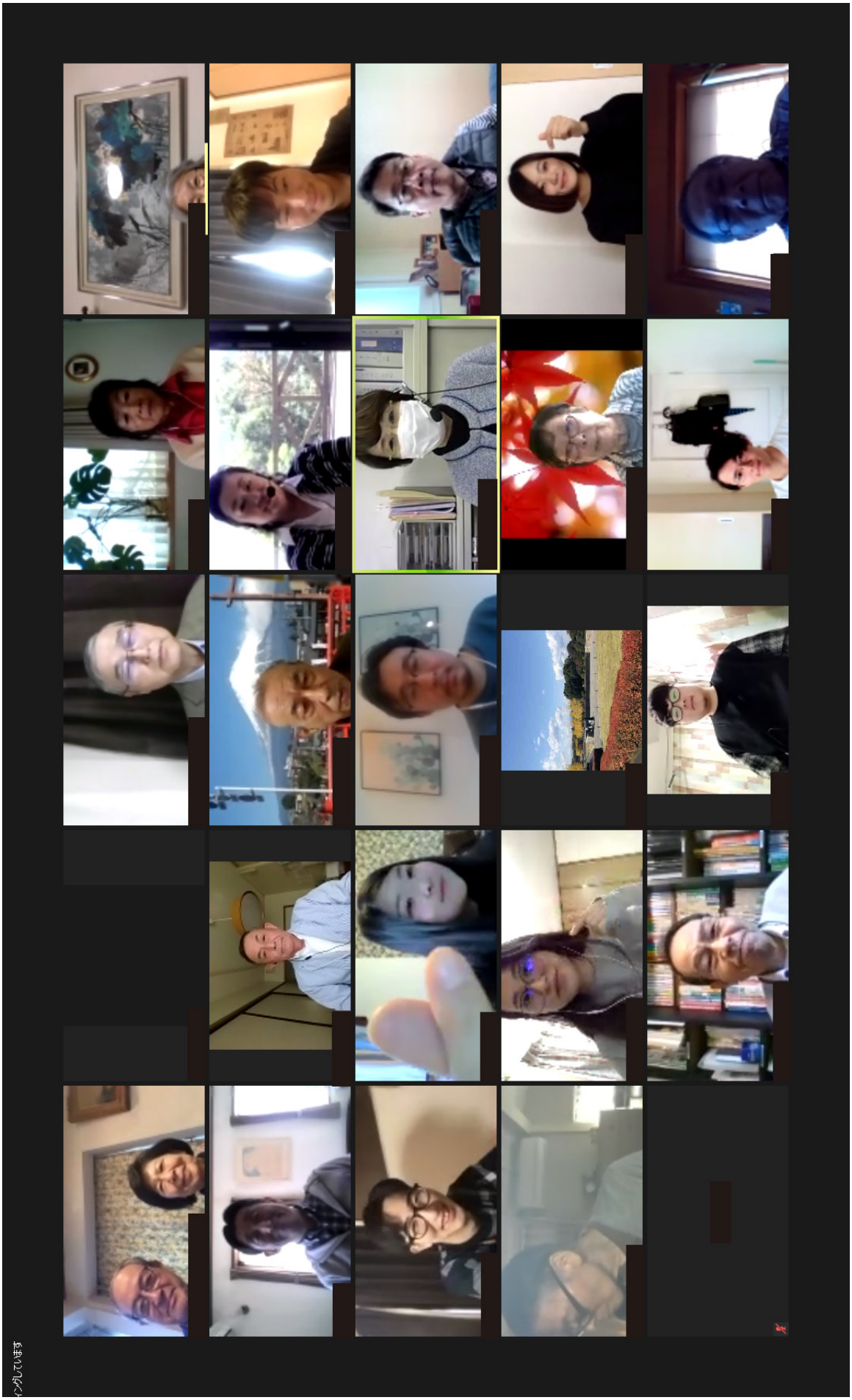
私は、2020年5月までICのボランティアとしてアジア・プラトーに滞在しました。海外で人権を学ぶために修士課程に進もうと申請を考えていましたが、コロナ禍のためにその計画は果たせませんでした。アジア・プラトーのアウトリーチのプログラムを終えた後、1つのチームの仲間たちと共に旅をしていた時、様々なチャレンジやチャンスについても常に誰かと話が出来ていたということに気づきました。プログラムを終えたある時、世の中には自分の抱える困難さや自分の人生の状況を分かつ機会さえ持てない多くの人々がいるのではとの考えが浮かびました。オンラインでのプラットホームを始めてはと考えました。友人の一人と共に、そのような人たちのために、どんな体験でも分かち合える空間をオンラインで提供しようと決めました。その目的は、ただひたすら話を聞こうということでした。私たちは、それをヒューマン・ライブラリー（人間図書館）・オンライン・セッションと呼ぶことにしました。人々は、心の健康についてや、肉体的・精神的な虐待等々についての話を分かち始めたのです。そのことをきっかけに、他の人々も自身の体験をお互いに分かち合いたいということになり、人生の旅を分かち合うという過程で互いにサポートを得られたのです。

後に、このヒューマン・ライブラリーという概念は、初めオランダで施行されたということが分かりました。「静かな時間」と「聴く」ということにひらめきを得たICのやり方です。セッションの骨組みはICで学んだ心の声を聴く経験からひらめいたものです。

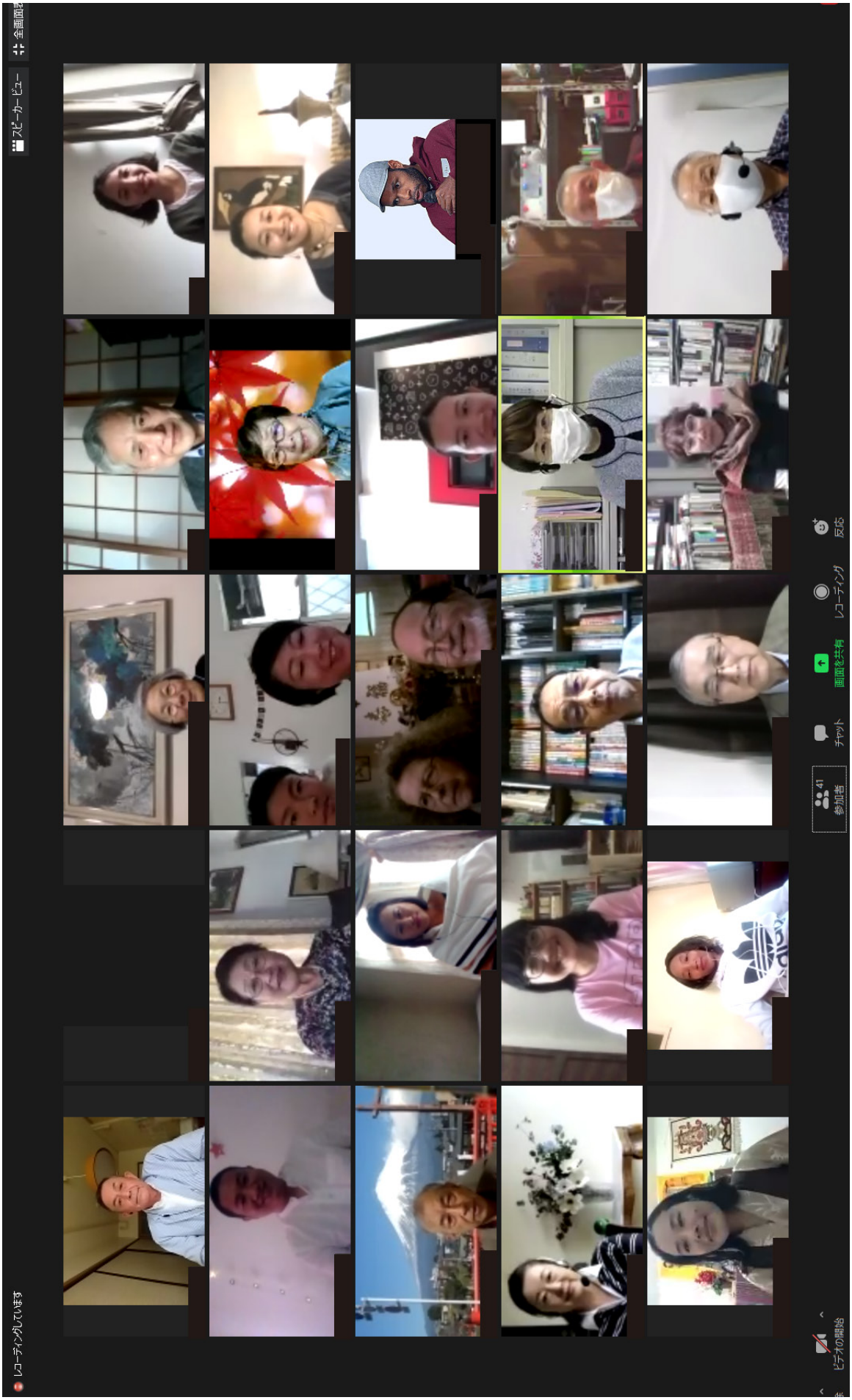
参加者に参加を謝し、以上でセッションを終えました。

以　上

10 月 25 日（第 2 日目 AM）



10 月 25 日（第 2 日目 PM）



〒 160-0004　新宿区四谷 4-28-20 パレ・エテルネル 206 号

公益社団法人 国際 IC 日本協会

電話 : 03-6273-1428　　Fax: 03-6273-1429

ホームページ：http://iofc.jp

The 42nd IofC International Forum

Theme： Transformative resilience in times of crisis

“Recognizing a crisis as an opportunity！“

Sub theme： What kind of future do we want to build?

Dates：October 24th ～ 25th, 2020

(by on line)

International IofC Japan Association

TABLE OF CONTENTS

Programme ····· Page 1

Opening session Mr. Hironori Yano the chairman of IofC Japan ····· ２－３

Quiet Time Mrs Jean Brown from Australia/UK ····· ４－５

Keynote Speach : Mr Suresh Vazirani the chairman of International IofC ····· ６－１１

The messages from Lebanon Mr. Ramez Salame ····· １２－１３

Dr. Wadiaa Khoury ····· １４－１９

The Session from the Friends of IofC India Dr.Ravindra Rao ····· ２０－２２

Ms. Leena Khatri ····· ２３－２４

Ms, Penuo Hiekha (Nagaland NE) ····· ２４－２５

Mr. Himanshu Bharat (Bhopal Madhya Pradesh) ····· ２５－２６

Mr. Damako Wangyl (Tibetan refugee living in India) ····· ２６－２８

Mr. Siddharth Singh ····· ２８－２９

Quiet Time Mr. James Cordiner from Australia ····· ３０－３１

The session by Northeast Asia Youth Forum Participants with Mr Seong Hocheol ···· ３２－３６

The session by the School Visiting Programme team with Mr Kiyoshi Nagano ····· ３７－４９

Opening address by Mr. Hironori Yano The chairman of IofC Japan

On behalf of our organizer, I would like to welcome you to the opening of the 42nd IofC International Forum 2020.

As we face an unprecedented circumstance, we decided to hold the Forum online since people's movements are severely restricted both in and out of the country because of the spread of COVID-19 in the world. This is our first online session with overseas participants and we ask for your kind cooperation. We hope we have prepared well especially as we have to deal with different Wifi environments in different regions.

Firstly, I would like to express my sincere appreciation to you for joining us from various parts of the world, especially the IofC International chairman Mr. Suresh Vazirani, who will provide the keynote address, and Mr. Ramez Salame and Ms. Wadiaa Khuory giving us insightful speeches. During our quiet time sharing, we will also hear stories and experiences from participants in the Indian Session, the Asian Youth Forum and the School Visits Program.

The theme of this Forum is "Transformational resilience in the time of crisis; recognizing a crisis as an opportunity". This is a wish for everybody and it is an ultimate goal in our homes, businesses, the education system and in our countries as a whole. People are trying to cope with the crisis and wishing for a recovery. Most of the crisis comes from human error, while some causes are natural phenomena such as natural disasters and epidemics. How to overcome this crisis is our task and that is why we chose the theme of the Forum this year.

A 3000 year old Oriental proverb tells us, " If you come to the end of the way and struggle, you will try to change the situation. If change happens, you can continue on your way. if you continue on the way, you can keep going on." This means that both good and bad times may not last forever; situations change. So don't be too proud of your success and don't lose your hope during bad times. There always appears a sign at the time of change and there is always a turning point between the crisis and opportunity; that turning point can be recognized only by those who can find a sign.

So the question is how to find a sign? If you concentrate your efforts on what you are doing at the actual scene of working site, you can polish your sensitivity to find the sign. There is no other way. This way of thinking and acting may give you a lot of hints in your life.

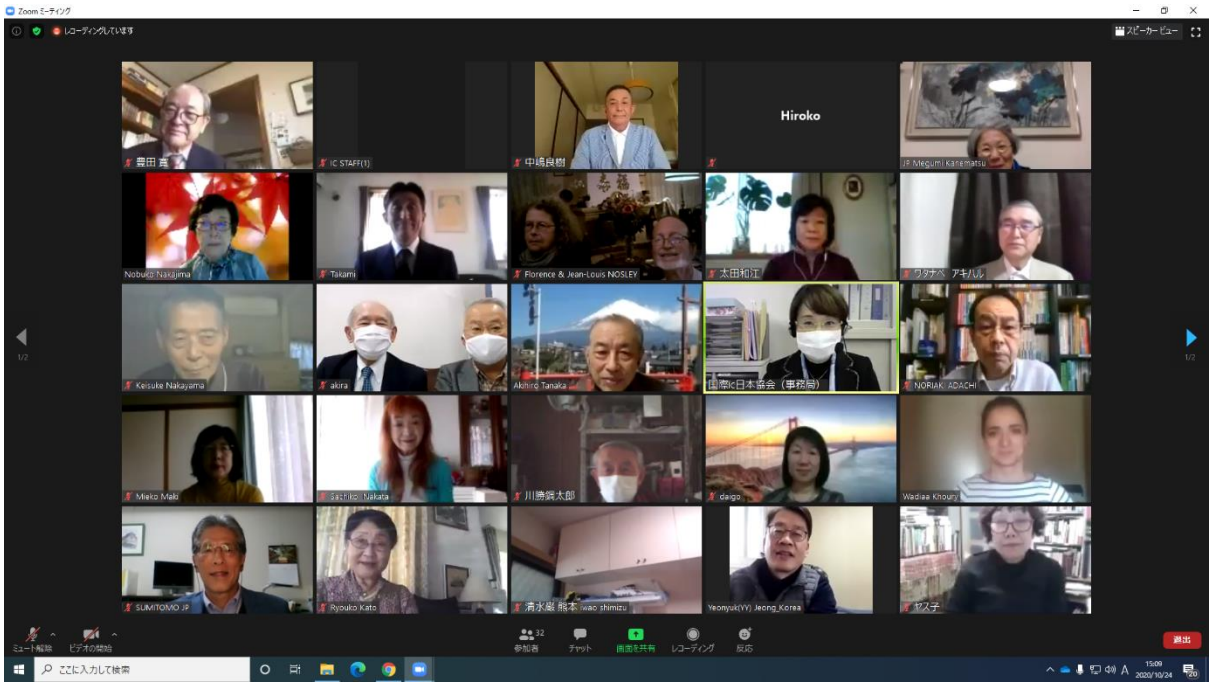
Tomorrow, we will have a session about the Asian Youth Forum and School Visits Program. In these sessions, some students and young people will share their stories. Some of them have participated in the IofC internship training program in India and they are promising young people in the next generation. We will listen to their experiences and aspirations and we should support them as much as we can.

By doing so, we can create a human network based on trust. This is a treasure of IofC. We will expand this network to the world in the future.

I believe that although one candle light is small, thousands of lights will light up the world.

I sincerely expect this forum to be fruitful and successful. Thank you very much.

10 月 24 日(第 1 日目)



Quiet Time Jean Brown

I am so happy to see you all, many old friends.

Thankyou for inviting me to give this input for the Quiet Time today. The Quiet Time has been my most valuable companion for more than 50 years. And has been a precious part of my marriage to Mike Brown for 45 years.

In these uncertain times when the world is in so much crisis it is our greatest tool for resilience.

The Quiet Time, that silent space for deep reflection, is a time of Connection, Correction and Direction.

* * *

A Time of connection with that deepest truth. That source of our being. The transcendent Love that also lives in the heart of each one of us. Religious and cultural traditions have different names for it. As we sit in silence and connect with that deep place beneath the ego, so we open ourselves and let go of our own plans and self seeking comforts. We recognize a wisdom greater than our own. We recognize that we are not the centre of everything. Letting go and letting come are two great truths of the non-attached life.

So the quiet time starts with letting go. Letting go of some time when I am thinking I could be doing some other important work. Letting go of pride or a hurt or jealousy that is consuming my mind and heart. Laying our preoccupations down to create space. Some people stop there, with connection and the peace it can bring.

* * *
*

But then there is Correction. This is a less comfortable part of the Quiet Time. I find that even now, after all these years, I can still be wrong! Sorry is still hard to say! But more often for me correction is about where I have judged someone, not loved enough. Sometimes a prejudice has blocked my care, or I have been too slow to forgive. This can be a precious time of freedom, when I let go of my pride and defences. Some people stop here and enjoy feeling bad. It can feel safe to remain the victim of one's own badness! I have fallen into that trap sometimes! We prefer not to find the freedom and responsibility that transformation brings.

• * *

Then there is Direction, letting come.

While IofC everywhere runs projects and programmes the heart of the work is the call to each of us individually, of whatever age and stage, to live by the leading of the inner voice and to be true to carrying the message of change wherever and to whomever I am led. Each one of us has a part, are we listening and are we hearing? There is such a temptation as we get older to get stuck, to get too comfortable as we are. I feel

strongly, more than ever, that while IofC is much smaller and our capacity is much less, we have a unique task to create community, community right where we are, each of us. Community can be just two or three. IofC is a global community with a shared story, shared purpose and shared practice. Everyone longs to belong somewhere. Loneliness is one of the biggest threats, and is often at the heart of extremism. Japan has a wonderful reverence for community. You can model what we all need, a place and a space of equals, intergenerational, everyone acceptable, inclusive. With a shared purpose of building a new world of 'Interbeing,' as Vietnamese Buddhist monk Thich Nhat Hanh calls it.

* * *

There are many things in my British culture such as lack of respect, individualism and arrogance that have to change. In my Australian culture too that has not respected or listened to our Aboriginal people. We can create new cultures, new communities for a new world. And I believe cultures that nuture inner listening communities will be at the heart of the new world we long for.

* * *

Questions:

- It is not easy to ask the right question. I am interested to know what does it really means in practically. Would you please explain more on that?
- I am facing the difficulty, not knowing how to talk with my sister who is suffering with her cancer.

Respond from Jean:
My daughter is also a surviver of breast cancer. I, too was diagnosed with illness two years ago. We do think more closely on life and death when we face the illness.
It is not something what we offer an answer, but what is more important is, to think for what they themselves meant to be asking themselves.
Of cause, we tend to respond immediately but when we would like to understand what they are suffering with, where they are standing right now in their life, then we might receive some questions to ask which is from much broader and deeper perspectives.
Often, the questions are from the perspectives what the other person is meant to be asking themselves.

Keynote speech by Mr. Suresh Vazirani

Ohayou gozaimasu to all my friends from Japan.
It is wonderful to see faces I know after a long time meeting all of you.

I had come to Japan to join the annual conference, I think it was 1985, long time. I had a pleasure of traveling through Japan with many friends meeting with many wonderful people, wonderful business people, teachers and housewives. It was a real pleasure.

Japan has had a tremendous spot in making me what I am today.
In my younger days, I had a pleasure of spending many days in Japan.
I also had a pleasure of learning about Japanese history, Japanese culture, Japanese religious practices, and basically Japanese way of life.
All the time I spent in Japan had helped me to become a better person, and a better business person.

As you know that I founded a business in medical, called Transasia Bio-Medicals, 41 years ago. This was soon after I came back from Japan, where I had a lot of training of IofC which helped me really looked at myself as a person and also decide what will be the purpose of my life.
When I came back to India, how I can be useful for my society, for my country and for the world. What I should be doing, where I can play my role, or I can help humanity.

As I came from a poor family, I did not have any money. And I worked 9 years full time of IofC without any salary. So no money but I had a lot of conviction that God will use me for something wonderful.
In IofC, I heard many people say where God guides, He provides. So I wanted, really to test it if it works. If I really in guided, will God provides me with the resources

Well the rest is history.
Today my company Transasia is the largest diagnostic company in India.
We have 1,600 people working in the company.

That was not the dream. My dream was not that I should become so big and should have so many people working in my company. My dream was to serve my country. How to through medical diagnostics I can help India prevent disease and make a healthy and happy nation.

As I said it was a wonderful adventure and also an experiment to really see if what we learn in IofC, does it really working in real life.
I must say that it has been a inspiring wonderful 41 years where at every stage absolutely true that where God guides, He provides.
We also hear many times in IofC about the people before profit. That is another thing that I also witnessed it. Of course, it is not over. I am still working on progress.

Every day is a new adventure, every day is a new learning, and every day is a new excitement. That is a great thing about IofC that makes life is so interesting and unpredictable. One step at a time, but all added up to 41 years of great exciting life

When Covid attacked India in March this year, our prime minster declared a complete lock down. All the businesses must close down and everybody must sit at home. This was on 25th of March this year. 26th of March happened to be my birthday. Next day in my quiet time. I said, God, what next? Am I meant a next few months sitting at home? What do you like me to do? My inner voice told me. No, this is not a time of rest for you. This is a most exciting part of your life now starts today.

My thought was that the 41years after my company was that prepared me for this moment of Covid. My thought was this was a time that the world needs Transasia and what it can do for helping with Covid. God has prepared us for 41years for this moment which is an opportunity to serve the humanity.

I called up my colleagues of my company and senior managers and told them this is the thought I had. God has prepared us for 41years for this moment which is an opportunity to serve the humanity.
So, our research team started working immediately to try to develop a good test for Covid, how to test Covid disease. Our research team started working on developing test for Covid.

Because at that time, in India nobody was making it. Nobody knew how to make a Covid test. Because it was imported from America and there was a great demand because every countries wanted Covid test. In India almost nobody could afford it. It was so expensive.

Less than one month our research team produce a test, and our factory started making it. And the government of India helped us greatly to in giving us a permission and other approvals.
When all the other companies were closed down, people were sitting at home. But people in TransAsia were working almost 24 hours.
As I said, the government helped us and gave all our employees the special police pass so they can travel everywhere. After manufacturing our technical people take a test to all the hospitals and show them how to use it By now more than about 40 million tests have been used in India. And price is very affordable for Indians, with very low price.

Then we realized our factory was too small to make so many tests. We had a big demand, not only from India but from many other countries, Africa, Asia to make more tests. We found our factory was too small to make so much quantity

Government asked me why can't you make more. I said, sorry our factory is too small. Then they said "Don't worry, we will give you a factory. Next day, the government took me to the big factory. And said, "OK. you take it and use it."
When all other companies are locked down, our R&D developed a test kits, made it, and also in this time we made a new factory to make more test.

Then one big problem occurred. Because all the businesses were closed, the village people, who were working in companies, many of them had no salary because when businesses were shut down and companies can not pay salaries. So we had 100 million people without jobs, many in the cities because industries are located in the cities
100 million people migrate back to the villages. You might have seen pictures of millions of people walking home because no transport, no trains. Millions of people were walking back home. Some people walked more than 1,000 kilometers along with their children.

When millions of people went to the villages, many of them took with them Covid. Unfortunately, the villages there were no hospitals and no laboratories to do the test for Covid.
Again, the government came to us. How do we do the test in the villages. Because we have no laboratories and hospitals in the villages. Can you do something

In 15 days, we made a laboratory on wheels, on bus. We made full-fledged laboratory that can do Covid test. These laboratory on wheels went around the villages testing people.

As I said last 6 months has been most exciting of my life. At the time when I was planning to retire, in March I turned 70. I thought I should retire from busines and give some time to IofC and other societies.
Corona made me forget all that and work harder than I ever worked before. And amazingly God gave me the energy, enthusiasm to be able to do what I could do.
All this I could do because of my training in IofC and because of my training in Japan. All wonderful Japanese practices which I learned in Japan which now became Global business practices.

I find these business practices from Japan is so useful and so effective. Basically, these 8 practices.
Kaizen, Muri, Mura, Muda, Nakayoku, Kata, Gemba, Genbutsu.
8 practices which I was fortunate to learn. I found them very useful not only for business but also useful for personal life, basically everything that we do including IofC.

So as you know I became the president of IofC International about two years ago, my conviction was how I can help IofC get back some of energy and enthusiasm it had.

Because I feel that in my own life, I have learned so much from IofC.
It had totally changed my life and made me a better person and better citizen of the world.

We should not stop IofC from inspiring many many thousands of young people like me to become a better person and to serve the humanity in every country.
But as you know, unfortunately last few years IofC is not able to reach many people, not many young people.
I believe this way we are preventing thousands of people from getting the answer to their lives being able to change to help the world.

I felt that at this time I had been made a president to change this and to see that message of IofC is able to reach many more people especially young people. I feel that if I really want to be unselfish, and I should make sure the message of IofC is shared with many people. Not only I benefit from it.

Of course, the war time, everything has to change, life has to renew, everything has to take a different shape. The only thing permanent is CHANGE. So, while we have to change ourselves every day, we also need to change the way we think about IofC, talk about IofC., message of IofC needs to change. So that younger people can understand in their language.

Next year will be 100th years of the spirit of IofC, not necessary the name, but 100years back Frank Buchman went to Oxford and started the real work of life changing.
When I became a president, in my quiet time, thought I had is what am I going to do to make sure that IofC remains relevant for next 100 years. The thoughts came in my mind that, yes, we must make sure that IofC continues for next 100years, but for that, we have to change many things.
And obviously it can not happen if it does not reach the young people.
We are not going to live forever obviously. We need young people to take it forward.

Hence, we need to look at the way we do everything. Apply the Japanese improvement tools, like kaizen, genba all those things.
I felt this is something that not only I can do something, but I need involve a whole team, whole network in thinking what we need do to make IofC relevant for next 100 years
Last month, we had the General Assembly of IofC International where I shared my thought. I proposed that we form a group of people from different countries to think of reinventing IofC, what we need to do, to make it relevant for next 100 years.
We are forming working group of younger people to think through how we need to change the way we do things of IofC.

Basically at 4 different area of IofC. One is to relook of whole massage of IofC. The whole values have to be the same but language and message can be changed. Does it need to be revised? Does it need to be a new language?

The whole values of IofC, value and principles and also belief in QT and inner voice, those are permanent. But how to convey in language, in a form is it acceptable and understandable by younger people ?

Second point is network.
How do we play the message of IofC. Traditionally in IofC, it happened person to person, but maybe there are other ways to do it also.

Third area that will be looked at is the structures of IofC, organization structure, how IofC is organized in every country. Do we need to change the structure? Do we need to make structures more participative, so that people have a sense of ownership.

Fourth area we need to relook is how to make IofC sustainable, self-sustaining, so that it is able to generate not only money, but also human resources required to take a message to the world. There will be 4 working groups looking at each of these four points that I mentioned to you.

Of course, this working group will not be complete if there is no one from Japan in those groups. I would urge you to please look for a couple of people who can join this working group to give all the benefit of Japanese way of thinking. Japan has a great tradition of having organization which last for several hundred years. Some of the Japanese companies have been in business for more than five hundred years. This does not happen anywhere else in the world.

Japan knows how to keep thing going and make it sustainable and continue for long longtime, over many generations, hundreds of years.
We need to learn from those Japanese practices to see how to make IofC continue for many hundreds of years. I request your help to help us reinvent IofC make it relevant for next hundred years, and work together with you and to make it happen.

Thank you very much.

Thanking remarks by Chairman Yano:

Suresh, thank you very much for giving us such powerful keynote speech to us. It was a very inspiring talk and I felt deeply that IC Japan will move forward with a same spirit. I am also eager to convey your message to as many IC friends as possible who could not participate in this online Forum today.
It was also honor for us that you praised about Japan and its value, but unfortunately these values have been gradually lost these days. So, it is important for us to convey your message that our traditionally good things should be continuously handed over not only to business communities but also to a younger generation as a whole.

Thank you very much and hope to see you again

Mr. Ramez Salame

From small Lebanon at the extreme West of Asia, to great and admirable nation of Japan at the extreme East, I extend my heartly and fraternal greetings.

It is truly an honour to be asked to deliver a message to you, knowing that it is we, Lebanese and people of the M-E, who are in great need to hear and learn from you.

I was born in a well to do family, but when I was 21 years old, finishing my law students at the university in Beirut, I can look back now and describe myself as an ambitious, hardworking, and ego-centered young man. That ego started leading me into trouble. It is then that I met the movement of MRA now called IofC. It did not take me long to reach the conviction that there were things in my life that needed to be put right if ever I wanted to have a constructive role in changing my country. I took 4 decisions, and – which much internal struggle – implemented them:

1 st : to confess to my father my hatred towards him and say sorry.

2nd : to reconcile with my younger brother and say sorry for being jealous of him.

3rd : to return a book I had stolen from the university library,

4th : to confess to some close friends that I had gravely betrayed them and lie on them, an

apologize for that.

My pride was gravely wounded, but suddenly I became a free person. A deep peace entered into my soul, and I felt reconciled with life and with others. I surely did not become an angel. But ever since that time there was a new Presence in my life, a divine Presence I could refer to.

Some years later, the war broke out in Lebanon which mainly opposed the Christians and the Muslims. I felt I should join the Christian militias, which I did. But one day, during the morning "quiet time" – a time I had started to set aside every day to consult that divine interior Presence – I had the thought to give up my military gun, and start a new kind of fight aimed at dialogue and reconciliation in my country. I did obey that thought and in the following years a few friends and myself were able to organize a long series of dialogue meetings in to which gradually politicians, religious figures, and important personalities took part. Those meetings helped strengthening the spirit of mutual understanding and unity among the Lebanese and contributed to reconciliation and peace in our country.

Lebanon was a prosperous country. But a year back we had a very severe financial collapse which led to an almost bankruptcy of the whole of our banking sustem. And donsequently to a sudden and hard impoverishment of our population. More over, our counry is more and more entangled in the long unsolved Israeli-Arab conflict. What one can do in such a situation?

The great danger is to be lead by fear. I have decided to stop watching the TV news, and to read the newspaper very briefly and only three times a week. But the other important decision is to stick to the morning "quiet time", in order to let this divine Presence inside every human being show me the priorities I should heed every day. Observing this discipline gives me peace and a sense of clarity and orientation.

However what matters most remains seeking the path of love and waling in it daily. I realize more and more that there cannot be love without death of one's ego and one's selfishness, and whenever this death occurs life springs up. Yes, this is only what can break the chain of evil in our world. And by doing this everyday – in the family, in my work and in my interaction with my fellow citizens- I feel that I am preventing evil from overcoming my country.

Could big Japan and small Lebanon learn to walk hand in hand, and show Asia and the world that there is a different way of doing and of being, a way that will secure happiness and peace to all ?

Ms. Wadiaa Khoury Hello Dear Friends in Japan

OHAYOGOZAIMASU!
Thank you for hosting us in your annual gathering. A special "thank you" to our common friend Megumi who suggested to be with you at least virtually in order to share part of our experience and life, especially after the August 4 explosion in Beirut.

My name is Wadiaa Khoury, I am now 40 years old. About 20 years ago I visited your country Japan and I was deeply impressed by your country and also by what Initiatives of Change Japan is doing, alongside the other parts of Initiatives of Change in East Asia.
I was witness of the reconciliation and of the mutual apology with people of East Asia especially people from South Korea, and what I learnt in your country and all over the leadership training program was imbedded in my life, and I'm still trying to grow these values especially the absolute honesty, the absolute unselfishness, the absolute purity and the absolute love. All in the spirit of integrity and transparency.

When I came back to Lebanon, I decided to study law. That was after having my first degree in education. The decision was that I don't go to the section where most people were like me, Christians. I decided to go to the other section of the Lebanese university where most people were Moslems, and for the first time I accepted to sit and listen and get to know people as they are, not as I was told they are. I went deeply into these friendships and started knowing what trust building is about. It is built on openness, on sharing deep wounds, deep experiences and repositioning ourselves toward each other.

Later on I started a new job in international college that is placed inside the campus of the American University of Beirut. Most people there speak English and they had rather American culture even if they are Lebanese. At the same time, I continued my studies at the Lebanese university which was mainly impressed or dominated let's say by political parties that are affiliated with Iran. It felt as if every day I was traveling between the USA and Iran and understanding the depth of the conflict of misunderstanding and the mutual judgments between two parts of the world. Being with a background of Initiatives of Change International and with this experience of Action for Life and of being in Japan, I was an added value: trying to transmit to each party what the other party has suffered as has experienced. It was another training for me throughout four years of bachelor in law, and until today this is what I am carrying, it is trust building, putting yourself in the place of the other person, and before judging, having empathy.

Today, there is a vital and great need for the spread of these values and of the skill of the trust building on large scale in Lebanon. Until recently I was trying to convey the values that I believe in and the trust building in the faculties of education where I teach (in three universities). I tried to cooperate with several colleagues but this is not enough any more.

What happened during the last year in Lebanon starting with the revolution and ending with the August 4 explosion (the August 4 explosion which is one tenth the power of the explosion of Hiroshima!), alongside the results of accumulated

corruption, the great devaluation of our currency, devaluing our savings and salaries and the spread of COVID now uncontrollable in Lebanon… These series of disasters have caused a big amount of depression and contributed to the growth of mistrust. What happened is of course the accumulation of the corruption and of the negligence, but also there is a huge probability that it includes a security side that these explosives belong to a radical group in Lebanon and they were targeted by an airstrike.

The current atmosphere is that every community in the country is considering itself the main victim. Of course the devaluation is affecting everybody but some people more than others, and this is also a reason of mistrust and also what happened in August 4 have affected mainly the northern and eastern sides of Beirut which are mostly Christian. This is the reason of high level of doubt and mistrust especially if the investigations or the continuous spread of stories continue confirming that there is security side of explosion. How to deal with all that?

I would like to share with you the story of two people that would summarize the reality of what we are trying to do today in Lebanon, despite all the depression. The story is about two men who are in hospital because they are very sick as we are all sick now in Lebanon in a way or another. The first person is able to stand from time to time and look out from the window, while the second one is very weak, he is unable to stand up. So the first person in order to help the other one starts describing the scenery outside. "Today, the sun is very bright !" Another day, he says "It is blooming! The blossoms are filling the trees! They are like Sakura of Japan!" and another day he says, "They are turning to green! They look magnificent!" and another day, he says "Its very fruity, everybody is coming to cut from these trees! You should see the children playing around and enjoying themselves !"
Day by day, the person who is unable to leave beds starts feeling very curious and eager to leave the bed, he starts to get better. But the other person who had been describing the "scenery" has a different condition, and he starts to have some crisis until one day he passes away. The person in the second bed is finally able to sit. Of course he is saddened by the death of his narrator, but he is eager to see the scenery outside. To his surprise, he only sees the wall of another building in front of the hospital!! He is disappointed but fast he realizes what his late friend was trying to do…He was trying to give him hope out of the void! And yes, when he leaves the hospital, he sees what was behind the wall: the magnificent scenery of a shiny beautiful day.

This is exactly what we are trying to do. To be very honest, with what's now happening and with the accumulation of disasters, we don't see anything. We only see a wall in front of us. But hope is telling us that there is something very beautiful outside behind this wall.
We have hit the ground and we should be ready to bump up. But with what attitude? With what level of trust? With what level of common understanding?

To be practical, what we did after the explosion is that we formed a coalition of activists at my hometown "Zahle". Zahle is 50 kilometers away from Beirut. We adopted one of the devastated streets of Beirut and invited all other municipalities and all other NGOs or groups or activists to group together and do the same: adopt

each a street, because what happened had devastated very large areas of Beirut. Some street are too large and actually require to be adopted by a country. But some are small enough and can be adopted by people like us. So the street we adopted is made of five big buildings including 75 apartments. Budget is very high but we are doing the fund raise with the Lebanese and Diaspora of Zahle present in North America, Brazil, France, etc. This is helping and we are about to reach the target. In our work of reconstruction, we are dealing with level 3 damages. So we are not involved in fixing structural damages, but rather in replacing destroyed windows and doors, and in fixing inner damages in kitchens and in appliances because the explosion's wave have destroyed all the electrical appliances. We are also waterproofing the old buildings and will be painting them right after winter season, after having already painted the inside.

So this is what we are taking care of, and with that we are trying to give some hope for the people by supporting them socially and psychologically. So we are trying to help the children to go back to school, we are trying to see what kind of appliances they need, laptop, tablets etc. for online learning, and at the same time, from time to time we go and organize something artistic for them. I will show, you now, a part of it, or center of it to see how we are cheering them up especially in the evening when we finish the work of reconstruction of every day (SONG: short video of a band from Zahle performing Flash mobs between homes of the devastated area)

I told you at the beginning of this video and of this testimony, it is not enough anymore to build trust and convey values on the small scale within universities or in a small area. It is now vital to spread the trust building all over the country. So what we are we trying to do, with the colleagues in Initiatives of Change, we are trying to relaunch the trust circles. Before the COVID, in December and in January, we had our first experience of trust circles with professionals from different backgrounds, and that was a success story. We invited people from very different backgrounds, different regions, and different religions to come together and share their stories and after a period of preparations, we invited them to respond to particular questions like: "what made them the people they are today? What are their backgrounds? What are their main fears, their main aspirations? What aspects of their culture they would like other people to know and they are astonished that people in Lebanon don't know about them?". This initiative have helped us to draw people close to each other, destroy some prejudices, and we had ambition to start building documentaries from the parts of the testimonies that people are OK to share in the media.

But with the spread of the COVID, we had to stop the face-to-face meetings, and recently, we relaunched these trust circles virtually, and again we are gathering people from very different backgrounds who are coming and sharing their stories and their own cultures, because Lebanon is a plural country with 18 confessions who have very different collective memories. We hope that with the limitation and with the recession of COVID itself, that we will be able to meet again face to face and in order to prepare for this period, I am thinking of preparing Center. I do have a place which is placed in a very strategic area of Beirut, it is at the eastern entrance of Beirut, at the intersection of East and West Beirut, and halfway between North and

South Lebanon, between the Bekaa plain area and Beirut the Capital City.

It would be a shame not to invest in such a place where I am only using one room, a kitchen and a bathroom. So the need is now to restore this place which was neglected for many years because of lack of funds. I am counting on faith to be able to restore this place and make of it a place of gathering and a youth hub, a thinktank for professionals especially for teachers, also a place of gathering for people who are representing different NGOs in rebuilding Lebanon, to learn together how to also rebuild the spirit and the citizenship of Lebanon. This is the ambition and I am totally counting on faith, on international friends and on Providence to make the vision come true.

ARIGATOGOZAIMASU again for hosting us in your conference, I started the video with the saying "Hello dear friends in Japan" even though I don't know most of you, but as a friend from Malaysia once told me and he put it in a very nice song,
"There are no strangers in the world, there are only friends that we haven't met".
Hopefully we will meet soon, thank you.

Questions to Ms. Wadiaa Khuory

(Question):
You talked about 18 different religious sections. There are two main streams, Christian and Muslins as I understand. Are 18 groups variations of those two main religious streams?
(Answer):
Yes, they are the variations of Muslims who are the Druse, the Sunnis, otherwise, Ismailis, and we have the variations of Christians who are the Catholics and Orthodox and also some divisions of Catholics and Orthodox, because we have Armenians, Assyrians who are from Egypt. So they are originated from all the countries of the region.

(Question)
To overcome the problems come from diversity, what is the common bonding unit or factor to bring them together? A kind of identities combining them together. It is a plus factor isn't it?
(Answer):
This is not an easy question. Lebanon is actually going through crisis of identity. Our formal identity is not a final one. Since the forming of Lebanon in 1920, people were not all OK about this border, about being together. Until the Civil war, some wanted to be with Arab countries and others due themselves as Westerns mainly the

Christians. This was the source of the division. What evolved after the war, is the will to live together and this will to live together is translated in many actions, for instance, now we have the 25th of March is "common day of prayer" for Cristians and Muslims, it is Annunciation Day which is common to Cristian and Muslims. It is annunciation to Mary about the birth of Jesus. So this is one occasion we celebrate together. If I may explain a little bit more, we know that we are the country where the borders were withdrawn and then we were asked to live together. Unlike other countries where people evolved and then they created their own borders because they expanded. So, Lebanon is a project built on the will of living together and we have this national backed after the civil war. No more looking at unity with Arab countries, no more looking at unity with Western countries and reconciliation with our own Lebanese identity.

(Questioner)
Thank you for expressing your view. This is a kind of a concept which requires tolerance with a wider space in our heart. Under the COVID, we all are human being, human family living together. We have to find a way and idea to live together.
(Answer)
Actually we promote a concept called "citizenship embracing diversity". It is a kind of citizenship where all citizens are required to know more about others and to open up to others to know about them. So we are proud that there are no Mus1ims on earth who know about Christians more than Lebanese Muslims, and no Christians around the world who know more about Islam and Muslims than Christian of Lebanon. This is something we are proud about.

(Question)
Lebanon is a small country in its area where you formed diversity in its people and society with 18 religious sects. I understand that this may be one of the main reasons for domestic instability or social problems in your country. Is my understanding correct?
(Answer)
Yes, it is one of the reasons but not justification.

(Question)
This is my next question. Europe too have gradually become diversified countries. For example, many Islamic people enter into France where there was an incident

recently or into Germany or Scandinavian countries and it seems that their stabilities have been gradually lost. From your view point and from Lebanese experiences, do you think that their so called "Globalization" be successful or do you think it will be a big problem in coping with in the future?

(Answer)

Thank you so much for the question. As a matter of fact, whatever happens around the world has an example in Lebanon. Because we have the exact texture of diversity in the world and I remember one time Michael Muller who is in charge of the UN in Geneva said if Lebanon succeed, the world diversity succeed, if Lebanon fails, it's a very bad news for the world diversity. So we think it as a very big responsibility to succeed. We have many initiatives, one of them is Adyan Foundations. Adyan means religion in plural. What we did was developing the concept of diversity embracing citizenship is that we are asked by government like Netherland to go and give our testimony on how we are trying to manage this diversity, and at the same time, have a safe space for everyone to express not to have negative laicity, a secularism that is negative that oppresses people from expressing, but at the same time, well expressed without hurting anyone or without trespassing the liberty of anyone. Government of Netherland was the first to ask for this testimony from Adyan Foundation of Lebanon because they are facing this new encounter with Islam and with people who are different.

Also in Morocco where people are facing this radical Islamism, we will also ask to go and share about citizenship embracing diversity to know how Imans can be prepared as religious people to speak in a way that is not exclusive. It is a procedure we teach and it is drawn not from only our experience. We are inspired for example by Switzerland, a country of great diversity where people would fail every day if they do not go and dialogue in communities, in the communes like small towns of Switzerland, every week they have dialogue, otherwise people start to develop ideas what the other is preparing for me, is he trying to cancel me. So we are meant to mix all the time. Otherwise, we develop fears. This is our whole philosophy.

(Questioner)

Thank you very much Ms. Wadiaa Khuory. I sincerely hope that your country will be a kind of model for the world.

Mr. Ravindra Rao

Thank you for the honor and opportunity for us to be part of this important Forum.

My wife and I have very pleasant memories of our time in Japan and the Forum last year. Our deep gratitude for the kindness and generosity of so many of you. The list is too long!

The theme of your forum**, "Transformative resilience in times of crisis…"** is on everyone's mind these days, thanks to corona!

If we want a secure and resilient future, we are the once to build it.

Key to resilience is to resolve our contradictions!

I want to draw your attention to some of the ironies and contradictions of our times.

- Obviously, CORONA tops the list. The human race has gained enormous power through intelligence and technology. Yet a tiny, invisible creature has made us powerless. Nearly a year and we still have no clue on how to deal with it!
- We can produce anything we desire. Today many more people live a life of comfort and luxury; yet we allow one billion people to live in misery earning less than $ 1.5 a day.
- Tanaka San was saying the other day that globalization, which was hailed as a great development has turned out to be a handicap in many ways.
    - We have become dependent on far away locations even for some of our essential goods; so, we cannot afford disruption of transportation.
    - It has made some people and corporates so powerful that they can control national policies to their own advantage.
    - The IT revolution has brought the world ***closer*** but not ***together*** in unity and harmony.
- The list of contradictions is endless. I want to mention a serious one. Many of our countries thought democracy would keep our hard-earned freedom secure. Alas! Because of our internal divisions of communities, regions, religions and so on, that very democracy is threatening our freedom as we elect despots to power. Recently a popular magazine listed 'elected' heads of eight countries who have turned dictatorial ignoring the needs and safety of the minorities in countries like the United States at one end and India at the other. Very often media, the constitutional bodies -even the courts, instead of upholding freedom and the interests of people are acting to please the rulers.
- Now a word about Nature. The 94-year-old TV presenter David Attenborough has reported on nature and environment all his life. He warns us that our unsustainable life-style has reached a level that the elimination of our human race is inescapable. We are hugely exploiting Nature to satisfy our material cravings. With an ever-increasing population our needs and greed are also

increasing. Many scientists and environmentalists are predicting doomsday. However, Attenborough holds out hope. He says even if we restore a third of the nature, switch to natural sources of energy like solar and hydel power and change our life-style we can still save our species. Stabilizing the population of the world is the key. He cites Japan as a great example. You have shown that when all the needs of people were met and life became comfortable the population became stable. Hence, improving the lot of the others who are deprived is in our own interest; it is the only way to save ourselves. Now Japan inspire us all the share the wealth of the world to stop the population growth. Then if we restore Nature, its abundance will be enough to sustain a stabilized world population.

- It is legitimate for countries like mine to aspire to be prosperous like Japan. Sadly, our race for GDP and economic growth has been at the cost of Nature and does not ensure growth for ALL; many are being left behind.
- Imitating the progress of the richer countries has made a *few* people vulgarly rich, *many* people quite prosperous but *significant sections* are left behind and environment is badly damaged. Time has come for ***globalization*** of love and care and ***localization*** of development with local traditions, cultures and practices researched and developed to meet local needs.
- Speaking of my country, many wise people are feeling that developing Gandhian economics to suit our times is the answer. In essence, Gandhi was for self-sustaining villages. Small clusters of villages with minimum dependence on distant locations seem to be the way forward. Several are working on that model. Admittedly it is yet to pick up. But the realisation is coming. Of course, we can expect serious opposition from vested interests.
- We need a global people's movement –a movement of the spirit and heart, which will deal with the root of the problem which is 'HUMAN NATURE' with its greed, selfishness and hate. It can spring from the love in our hearts, which connects us to all <u>and</u> to Nature. It can give us the humility to take time to listen –listen to understand; not to 'give' aid with an eye on business, but to deal with the very forces of human nature which block progress, which blind us to the real needs, breed corruption, divide people and deprive them of collective wisdom and cooperative efforts.
- In short, resilience comes when we strengthen our muscles of love and care, which can keep us connected through good times; help withstand bad times and support us through the times we feel feeble, helpless and weak. We are connected through compassion –not for gain of any kind. Yes, this IS idealistic, because nothing less will save our species; It will bring true joy and happiness to ALL and will restore the beauty of Nature. Attenborough says, "We do not intelligence; we need wisdom". That is true **resilience**, which can build a future we need for everyone everywhere!

Thank you!

(Qestion to Mr.Ravi Rao)

You said something that “IT technology had led the world closer but・・・.”

I could not catch up properly after that. Will you tell us about it in more detail ?

(Answer)

As Mr. Tanaka has first pointed out to me, that the globalization is a great idea. Of course it is, but at the same time it made us so inter-dependent. That is not by itself bad but we loose our local ability to survive on our own. Most of the time, it is not just for our need that we depend on the rest of the world. It has become a habit, at lot of time, we go into things which we really don’t need. That kind of things we also get dependent on. If we are all guided by ourselves, globalization can be fantastic just for helping each other. But let us be honest and look at it. Why America, for instance, is so interested in India? Oh, because it’s a big market.

That ‘s what consider mind. Of couse some NGO say we must help foreign countries. But basically we are looking for what can I get from such countries. That has to go.

There is lot more I can say but I think I will stop now.

Session hosted by IofC India team

Ms. Leena Khatri

My name is Leena Khatri. I am living in Asia Plateau at Panchgani together with my husband. We bring you many greetings from all at Asia Plateau. Asia Plateau is, you know, our center but also your center. It is a center for the world and we are so grateful that many from Japan have been here and have also co-hosted the international business programs (ICB) here. Most recently we were deeply touched by the generous contributions of so many of you for the "Preservation Fund of Asia Plateau". Thanks to your generous contributions and the gifts of other people from around India and the world, we were able to keep our staff on their jobs in the center. I am also deeply touched that our Japanese friends have invited us Indians to be part of your Annual Forum. Thank you very much.

The theme that you have selected for this Forum – Transformative Resilience in times of crisis - is in fact a quality that you, the Japanese have demonstrated several times through your history. You have shown the world how to come out of calamities and crises on the strength of tremendous human dedication on the individual and collective level. We have so much to learn from these examples.

In the present COVID-19 Pandemic the whole world is suffering one way or another. And we are meeting today against this shared background. In India we have seen the worst of human behavior but also some hope giving examples of human care and compassion in action. We certainly need resilience to stick to our highest values in a fast changing world.

I am grateful that being with Initiatives of Change has given me, and my husband the chance to work closely with people of different ages and backgrounds. Sometimes there are differences and disagreements but most times it is a learning and enjoyable experience. One thing I have learned from this teamwork is not to hold on to any hurts but learn to forgive and continue walking and working with these team mates of different ages and backgrounds.

I would like some of them to share with us today about what has brought them to this point in their journey and what they see ahead of them.

1. ***Penuo Hiekha*** *is from Nagaland, in North East India. She met IofC 14 years ago. She came to Asia Plateau, Panchgani, as an intern and then also worked as an Interns coordinator. She has been working closely with Niketu and Christine Iralu who have been to Japan and is now working with others from different parts of the North East of India. She is a Trustee of IofC India.*

Penuo Hiekha's sharing

Accepting the wrong and realizing the mistakes that I have done, saying sorry to my childhood friend and mending a relationship has opened up new opportunities in my life. Yes, the reconciliation process was not easy because I had to do away with my pride and ego which I had become a victim of for a very long time. However, listening to the inner voice and obeying it has helped me to reconcile with my friend and it has opened up new perspectives in my life.

Coming from the North Eastern part of India where there is political unrest, corruption and tribalism which have hindered growth in many ways. However me as a young person I did not give up hope because I know there is a lot of young people who are willing to take up leadership and responsibilities. Besides all these challenges, we also recognise that there are things that we need to do together and that's how we have been working with elders realizing that we need to share the responsibilities and the leadership together.

I work very closely with social workers. I do programmes for youth leaders, for women, and government officials. I do work with cross sections of diverse people. Believing that the youth are the future generation to take the nation forward, my primary focus is to empower young people.

The North Eastern region of India has been facing increasing challenges with the search for identity and the freedom from want. For decades the region is coping with pressure arising from its ethnic division leading to unemployment and environmental degradation. During the lockdown three of us have started a new initiative called 'Weaving a New Society - threads for a collective leadership. Weaving a New Society is the start of a conversation to weave a new narrative for the North East, one of hope and inspiration and a reduction in hate and selfishness. With the aspiration that a common quest for guidance will be the first step towards bringing about goodwill and stability in the region. The current crisis exhibits that each individual is responsible and important for the proper growth and

functioning of a society that's where I am part of creating new era of hope for the North East and for the world.

Arigato gozaimas.

2. ***Himanshu Bharat*** *was a social activist in North India when he met IofC in 2009. After several years of working as a full time volunteer with IofC, he is now based with his wife and daughter in Bhopal, the capital of the state of Madhya Pradesh . This is the first state in India to set up a Department of Happiness and they asked IofC (India) to work with them by training their Government officers and citizens especially in the regular practice of listening to the Inner Voice. This has brought about many changes in the State. Himanshu is working on this and he will tell us more.*

Namaste, Dear Friends,

The Happiness Volunteer movement started by Initiatives of Change volunteers. As Happiness Volunteers, we aim to bring happiness in millions of lives. In this COVID-19 lockdown period in India, we realized that the daily wage workers and many other citizens need our help, our support. Some even don't know whom to ask for help or who can help them?

We as Happiness Volunteers are bridging the gap between the government officials and people who are affected by lockdown. Through this many stranded people are now getting food and accommodation.

In this pandemic situation of the world, we're able to deliver the best by helping more than One hundred and fifty Thousand plus stranded people across the country. We are fortunate to have 550 Happiness Volunteers as an extended family in 23 states of India. All this because of listening to the Inner Voice.

We had also invented * *Helping bank* *. Our colleagues found that many people are getting ration/ food from the government and from other organizations but not all necessities. we received few calls from crying helpless women that *their children are very small (one year, two years old) unable to eat grains, we do not have money to buy milk, medicines, their infants need nutrition on daily basis*, at the same time we got the

idea that a helping bank should be created to help such women. Some friends of Happiness Volunteers donated funds, from which we are crediting Rs.500 directly to such women.

Sanitary pads distribution campaign

Sanitary pads distribution campaign in 23 States by volunteers to ensure that for my sisters those four days of the month are safe hygienic and disease-free. We appeal to all social workers, nonprofit organizations in state governments, central government, and those who are distributing food in lockdown to add sanitary pads in the Ration kit. Our idea accepted by many organizations

I am ready to Listen

In this covid-19 situation many people are suffering from depression and anxiety the problem there is nobody to talk and listen to them we started a platform where we are ready to listen.

We designed an online program where people can share their inner feelings and this program can help them to empower. This program reached to more than 12000 people and still counting.

We get to learn that when all doors are closed we should start going inside and listen to our inner voice, you will be surprised to get answers to all your queries.

In this time of crisis, the happiness volunteers helped people being on the path of love, care, prayer and Trust.

It's an opportunity if we are able to help someone. Thank you very much.

3. ***Damko Wangyal*** *is a Tibetan refugee living in India since the age of 6. We in India are indeed fortunate to have living on our soil His Holiness the Dalai Lama of Tibet and many Tibetans who add to the diversity, and spirit of compassion and acceptance that they bring to wherever they are. Wangyal is an artist specializing in stone painting and Zentangle. He has also done a Masters degree in Social Work and after working in the fields for sometime, he is now working with IofC. So, I will hand over to Wangyal.*

Damko Wangyal's sharing

Thank you for this opportunity to share.

Listening to the inner voice and obeying it has really changed so much in my life and inspired me to work for the people around me and the community where I belong.

My sense of understanding what is right and what is wrong had been limited with my little understanding of self and experiences that I collected around me with fear and guilt. There are many wrongs which I thought were ok because others were doing the same.

Engaging with initiatives of Change has helped me to see deep down in my heart and consciously decide what is right rather than acting on assumption and fear.

One of the examples of that is - After my graduation, I got a scholarship for further studies of 20,000 Rupees from the Tibetan government in exile but instead of using it for the course I spent it on other things feeling that the course was too difficult for me. I left the course but I had not informed the scholarship office and never felt a sense of wrong about it because there are many others who do the same thing. But listening to the Inner Voice has brought that experience back to me and challenged me to deal with it.

I went back to the scholarship office to return the money. The scholarship officer was really surprised and told me one thing that has really changed my life. He said, There are many people who took the scholarship but none came back or even said thank you but you are here to return the money. He said he can't take the money back because there is no specific account for such things but he said if you really want to return this money make sure that when you grow up you will give a scholarship to someone who really needs it.
At that time, I realised that if I am honest with myself and listen to the inner voice, the whole Universe is ready to support me.

My second experience - Growing up in Tibetan refugee schools I came to understand my country and the struggles that my people are going through. I used to continuously hear the news of discriminations, killings, and the struggle of Tibetans in Tibet. I developed a sense of hatred and ill feeling against the Chinese people. Wherever I found them in India, I wanted to hurt them and make them feel pain so that they know what they are doing in Tibet. But listening to the Inner Voice has told me to break this chain of hatred and become someone who breaks the hatred, and builds friendship between our peoples. I was able to travel with my Chinese friends to the Tibetan Refugee settlement in India.
The way I look towards the Chinese has completely changed for the last several years, now I look at Chinese from a different view. I see the possibility of building a friendship with someone whom I used to see as an enemy. I believe that friendship is the bridge to build trust and respect.

Leena Khatri

So we heard from Penuo about how mending and all relationship which had gone sour in childhood helped her to become a team mate with others in weaving a new society and new fabric of society in North East India. So doing that correction built resilience in her to become a change maker.
Then we heard from Himanshu about how regularly increasing that practice of listening to the inner voice of that connection gave him the thoughts of building an army of Happiness Volunteers.
And we just heard from Wangyal about the importance of recognizing hatred in one's heart and finding a way of building trust and respect for people that you don't see as friend before. But that part started for him when he was honest about not being honest about some scholarship that he had got and misusing it.
Thank you for your kind attention in listening to us. Perhaps it is time now to listen together to the voice of wisdom within us. We come from different cultures and different religious backgrounds . Yet in a time of world wide crisis as we are facing now, we need a wisdom greater than human intelligence to find inner strength and overall resilience. Could we be quiet now for some time and be open to the thoughts that come, and you may like to note them down either on your phone or in a small book with a pen so that you don't forget them. After that, anyone who wishes to , will have a chance to share your thoughts with the group. We must not leave this place without hearing from Mr. Siddharth Singh who is a director of Asia Plateau. We will hear from him.

Mr. Siddharth Singh

Thank you. I will keep it brief and I am going to talk about only 3 points which are connected with IofC and what IofC wants to do in the world, all what IofC needs today.

1. The first idea is my drawing from understanding Franc Buchman's life, the way I see Franc Buchman and life he lived was he used everything that he had access to to serve the world. I find this in a very simple idea but very challenging idea to live. I have grown up with a lot of privileges in my life. Idea of using all my privileges not for my benefit but for world's benefit is a challenging idea that I struggle with. That's one of the core things that IofC is trying to do in the world. Challenging each one of us and inspiring each one of us to use our privileges to serve the world. That's the first idea.

2. Second thought, is IofC both in India and in Japan and the rest of the world need to invest in the future? Are we preparing for the future world and IofC's place in the future world?
   You heard from aunty Leena nurturing you and mentoring you over the years to prepare them as change makers in the world.
   So my thought for everybody on this call is plan each one of us take on to mentor 5 future IofC leaders. Everyone taking 5 young people and preparing them to make a difference to the world with IofC ideas. You can chose your favorite 5. But come it to them. Come it to care for them to challenge them to help them grow for the future of Japan but also for the world. I reminded Irene Roe's book "For Love of Tomorrow". I think that's idea that all needs to hold in your hearts as you invest in the future.

3. The third idea, that is a personal dream is to create a better partnership between India and Japan to serve Asia Pacific region.
   I know the business community through ICB or CIB has a very strong connection in Japanese and Indians team. We have also had some young Japanese come to India spent time at Asia Plateau as interns or volunteers. It has some Indians who have been to Japan in School Programs and other, I have been there for International Forum three years ago and few others. How can we take a friendship and our connections to the next level to serve this region? I don't have any answers for this but I think if we all search together, we will find how do we strengthen our relationship between India and Japan? Asia Plateau is a center that belongs to all of you . Thank you very much.

Quiet Time, hearing from the heart Mr. James Cordiner

As you may see this image, what does it bring to the mind? Is this a good reflection of your life? I am not sure if your life is like mine, but for me I can say one word it's busyness. Busy with work, busy with my life admin, and busy trying to help others around me.
So the question I guess when I ask is when was the last time you saw took that time for yourself just listen?
So why the quiet time is so important for us? For me personally I think it's important to take time to listen to what is risen in the heart, what is your heart trying to say? Then for those who are spiritual like myself, I think it's also perhaps the time when the God of our understanding can communicate to us and we can find out through listening what is on our heart and take our opportunity to hear from it.
I would like to show you a little drawing to represent an analogy of what's your life might be like.
So, can everyone see this drawing? It's a little bit basic, but excuse my drawing skills.
Just imagine this is your personal car or your life like Mazuda, that's a car.
Car is like your body. You have to make sure you take care of it, filled up with fuel and keep running. In driver's seat is like yourself, your soul, your heart. It knows where needs to go and drive your life. Does anyone know who are back seat driver is?
That's the person you like to think they are driving they want to tell you where to go, how to drive, always giving feedback.
For us, that's the ego, a little voice in a back of our mind that never shuts up and always giving us advice, telling us what we have to do next.
So, when we are busy, I think it's easy for ego to run a show. In quiet time, this gives us a chance to actually listen to what is heard trying to say about the real direction of our life.
Also, we get a chance to, also checking with our body, may be that's trying to say something, are we too stress out of having out of fuel, do we need a break.
A recent example for me was earlier this week when I was having a lot of stress coming from my backpain from my neck down to my hips.
Writing in my quiet time, I was in a phone, perhaps this is trying to tell me that actually I just need a break, I just need to stop to chill and relax which is, in a sense it's hard for me to do. Actually I went to a doctor who gave me massage, tries to help and fix my back, but pain didn't go away, but in the next day after listening to the quiet time, I just rested in the morning and by the end of the day, I was feeling so much better.
The other thing I wanted to point out is not only it's important to have a quiet time but it'

s important to share. During the life, we get thoughts and promptings which remain just thoughts and promptings unless we write them down. It's only when write them down they become good ideas, but only just good ideas unless we share them with others where they can be realized.

So, for me I try to make it a daily habit, but it doesn't always happen, but even if it's just a couple of minutes, I find it very important for myself. Many opportunities to share, and I hope one day we can do more quiet times together.

So, let's start with our quiet time I think roughly five minutes, sounds good?

If you are not quite familiar with quiet time then, as I had been talking about, just try to listen is my heart trying to tell me something, is my body trying to tell me something. OK, let's begin.

So, for me I am feeling grateful to be able to connect with Japanese team and international team, grateful for technology of ZOOM and I am grateful for the time of quiet. I feel my heart is trying me not to let my life be defined by busyness. You know "less is more."

Thank you.

Session by Northeast Asia Youth Forum Participants

The Japan-China-Korea Forum (official name: Northeast Asia Youth Forum) is a university student exchange programme organized by the Korea MRA/IC Association for one week every summer since. It has been held since 2004 with the theme of "The Role of Youth for Reconciliation in Northeast Asia". The hope is to foster friendship and trust among the youth of Japan, China and Korea. About 20 students each from Japan, China and Korea participated in the program.

Session participants: Yu Ishigamori, Takashi Ogawa, Yoshua Oda (absent), Yuna Shimeta, Eunnuri Park, Minseong Kim, Dannan Zhao, Suwon Byeon, Atsushi Suzaki (moderator), Mayu Homma

Session Contents
1. Message from Dr. Kwang-Sun Cha (Chairman of MRA/IC Korea) (see below)
2. Self-introduction by participants
3. Free talk on the theme
Remarks on the Forum, Impressions and Opinions on the Sub-Theme.
Park: Including a familiar topic in the sub-title (current affairs etc) would make the exchange of opinions more realistic.

Ogawa: It was necessary to prepare in advance before participating in the forum in Korea. If we had done some preliminary research, we could have had a more in-depth exchange.

4. How should the international exchange be in the future?
Kim: At the moment, we continue to communicate through email, but I am not sure if this is effective.

Ishigamori: I am personally participating in online exchange activities, and am exchanging with university students in Singapore and the US through ZOOM. Online, we can connect anywhere in the world and experience not only language skills but also learn about cultures and different ways of thinking. If we organize it as a group, we can have international exchange in the midst of Covid 19, even if we don't have overseas experience.

Ogawa: I want to provide a space where foreigners in Japan and people who are interested in different cultures can interact with each other, not just online. I'm currently studying abroad in Taiwan, and I'm sharing a room because I want to be in contact with people outside of Taiwan as well. I think it would be good if the IofC Association could provide an opportunity to share the same space in real time since we can see each other online for just scraps of our time.

Homma: Now that we live in an Internet society, we have a good opportunity to involve people who have no experience in international exchange. How can we make the most of the time when we can only interact online, so that we can further enrich the forum next year and beyond?

Minseong: It was mentioned that this forum could be held online, but I am concerned that there are many restrictions on the programs that can be used on PCs in China, such as LINE and KakaoTalk, so we need to consider the Chinese side. I would like to increase the number of meetings to once a month or so to expand the possibility of sustainability.

Moderator's summary
The theme and Sub-title of the forum: The theme is too large. It would be better to use a topic that is familiar to the participants or something timely. I would like to use a theme that can be put into practice for future activities.
How should international exchanges be conducted? Focus on online, but don't forget the importance of real time. Being online makes it possible for us to have the forum constantly. Also, the hurdle to participation will be lowered.

Director Cheng: I am in charge of international exchange at the Bar Association and, since the Hong Kong issue is often discussed, I am thinking about how to respond to this situation as an organization that advocates democracy. Political neutrality is not about interfering with people or doing nothing, but about how to deal with people based on the values we have. I am sorry for the youth because the world is running into a direction that is not exciting and not positive. I was very happy to see so many positive things in this session.

Comment: I am participating from Kyushu. I thought that the Forum for Japan-China-Korea was only for young people, but today was the first time I listened to your talks and I was impressed.

Kyushu is geographically close to Korea, and there are many Korean people here, and I myself love Korea. It is good to have a Japan-China-Korea forum for young people, but I hope that we, the senior generation, will also have opportunities to talk with people from Japan, China and Korea.

From a roundtable discussion after the Japan-China-Korea Forum session:
During the session, I felt much encouraged, watching the participants who were nodding their heads and showed their interest in what was being discussed, which motivated me to continue my activities.

- I would like to make this session an opportunity for the Japan-China-Korea Forum alumni association.
- I would like to continue to connect with Japan-China-Korea Forum alumni beyond the year of participation.
- Taking this session gave a precious opportunity for those of us who already graduated, working in society, to take a chance to exchange with each other internationally.

The message from Dr. Kwang-Sun Cha The Chairman of MRA/IC Korea

Dear Honorable Yano Hironori Yano, Chairman of International IofC Association in Japan, Suresh Vazirani, Chairman of International IofC Association, Dr. Ramez Salame and Dr. Wadiaa Khoury from Lebanon and participants in the 2020 IofC International Forum.

First of all, although I was not able to participate in the "International IofC Japan Forum" in person this year, I am very happy to share my message by writing to you.

Since 2004 Moral Rearmament (MRA/IC) Centre of Korea has been hosting the Northeast Asian Youth Forum which brings together students from different universities in Korea,Japan, and China. The first Forum in 2004 until 2019 we had the theme of "The Role of Youth for Peace and Prosperity in Northeast Asia".

We are very sorry that such a meaningful event cannot be held this year due to the Pandemic of COVID-19. However, I am delighted to hear that those from Japan, who have taken part in the Northeast Asia Youth Forum hosted by MRA/IC Korea, will take part in the online version of the 2020 International IofC Forum in Japan, to exchange what they have learnt from this Forum as well as to seek their next step in what they can do in their life. I would like to take this opportunity to thank the youth of Korea, Japan and China for their participation in the discussion.

"The Northeast Asia Youth Forum" is a multilateral event which I have been deeply committed to, and I long to make the dialogue happen, not just for the youth of Korea and Japan, or Korea and China but also to offer the opportunity for the youth of these countries to exchange their thoughts in order to be able to build trust and to support each other for the sake of the future.

Of course, while the efforts and interests of these three countries at the governmental level are very important in terms of peace and cooperation, joint prosperity, cultural exchange, environmental development and protection, economic development, etc., in the Northeast Asian region, I believe that cooperation at a private level is of the utmost importance.

In this sense, these Forums (which are all non-governmental organizations), including the "International IofC Forum" organized by the IofC Association of Japan, "The Northeast Asia Youth Forum" and "Korea-Japan University Student Forum" promoted by the Korean Headquarters of Moral Rearmament of the World (MRA/IC), are very significant.

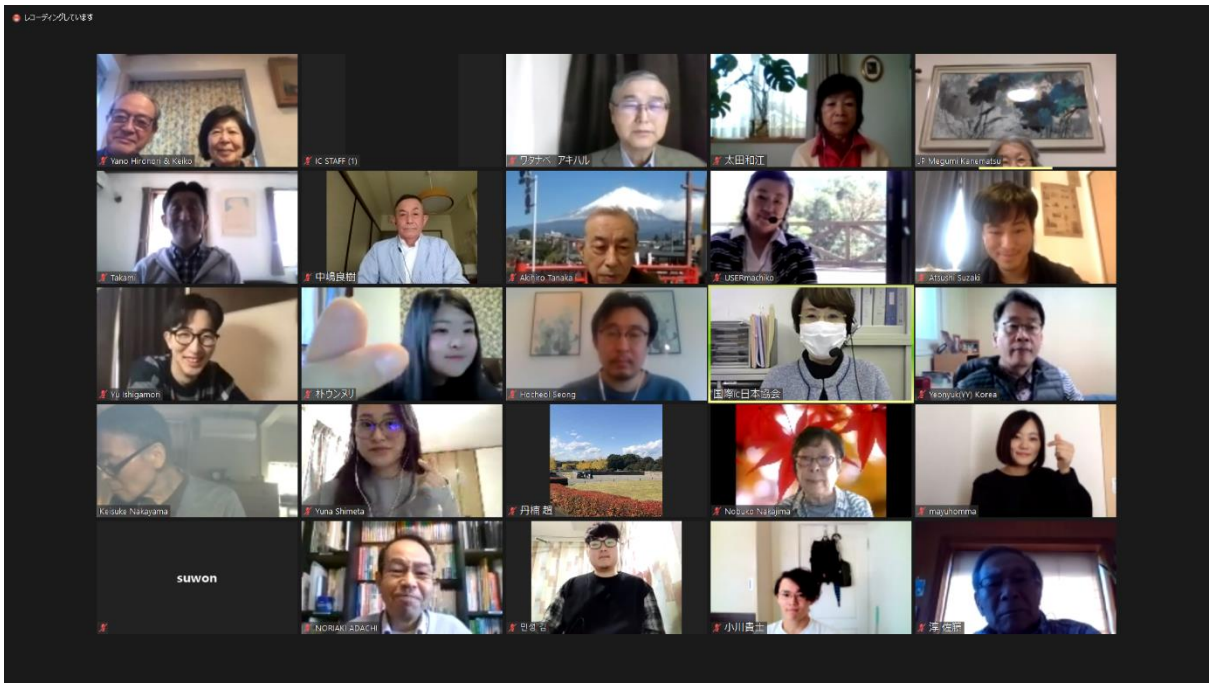
This year, the International IofC Association of Japan will host the "International IofC Forum 2020" under the subtitle "What kind of future do we want to build?" Although the leaders of MRA/IC from all over the world cannot meet face to face, I sincerely hope you have meaningful and in depth discussions online.

In addition, I sincerely hope that COVID-19 will be over as soon as possible and the Northeast Asia Youth Forum for Youth will be held again in 2021 in Seoul so that we can provide the opportunity for dialogue and meeting among Korean, Japanese and Chinese university students, and for this I would like to ask for your encouragement and cooperation.

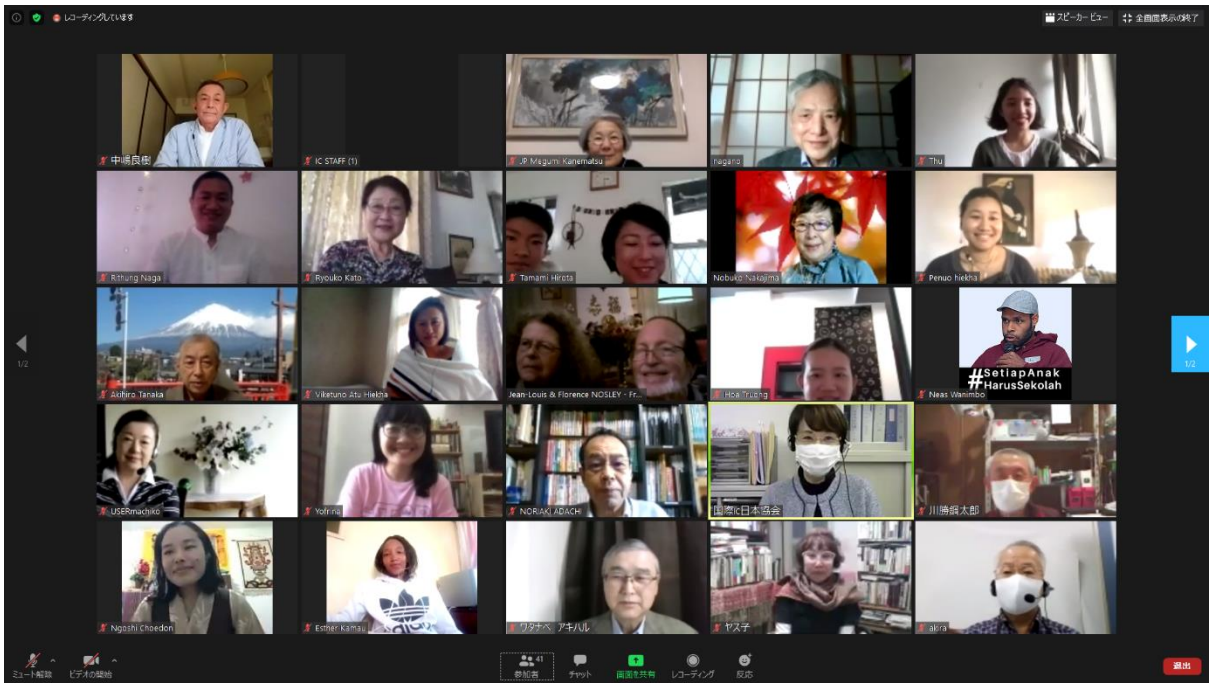
Finally, I look forward to your further input and cooperation during this Forum and wish you all the very best and that it will be a very fruitful time.

Thank you very much.

10 月 25 日(第 2 日目)AM



10 月 25 日(第 2 日目)PM



Session hosted by IofC School Visit Program team

■ **Introduction about the IofC School Visit Program**

The School Visit Program started as a pilot project in 2002. It became a two-month program, though shortened to one month since 2015 with a grant given by MRA House. This was augmented in 2019 by a grant from The Tokyo Club, enabling us to visit many more schools and universities. In ten years between 2009 and 2019 (except 2017) we visited 248 schools and universities and had exchanges with over 20,000 students. This program which provides both international understanding and cultivating one's heart and mind have been well received and highly appreciated at all the places we visited. The program consists of IofC songs, a skit which has a theme of how to bring harmony in a family, sharing experiences of change, 'quiet time' and cultural presentation. We usually add workshops for senior students to look back at their life and to make their life more meaningful.

■ **What I had learned and find still useful in my life during my stay in Japan**

We invited 38 friends from 16 different countries and areas for the last ten years and the ten of them from Taiwan, Indonesia, Kenya, Vietnam, Tibet and India took part in this session. We asked them to do self-introduction and to share the things they had learned and are still feeling useful in their life during their stay with this program in Japan.

1. Ms.HSIAO Yung Wei, Taiwan

【Profile】 Participated in the School Visit Program (SVP) in 2015. Born in 1985 in Taiwan. Completed Master's Degree in Patent at Taiwan University of Technology and Science. After graduation worked as a researcher for a consulting company. Attended the Asia-Pacific Youth Conference (APYC) in Taiwan in 2014. Trained as an intern for 5 months at Asia Plateau (A.P.) from September 2014. Has stayed in Korea to study Korean for a semester as an exchange student and also stayed in Japan for one year with a working holiday visa after the SVP. Now, is working as a legal consultant for an accounting agency. Christian

Thank you for inviting me to join this meeting.

My name is Wei. I am from Taiwan. I joined the School Visit Program in 2015. Afterward I was in Japan for one year. After that I came back to Taiwan. I am working in Taiwan now.

So, the thing that I was interested in Japan was that we went to schools and the students were very curious about all the people from other countries. I was thinking that the things we were doing were very meaningful because they haven't met people from other countries.

What I have learnt in IofC Japan and all the IofC programs. They were communication skills and working together as a team.
I heard it ceased this year because of the Covid-19 and I hope we will have another school visit program next year.

2. Ms.Penuo Hiekha, India

【Profile】 Participated in the SVP in 2009. Born in 1982 in Nagaland, India. Completed Bachelor's Degree in History. Trained as an intern at A.P. in 2007 on Leadership and Personality development, and also served as a coordinator for Asia Plateau Internship Program 2009. Currently she is serving as one of the Trustees of Asia Plateau, IofC center in India. She conducts program for Schools and Colleges, facilitates dialogues for youth leaders of different communities. She conducts training for various State Governments on ethics and values for public governance-excellence in service delivery.

I remember in one of the schools I asked a primary class, what are you most proud of Japan? A small boy responded " I am proud of Japan for not having a war for the last 60 years. That answer was one of the most valuable learnings and the best gift I received from the school program. It taught me that hatred, anger has no place for building a just society. Besides conducting value education trainings for students and teachers. I also facilitate dialogues for honest conversations among communities. There I often talk about the school boy 's answer where it clearly signifies Japan's ability to forgive and bringing together its people to the reconstruction of a powerful nation. This is the message of Japan I carry

along with me and share with others when I am facilitating difficult conversations.

3. Ms.Yofrina GULTOM, Indonesia

【Profile】 Participated in the SVP in 2013. Born in 1989 in Indonesia. Graduated from the Education Department at State University of Medan and then continued her study in the Department of Communication Science. Attended different IofC conferences and participated in the Asia Pacific Youth Conference (APYC) held in Japan in 2012. Part of the Asia Pacific Coordination Group (APCG). Has taught English at schools and education centers. Now, teaches as a lecturer at a university.

Greetings from Indonesia. My name is Yofrina.
I am proud to be a part of the School Visit Program in 2013. And I would like to thank Hisako Takahashi-san again for recommending me to be a part of this program.
One of the touching moments was when we had a city tour then meeting a Japanese man. When he learnt that I was an Indonesian. He said that 'On behalf of the Japanese people I would like to express my apology for what had happened in Indonesia during colonialism. I learnt about Japanese Military atrocity from school and books, but this experience gave me a lot of understanding. This experience has changed me in a way I could not have an image.
My experience of the School Visit Program is useful in my life, especially my journey as a teacher and joining some of the Initiatives of Change (IofC) activities which are related with education in Indonesia such as Positive Teacher's camp and Schools Visit. Thank you very much for this chance.

4. Ms.Atunuo Hiekha,India

【Profile】 Participated in the SVP in 2014. Born in 1986 in Nagaland, India. Completed Master's Degree in Sociology. Attended IofC programs held in India and participated in the APYC held in Korea in 2013. Has taught sociology as subject teacher two years. Now, works as a radio presenter and is an initiator for preserving environment and biodiversity in Kohima, Nagaland. Christian

I am Atunuo Hieka and many know me as Atu. I am from Kohima, Nagaland which is in the North-East Part of India. I belonged to the 2014 batch of the School Visit Program.

Through the School Visit Program I was introduced to the Japanese culture, life styles and social structures learned through homestays.

These experiences paved a way to what I am initiating in my humble town, now. I have a team called Green Team Kohima which is purely a free volunteer service group to a community building. It is aimed at initiating, conserving and restoring green spaces in Kohima town. I observed that Tokyo no matter how high-tech it is as a city has green spaces in and around the city. This really struck my heart. I also observed that schools, universities and even at home stays waste has been managed very well by the Japanese people. I along with my team have visited schools, colleges and all the localities in my hometown for the segregation of waste at grass root level. One thing I have taken seriously and a lesson I learned from

Japan is "kindness can be returned through kindness".

During the nationwide lock down due to the pandemic Covid-19 me and my team have raised money to provide rations for the poorest in the poor. Each ration cost us USD 22. We reached out to more than 290 families. We also observed that during this pandemic, many residents of my town have opened up to work for community building through these green initiatives and these are all free and voluntary. So, these initiatives of cleanliness, sanitation, recycling, restoring of green spaces and waste management are lessons I took from Japan. I am very happy to say that the School Visit Program has been giving a very big impact in my town and in the words of Dr.Frack Buchman Japan has been a lighthouse of Asia truly. Arigatougozaimasu.

5. Ms.HUYNH Thu, Vietnam

【Profile】 Participated in the SVP in 2015. Born in 1992 in Vietnam.

Completed Bachelor's Degree in Marketing at University of Economics of Hochiminh City. Worked as an Admin. Executive at her family business company. Went to Italy in 2017 and stayed

for two years and completed a Master's Degree in Marketing and Innovation. Now running a business, making notebooks and other handmade stuff to promote the local crafters.

" Good afternoon everyone, my name is Huynh Hong Phuoc Thu and I am from Vietnam. I was taking part in SVP in 2015.
The most valuable learning or experience I had during the time of the SVP in Japan which is still useful for me:

I think my experience in Japan is a treasure for me because it built who I am today even though I am no longer working in a NGO. First of all, I think education is the most important thing for the development of a child. And a good life value is a key to becoming a good human being. I still keep the IofC's value as my core value to behave accordingly in every situation of my life. It makes me very happy. Second thing which is still useful for me is that: The learning when working with other friends from different countries and cultures. It means: The mutual understanding, being open-minded and accepting different cultures are a must to build a good team especially when you work in an international environment. This experience in Japan actually helped me during the time I lived in Italy when I had to live in another culture and work with friends from many countries.

Last thing I want to say is that I greatly appreciate that the team gave me the chance to experience the Japanese culture and immerse in the IofC's atmosphere during the time I visited Japan.
Thank you for listening."

6.Ms.TRUONG Thi My Hoa ,Vietnam

【Profile】Participated in the SVP in 2016. Born in 1991 in Vietnam. Completed Bachelor's degree in Foreign Trade at University of Economics of HCMC. Participated in the APYC held in Taiwan in 2014. Worked as an Instruction chef of a cooking class for foreigners until 2017. Moved to Bangkok to work in a Travel booking company in Dec.2019 and came back to Vietnam due to the outbreak of Covid-19. In Oct. 2020 until now, move to Kuala Lumpur to work at a BPO company.

Thank you for letting me share my experience.

My name is Hoa. I was a School Visit Program participant in 2015.
I have learned so many things through this program. Now, I would like to share the two valuable learnings.
Firstly, it was my first time to attend an international action program that happened for such a long time, so during the program I could see a lot of differences in culture between the countries. Also, I could see many common issues we all have to face. From this learning I could know how to respect and treasure differences to work together in a multicultural environment to reach a mutual goal.

Second learning; It was an opportunity for me to find and also a reminder of all the IofC values, sharing with friends in Japan for my later journey as well. Thank you so much for listening.

7. Ms. Ngoshi Choedon, Tibet/India

【Profile】 Participated in the SVP in 2019. Born in 1992 in India as a third generation Tibetan refugees. Graduated the master program (Business management) at Guru Gobind Singh Indraprastha University, Delhi. Trained for 5 months as an intern with IofC at A. P. from February to June 2017. Part of the outreach team of IofC for the last two years after that, visiting schools and universities and communities in different parts of India and Nepal to deliver IofC programs for the young generation. Now working as an accountant at the Tibetan Children's Village schools head office and doing a Diploma course on Buddhism online. Also is part of the IofC Tibetan group called 'Tibet I-care'.

Konnichiwa! Good to see all of you. My name is Ngoshi. I am a Tibetan refugee born in India and a part of Japanese School Visit Program in 2019. One of the learnings I would say it's about caring. Throughout the program we were given so much care and attention by all the Japanese members and making our stay memorable and meaningful.
This is very healthy to understand the value of, by care and attention to the people that come to our Indian center A.P. Sometimes it is not so easy because once I was coordinating an initiative program for seven weeks for 12 youth from different parts of the world, but what I have received in

Japan last time the care, and I also tried to care operating from the same spirit. Thank you.

8. Mr. Riathng Ngullie, India

【Profile】 Participated in the SVP in 2019. Born in 1985, Nagaland. Bachelor of Arts from Nagaland University. Worked as a Global Travel Agent (US/UK Based Website) at Gurugram, India. Managed a sales Business for Packaged Water Company, Nagaland. Attended the Asia Pacific Youth Hoho (APYC) in 2012. Selected and trained for 5 months as an Intern with IofC, India at A. P. in September 2013. Later joined IofC, India outreach volunteer team for more than two years. Currently lives in Tamil Nadu, India, and is looking to pursue Studies on Human Rights. Practicing Christian.

I am Riathung from Nagaland state. It's in the far Northeast part of India. My state is bordered by Burma, Myanmar. I was a part of the School Visit Program last year with Ngoshi who just shared. I have so many experiences to share, but I will try to make three small points. I realized that when we visited different prefectures, each prefecture has its own speciality.
Coming from my own region, it was an eye opener for me to see that. Focus on each speciality. For example, in Shizuoka, was known for quality tea produce. Other prefectures were giving, focus on art, clay-pottery making. So, it is something wonderful.
And with that insight I got, I felt that each region like people has to be appreciated for the differences and similarly realizing to develop my relationship, by acceptance of people's diversity.

The second one was; I realized that most of my young Japanese friends whom I have met have challenges with their family, some dysfunctional families and that was something that struck me, with the advancement in lifestyles and technology one has to look at improving human relationships.

Lastly, when I was encouraged by the school students at Shizuoka after I had missed four shots at the tennis ground and succeeded at just getting to hit one ball, and they all clapped from behind, this action uplifted my

human spirits and still makes me hopeful, when I think of it, as in my society I was shamed for many reasons, as for missing the shots! This incident made me realize how important it was to appreciate and encourage people often.
Ending with one thing, yesterday Mr.Vazirani shared on the Philosophy of 'KAIZEN' which, I believe, means continuous improvement, I believe and try to implement the same Kaizen in my life.

9. Mr. Neas Wanimbo, Indonesia

【Profile】 Participated in the SVP in 2019. Born in 1995. Bachelor in

Informatics Engineering at Tanri Abeng University. Participated in the APYC in 2016. Became an active member of IofC in 2016 in Indonesia and had been Intern for four months from September 2016 at A.P.in India and continued with an Outreach or Action for Life (AFL) program conducted by IofC India for 7 months from March 2018. Now works as a freelance web-designer and is running a non-profit organization called Hano Wene foundation focusing education in Papua. Hano Wene foundation helps facilitate libraries in disadvantaged areas by facilitating libraries in schools and villages.
Christian.

Hello everyone! Nice to see you all here, some familiar faces. And from every part of the world, it's nice to see sisters and brothers. My name is Neas. I am from Papua, Indonesia. I was a part of the School Visit Program last year. We were in the same batch, with Ngoshi and Ria.

What I learned from this program is about the education system in Japan. To see how teachers in Japan teach with patience. The teachers in the school when they teach subjects they were very patient to support how their students were doing which gave impact on students. They are very friendly and kind to students. In Indonesia teachers sometimes just teach subjects, but what I experienced in Japan was very different.

And the school system also, the standard of the country, every school must have a swimming pool and a field. They also focused on sports.

These things in Indonesia we don't have.
It opened my eyes to see the educational system in Japan.
After the program I returned to my country, now I am running a project focusing education in Papua itself.
So, where I come from, the education system is very bad. We also have very few teachers. We don't have books, that's why I started my non-profit organization. We are providing kids in remote area free books to study and learn.
So, with what I have learnt during the program in Japan, I am also trying to implement my project, so I can increase the quality of education in my area. It started from my village and now we are expanding to almost six places, supplying books, supporting kids and community network in Papua. The Japanese SVP helped me to open my eyes to see how the education system should be. Now I can empower the teachers and I can support kids for them to get a better education. Thank you so much.

１０. Ms.Esther KAMAU, Kenya

【Profile】 Participated in the SVP in 2013. Born in 1992 in Kenya. Graduated

from Masinde Muliro University Science and Technology (majored in Social Work and Community Development), Nairobi. Worked as a volunteer for Kenya Red Cross and took part in different social activities including the Clean Election Campaign done by IofC Kenya. Now, works at her sister's cosmetic shop and visits the elderly and the vulnerable as a volunteer. Christian

Hello everyone. My name is Esther Kamau. I am from Kenya. Happy to be here.
What I learnt most in my stay in Japan, first was the use of the quiet time which I still use to date and I teach it to my friend about it.

Second is appreciating different cultures as well as religions, because we have a lot of religions in my country.

■ Sharing of three alumni friends of their decision or initiatives which are related to the theme of this Form,

"Tranformative resilience in times of crisis. Recognizing a crisis as an opportunity! -- What kind of future do we want to build? --"

1. Ms.Yofrina GULTOM (Indonesia)

Konnichiwa! Greetings from Indonesia.
It is an honor for me to have a chance to share in this forum.
This is my fourth visit to Japan, but this time I don't need my passport and visa. What I need is internet connection. ☺

Related with today's topic, recognizing a crisis as an opportunity, I would like to share about my decision on going to Taiwan to study Chinese language and culture.

During the quarantine, I reflected that I wanted to learn something new and I am passionate about language learning. In March, I then decided to apply for a scholarship to learn Mandarin in Taiwan. I surrendered to God and I believe that things happen under God's plan.

A few months later, I was informed that I get the scholarship to learn Mandarin for 6 months, sponsored by Ministry of Education in Taiwan. I was supposed to depart last August but due to COVID-19 outbreak, I have to defer my class. I will depart to Taiwan after the government allows to issue non-degree students visa. So, I probably leave in November this year or in February next year. I trust God's timing, it takes patience and faith but it worth the wait.

I want to understand more about Chinese culture by learning their language because culture is important in language learning, and also most of my students are Chinese Indonesian. By learning the language, I will also gain cultural insights. It was 22 years ago when racial violence against Chinese Indonesians broke out in Indonesia. Over 1,000 died and thousands more were bankrupted and fled the country. My students who had not been born yet, called the generation Z, are highly aware of this side of history despite

having no direct experience with the incident that they heard the stories from their parents. The memories are painful.
Last June was my last month teaching at the school. It has been 6 incredible years for me teaching there. Some of my students' parents came to me saying that they were sad that I would no longer teach their kids but they do support me to learn Mandarin and I am touched beyond words.

So, what kind of future do I want to build? I want to contribute in education field because I believe that education can contribute to the betterment of society. Having reflections with students before the online classes end are simple things to stay connected with my students and to practice gratitude.

While waiting for visa registration, I teach online at a university and run online gatherings with IofC friends in Indonesia.

Dear IofC global family, I would like to end my sharing with a quote by Mahatma Gandhi, "Live as if you were to die tomorrow. Learn as if you were to live forever. It's the quality of your life that matters not the speed with which you live." So, I am learning to live my life with love and give impacts on my students.

I finally thank you everyone and hope to meet you face to face in the near future. Stay healthy and stay happy. Doumo Arigatou Gozaimasu.

2. **Ms. Ngoshi Choedon （Tibet/India）**

Taking about 'Recognizing crisis as an opportunity' I would like to talk about 'Tibet I- Care' initiatives. So, it was initiated by five of us, Tibetan youth who are a part of IofC. So, we speak about our leanings and experiences received through IofC to our Tibetan community. So that every Tibetan can be guided by the inner voice. Even though we don't have our country's independence, we still know that we can make a difference and we have so much to give to our community and to the world. One of our core members is KP who was a part of the Japan School program 2018.

We had a conference last year in 2019 on the topic of the future we want. We had Tibetan youth discussing 'Am I the kind of Tibetan the future Tibet needs?'. And this year we were very excited actually because funds from other organizations received this year. However, due to the pandemic, many of our plans and programs came to a complete stop. Similar to everyone all over the world, we were confused and challenged to think and plan how to continue our program. In recent months, observing and learning from IofC people also outside it, we have decided to take our programs online. We have started using a social media like Instagram to reach more effectively now.
Now we are planning to run a Peace Circle for women and also do a youth conference online. I am talking about recognizing a crisis as an opportunity. One of the opportunities in going online is that we can have facilitators and participants from all over the world which might not be possible or physically difficult, because people are very busy.

So, one of the learnings that this crisis has taught us is to make the best use of what is available and work from there and adapt. I hope that we are able to take our work forward within our community and beyond. Do keep us in your thoughts and prayer. Thank you for giving me this opportunity to share.

3.Mr. Riathng Ngullie (India)

I was with the Initiatives of Change at Asia Plateau as a volunteer till May 2020. My thought was to apply for a Master's degree in Human Rights outside India, however, with the pandemic all of the plans could not work out.

After I left the outreach program of Asia Plateau, I realized when I was travelling with the team, I always had someone to share different challenges and opportunities with. Once I left the program, I had a thought that 'There are many people who may have never had the opportunity to even share their difficulties and situations of life'. A thought came to me that I should start online platform. I and a friend of mine decided to reach out to people with an intention of offering them a space to share their

experiences of any kind. And our purpose was to simply listen. My friend and I decided to call it a human Library online session.
People begun to share on mental health, the abuse one has suffered physically and emotionally, and many more. In turn that led other people to also want to share their experiences with each other and find support and in the process become support for each other for one's journey.

It was later I discovered that the Human Library concept was initially done in the Netherlands, an IofC way which was inspired by quiet time, inner listening. Mostly the structure of sessions is IofC inspired which I learned from the practices of inner listening.

We thanked all those who took part in this session and closed it.